

この素晴らしいライダーに祝福を！

クラウド、

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もしもデストロイヤーを作った人がマジで魔王討伐するつもりだったら。仮面ライダーファンだったら。衛生ゼア作っちゃってたら。しかし、年齢から後の転生者にそれを託していたら。サポートとして滅亡迅雷のヒューマギアを作っていたら。そして、それをカズマが継承したらという話です。

※この作品でのライダーのアイテムはあくまで転生者が特典で作ったものなので、あくまでモデルにしたものと言うことを理解していただきたい。

## 目次

プロローグ	1
ソノ男、ヒューマギア	5
俺が冒険者で仮面ライダー	12
ボクの仕事はキミのサポート	19
シャイニングホツパープログライズキー	27
コブシを止めるな、アイツを止めろ！	31
カノジヨの目に映るのは？めぐみん視点	43
カゾクの話	46
ケツトウ開始！	51
サクセン会議	55
サクシ策に溺れる	61
宿敵とのサイセン	68
トモに捧げる 迅視点	74
さらば、トモよ	78
ケツチャクの時	82
タタカイの傷跡 アクア視点	87
カレラにとっての仮面ライダー	92
トウジョウ！先輩ライダー、その名は鎧武	97
アラタな出会い	104
迅の復活回のお試し版	107
アタラシイ仲間	110
二人目のレジエンド	115
オレの夢は……	120
認めるモノ、認められるモノ	129

アラタな絆	135
ヤツの名はアーク	142
帰ってきた、仮面ライダー	150
ライメイ轟く	159
ゼロワンのルーツ	165
イツトキの休息	170
意外なアイツの正体	174
オレにナカマは必要ねえ!!	179
オレもお前を認めない	184
イツトキの別れ	190
夜のカイワ	194
セイバー放送開始記念(ちよつと遅いけど) コラボ回	198
【ネタバレ注意】この素晴らしいライダーに祝福を! REALTIM	206
E Side アルカンレティア&アクセル	

## プロローグ

「おいっ！ 迅っ、しっかりしろ、おいっ！」

俺はボロボロになった迅を抱きかかえ必死に呼びかける。人工皮膚が剥がれ、そこから青い液体が流れる……その姿が迅が人間ではないと俺に突きつけるがそんなことは俺にとっては関係なかった。

「アクアツ、回復魔法をー！ー！ 早くッ！」

「無理よ……回復魔法は生物にしか効かないわ」

アクアの言葉にハツとする。迅は機械生命体……回復魔法が効かないのは道理だった。

「カズ、マ……僕はここまでみたい、だ……。」

ところどころノイズがかかった声で弱々しく、迅は言う。

「縁起でもねえこと言ってるなよ！ お前は俺のサポートのためにいるんだろ!? だったら、魔王を倒すまで一緒にいろよー！ー！」

「これ、を……。」

迅がフォースライザーから外したシャイニングホッププログライズキーを俺に差し出す。俺はそれを震える手で受け取る。

「これは……。」

「僕と…君が使った、プログライズキーのデータで完成した、真のシャイニングホップキー……これならベルディアにも勝てる、筈だ」

「お前、これを完成させるために……！」

迅が、玉砕覚悟でベルディアに向かっていった理由がこのプログライズキーを俺に託すためだとわかり涙が止まらなくなる。

「ホントは……ザツ、魔王を倒したら、ザザツ、聞こうと思ってたんだけど……」

迅は涙を流す俺の顔を見て、フツと微笑みその涙を拭う。そして、ノイズが酷くなった声で弱々しく俺に訪ねてきた。

「僕と、友達に……なって、くれ、る……」

「おいっ、迅っ!? 迅……迅……!!!」

その言葉を最後に迅は動かなくなった、それは彼の機能が完全に停止したのを何よりも雄弁に物語っていた。

「馬鹿野郎……！ 俺達はとつくに友達じゃねえか……！」

俺は流れる涙を袖で拭い、彼から託されたプログライズキーを強く握りしめる。

「めぐみん、迅を……頼む」

「……はいっ！」

俺と同じように涙で顔がくしゃくしゃになったためぐみんに迅を預けベルディアの前へ立つ。

「別れの挨拶は済んだか？」

俺と迅のやり取りを静観していたベルディアが前に出た俺にそう尋ねる。涙を乱暴に拭った俺はそれを睨み返し、プログライズキーを構える。

「お前だけは……お前だけは、俺が倒すツーーー!!」

《SHINING JUNP!》

《AUTHORIZE!》

ライズスターターでプログライズキーを起動させ、ベルトにスキヤンし、親指でカバーを弾きプログライズキーを展開状態にする。衛星ゼアから降り注いだ光が鍵穴となり、シャイニングホッパーキーでそれを解錠する。

すると、黄金の親子の二体のバッタのライダーモデルが現れ、俺の周りを飛び跳ねる。

「変身!!」

《PROGRAMIZE!!》

シャイニングホッパープログライズキーをライズスロットに装填し、ゼロワンドライバーに読み込ませる。

展開された巨大な網が二体のバッタを捉え、そのまま俺の体に纏わせる。

《The rider kick increases the power by adding to brightness! シャイニングホッパー!!》

全身黒の状態から黄色のラインが刻み込まれる。

《When I shine, darkness fades.》

「行くぞー！ー！」

俺はライジングホッパーのときより強化された跳躍で一気にベルディアに接近する、それに反応し奴頭を宙に放り剣を振り上げるが、それを振り下ろした瞬間、俺の姿はそこから消える。

「何っ!?」

そして、奴の背後に現れ蹴り飛ばす。

「おりやあっ！ー！」

そこから、さらに連撃をしようとするが下段から振りあげられる剣が俺へと迫る、しかし、さつきと同じように俺の姿は消え、今度は反対方向からのパンチがベルディアを襲う。

「ぐっ！ー どうなっている……！ー！ 間違いない、お前は俺の間合いに入ったはずだ！」

シャイニングホッパーの能力にベルディアは驚愕している。そう、真のシャイニングホッパーの能力、それは戦闘における全てのパターンを演算し、高速で最も有効な手を導き出し実行する力。奴が攻撃を繰り返そうとする瞬間、即座に演算が発動し回避、死角からの攻撃を実行するのだ。

「お前が魔眼で俺の攻撃を見たとしても、今の俺はその上に行く！」

《シャイニング・インパクト！》

俺はシャイニングホッパーキーをベルトに押し込み、飛び上がってライダーキックを放つ。

「はアアアアアア！！！」

「ぐおおおおお！！！」

俺のキックをベルディアは剣で受け止めて防御するが、そのキックに耐えきれず、剣が砕け散り後方へと吹き飛ばされる。

「これは俺だけの力じゃない、アイツが……迅が託してくれた力だ……！ー！ 一人で戦ってるお前に超えられるわけがねえんだよー！」

《BITRIIZE！》《KILORIZE！》《MEGARIZE！》

俺にはベルトの脇にあるホルダーにセットしてある、迅のフライングファルコンのキーをオーソライザーに連続でスキャンする。

「お前を止められるのはただ一人、俺だ！！！」

迅、力を貸してくれ……!!

俺は再びプログライズキーをベルトに押し込む。

《シャイニング・メガ・インパクト!》

「はああああお!!」

ベルディアの死角からを奴を蹴り飛ばし、さらにその先に高速移動  
殴り飛ばし、さらにさらに、その先に移動空中へと蹴りとばす。

右足にエネルギーをため、蹴り飛ばされたベルディアよりも高く  
ジャンプする。

「おりやああああああ!!」

「ぐああああああ!!」

空中からの強烈なライダーキックがベルディアに炸裂した。

グ　メガ

イ

ニ　ン

イ　パ

ヤ　ク

シ　ト

なぜ、俺がこの世界で仮面ライダーゼロワンとして戦うことになつたのか。それは、やはりあの日、アイツと出会い、このドライバーを託された日まで話を遡らなくてはなるまい。

そう、あれはめぐみんとダクネスとパーティーを組んだばかりの頃だった。



## ソノ男、ヒューマギア

「何も出てこないな？」

「ああ、なんとというか拍子抜けだ……せつかくゴーレムがたくさん現れるダンジョンだと聞いたのに……。」

「おい、お前。ゴーレムに殴ってもらえると思ったのに残念とか、思っ  
てねえよな？」

「にや、にやにをいう！」

「思ってたのか」

「思ってたのね」

「思ってたんですね」

俺達はダクネスのDMっぷりに呆れてため息を吐く。

俺達がパーティを組んで数日、キャベツのお陰でそれなりの収入を得たのはいいもののそれもいつまで持つかわからない。そんなとき、受付のお姉さんがとあるダンジョンの調査を受けてみないかと言ってくれた。

そこは嘗てこの世界一の科学者が作ったというダンジョン、その人物が作ったとされるゴーレムがうようよいるらしいダンジョンだった。ただ、そのゴーレムは先に行かせようとしただけで何もしないので何年もの間放置されているらしい。

罨解除をする盗賊職が欲しかったところだが、知り合いで唯一の盗賊職のクリスに頼んでみたが、

『あく、あのダンジョンなら私がいなくても大丈夫だと思おうよ。』

と言われて、断られてしまった。その言葉の意味もはぐらかされてわからなかった。

「それにしても、このダンジョンを作った科学者つてのはどんな奴だったんだ？罨の一つもないけど」

「なんでも、数々の兵器を生み出し魔王軍との戦いを支えてきた天才だと聞いていますが……。」

めぐみんの言葉に俺は一層わからなくなる。そんな人が自分の研究所に罨の一つも用意しないなんて、いや、ここはそもそも研究所で

すらなかったのかもしれないとすら思っていた。

その時だった。

「ふふふ……………」

何処からか笑い声が聞こえてきた。俺達はそれぞれ武器を構え、警戒態勢へと入る。

「今の笑い声は……………」

「アンデットの気配は感じないわね……………」

「俺の方も敵感知が反応してない」

「誰だ！ 誰かいるなら出てこい！」

ダクネスの声にその人物はあっさりめと姿を現してきた、その人物はボロボロのフードを目深に被った少年だった。

こんなところにいる人間がただの人間なわけがない。俺達は警戒を解かずに少年に相対する。

「何者だ、貴様は？」

「さあて、誰だろうね？」

そういつた少年は俺達に背を向けて走り出す。

「なっ、待て……………」

ダクネスを先頭に俺達も走って追いかけていく。

「こつちだよ、こつち」

フードを被った人物は俺達を手招きしながら、先へ進んでいく。一体、何処まで連れていくつもりなんだ？

そんなことを考えていると、隣を走るアクアが肩を指でつついてきて、耳を貸せという合図をしてきた。

『なんだよっ。』

『カズマ、あの子。人間じゃないわよ、いえ、そもそも生物じゃないわ。生命力を感じないもの』

『は？ お前、さっきアンデットの気配は感じ無いつてー』

『確かにアンデットでもレイスでもないわ。だけど、忘れたの？ ここはかつてこの世界最高の科学者が作ったダンジョンなのよ？』

アクアのその言葉にハツとする。まさかと思い、尋ね返す。

『つまり、アイツはゴーレムみたいな存在だっということか？』

小声でアクアと会話していると、少年が行き止まりの部屋で立ち止まった。

「もう逃げられんぞ、貴様は何者だっ!？」

ダクネスが剣を突きつけるが、フードの下から見える少年の口元には無邪気な笑みが浮かんでいた。

その瞬間、部屋が揺れた。

「「ツッ!」」

「これは……部屋が下に下がってんのか!？」

「そつ、この部屋は部屋自体がエレベーターになってるのさ」

部屋の仕組みに気付いた俺に少年はフードを下ろして口を開いた。黒髪の少年は容姿的に見れば人間と何ら変わらないが、頭にヘッドフォンのような白い機械をつけていた。

「僕の名前は迅、ここの管理を任されている端末だよ」

素直に自分の名前を明かした少年に、敵意はないと感じたのかダクネスが剣を下ろした。

「君達の名前を聞いていいかな?」

俺達は互いに視線を合わせて頷きあう。

「俺はカズマっていうんだけど」

「私はダクネスと言う」

「私はアクア、アークプリストにしてアクシズ教のご身体、女神アクア様よ!」

「を、名乗ってる可哀想なやつだ」

「へえ、そうなんだ」

「ちよつとお!本気でしばくわよ、カズマ!それにあんたも乗っかってんじゃないわよ!」

なんかアクアが吠えてるけど、それを無視してまだ名乗りを終わえないめぐみんを見る。そして、俺達と始めあつたときのようにポーズを決めて名乗りを上げる。

「我が名はめぐみん!アークウィザードにして、爆裂魔法を操りしもの!」

「……………」

迅はめぐみんの名乗りを聞くと目をぱちくりさせる。ロボットでもそんな顔をするんだ、みたいなことを考えてしまった。

「おい、私の名前に文句があるなら」その目と髪、ひよつとして君、紅魔族?」……え?」

その沈黙が俺と同じときのような反応だと勘違いして突っかかるうとしためぐみんだったが、迅の反応に今度はこちらが面食らう。

「知ってるのか、紅魔族のこと?」

「うん。だって、紅魔族を作ったの、僕の父さんだもん」

「はあ!」

「紅魔族は元々、魔王に対抗するために父さんが作った改造人間だよ?」

「なっ!」

驚愕の真実に俺達は目を見開く。かつ、改造人間って……。

俺は横目でめぐみんを見る。俺の目にはあの勝ち気なめぐみんが小刻みに震えているようにも見えた。

「そ、それってどういう意味だ?」

「だくかくらく、紅魔族は魔王と対抗するために魔力の適正を最大にするための手術を受けた人達が始まりなんだ。まあ、それをうけたら記憶がなくなるらしいんだけど」

驚くべき真実に俺達は言葉を失う。

そうか、紅魔族の魔力が生まれながらに高いのはそれが理由だったのか。

なんつうかいきなり、重そうな話に……。

「でも、父さんが言うには全員自分から手術を受けたって話だよ? なんか、ついでに目も紅くしてくれとかわけわからないこと言われて困ったとも愚痴ってたけど」

ならなかったわ、うん、全然重くなかったわ。

なんつうか、ちよつと納得しちやった……。さすがめぐみんのご先祖様というかなんというか……。というか、よく見るとめぐみん、震えてるは震えてるけどどっちかって言う興奮に打ち震えてる感じだわ。

「コホンッ。その話はまた後で詳しく聞くとして、迅、お前はなんでここに俺達を連れてきたんだ?というか、端末って……。」

「君達っていうか、僕が用があるのは君だけなんだよねカズマ」  
「俺?」

俺が疑問符を浮かべていると、部屋が目的の場所についたのかももう一度ガタンと揺れる。そして、迅が壁に触れる隠し扉が現れそこから一つのアタッシユケースが現れる。

「僕は父さんと同じところの出身の人にこれを渡すように言われて待ってたんだ。落とさないでねっ!」

「おっと」

迅は俺に向かってアタッシユケースを投げ渡してきた。結構重いな、何が入ってるんだ?

「なになに、お宝?」

「開けてみてくださいよ、カズマ。いいですよ、ジン?」

「うん、構わないよ」

堪え性のない、アクアとめぐみんが俺にアタッシユケースを開けるようにせがんでくる。まあ、俺も気になるから開けるけどさ。

中を開くと、そこには黒い色に黄色いラインのバックルと黄色い長方形のデバイスが入っていた。デバイスの方に描かれているのは、バッタか?

でも、なんかこれ何かで見た……何かで見た何かに似てるようなや……。

「ちよつ、なんでこんなものがここにあるのよ!」

「アクア、これがなにか知ってるのか?」

「何って……ああそっか、アンタ地球じゃ平成生まれの平成育ちだったわね……仮面ライダーは知ってるわよね?」

「そりゃ、お前……日本人ならそれくらい誰でも……!」

そうか! このバックル、腰に当てるとベルトになるライダーお決まりのアレにそっくりなんだ! だけど、こんなベルトとデバイスが使うライダーなんて見たことないが……。

「それは平成の次の年号、令和の1号ライダー。仮面ライダーゼロワ

ンのベルト、飛電ゼロワンドライバーとその変身アイテムプログライ  
ズキーよ」

「仮面ライダーゼロワン、なんでそれがここに？　ってか、なんで俺に  
？」

「そ〜れ〜は〜、それをつけてみればわかるって父さんは言ったよ」

迅はそう言うのとケースからドライバーを持ち、俺の腰に半ば強引に  
押し当てた。

「「ちよっ！」」

迅の行動にアクア達が声を漏らすが、次の瞬間俺の視界が白い空間  
へと変わっていた。

「な、なんだ……………ここ……………」

『ここは私が生み出した、衛星ゼアの中だ』

「アンタは……………」

俺が混乱していると、目の前に髪の毛の長い初老の男性が現れた。

『最初に言っておくが、今の私はこの衛星ゼアに記録された記憶映像。  
君からの質問には答えられないと思ってくれ』

衛星？

『君の意識は、現在そのゼロワンドライバーを通してこの星のはるか  
上空に存在する。衛星ゼアの中にある。頭の上を見てみたまえ』

言われたとおり頭の上を見ると、そこには0/100%というアイ  
コンが浮いていた。

『この会話の間にベルトの使い方が脳にダウンロードされる仕組み  
だ。その間、おそらく君が抱いている疑問に答えよう。』

『私の名は飛電新。君も薄々気づいているだろうが私は魔王を倒すた  
めに転生した日本人だ。そして、私が得た特典は望んだものを生み出  
す力』

それはまた……………ドチートな……………。

『転生した私は女神アクアに言われた通り魔王を倒すために様々なア  
イテムを生み出した。しかし、いくら魔剣や聖剣を作ったとして幹部  
クラスには手も足も出なかったよ……………。私はそれが意思の弱さによ  
るものだと考えた。どうやら、私の能力は意思の強さに比例して完成

度を高めるらしいことがわかったのだ。

そこで私は前世からの趣味である仮面ライダーの力でなら魔王軍と拮抗できるのではないかと考えた。私は自身の特典を使ってライダーシステムの開発に人生を注いだのだ』

じゃあ、このドライバーは原典の仮面ライダーゼロワンをもとにこの人が作ったドライバーってことなのか。確かに仮面ライダーって言えば悪を倒すために何度負けても強くなって復活する存在だからな。

『私はこの衛星ゼアを生み出し仮面ライダーゼロワンの再現に成功した。だが、それが完成したときには私はもう年だった……。とても、自分で変身して戦場に建てるような体ではなかったのだ。』

しかし、私が人生を費やして生み出したライダーシステム……。どうせなら仮面ライダーを知る誰かに託したかった。だから、私はその適性のあるものがここを訪れたらこれを託すように迅に託しておいたのだ』

だから、迅は俺にこれを……。父さんがこれを渡すようにってそういうことだったのか。

『そのベルトは一度装着すると生体認証によるロックが掛かる。つまり、そのベルトは既に君だけのものになったわけだ』

マジでか……。俺が、仮面ライダーとか重すぎるぞ。だってこれ、この人の人生の結晶だろ？俺なんかが貰っていいのか？

『私の望みはただ一つ、どうか仮面ライダーとして魔王からこの世界を守ってほしい』

その言葉とともにダウンロードが終了したのか、頭上のアイコンが100/100となる。

『さあ行け、仮面ライダーゼロワン。この世界を救えるのはただ一人、君だ！』

## 俺が冒険者で仮面ライダー

ゼロワンドライバーを受け取った俺達は取り敢えず一度帰路につくためにダンジョンの外に向かっていた。

その途中、アクアのやつが、

「これでカズマもようやくこのパーティにふさわしくなるわね！」

なんて言ってきた。

「何言ってるんだ、お前？」

「何って、今まで上級職の中で最低職の冒険者だったアンタが仮面ライダーなんて力を得たのよ？飛電新って人に感謝することね」

アクアの言葉に俺は渋い顔になっているだろう。確かにこのパーティはアークプリーストのアクアに、アークウィザードのめぐみん、そして、クルセイダーのダクネス。オマケに全員美女、美少女。傍から見ればそこ変われと言われそうなパーティだ。

が、その実やれオツムの残念な駄女神やら、やれ爆裂狂やら、やれDMやら、どう考えても俺が一番苦勞してんじやねえかってレベルのポンコツパーティだ。

だが、確かに仮面ライダーの力はあるがたい。なにより、俺も男の子だからなあ……変身に興味が無いといったら嘘になる。

「わあ、久しぶりの外だあ！」

「というか、なんで訊までついできたんだよ？お前、ここの管理を任されているんじやなかったのか？」

空を眺めて無邪気にはしゃぐ迅に先程から思っていた疑問を投げかける。なんか、夜逃げの例みたいなりアカーにとんでもない量の荷物があるけど。

なんでも迅は新さんが残した4体の自我を持つロボット、本人曰くヒューマギアの一体らしい。

「ん、ああ、ここの管理の仕事なら君にドライバーを渡した時点で終わってるよ。これからの僕の仕事は君のサポートなんだ」

「俺のサポートって？」

「僕達4体のヒューマギアにはそれぞれの役割があるんだ。僕はゼア



からのデータをもとにゼロワンをサポートするのが役目なんだ。

それに、戦闘能力もかなり高いからね」

「え、そうなの？」

見た感じにそんなに強くなさそうなんだけど……。そんなことを思っていると、ダンジョンの入り口から足音が近づいてくるのが聞こえた。

やがて、そいつらがダンジョンから出てきた。その姿は見るからにロボットみたいな見た目をしたメカメカしい集団が出てきた。

「迅、なんですかつ！あのカッコいい集団は！」

「あれはゼアから命令を受けて自動で動く、トリロバイトマギアだね。僕達とは違って自我はないよ」

テンションが高くなつたためぐみんが迅に尋ね、それを説明する。なんか、紅魔族の琴線に触れたらしい。

ああ！あれが噂にあった妙なゴーレムの集団か。迅の見送りでも来たのかなと俺が思っていると、先頭のマギアが何を取り出した。

それを見たダクネスが口を開く。

「おい、アイツが持っている物お前が渡されたのに似てないか？」

確かに先頭の奴が持っているのは俺が渡されたプログライズキーに似た長方形のデバイス、違うのは俺が持っているのはバッタが描かれていて、やつが持っているのはカマキリのようなものが描かれている。

『Berrotha…!』

それを起動させたヒューマギアは腰の窪みにそれを装填して反対側のスイッチを押す。

『Zetumerize…!』

『Berrotha…!』

その瞬間、ヒューマギアのからだから無数のコードが飛び出し、繭のように包んでそれが弾けるとその姿はカマキリのような頭と両腕にカマを装着した姿へと変身した。

「なんか……。あれ、ヤバくね？」

突然変身したヒューマギアに俺の背中に嫌な汗が流れる。その期

待に答えるようにカマを振り上げ、緑の斬撃を飛ばしてきた。

「っ！避けるっ！」

俺は近くにいたためぐみんを、迅がアクアを抱え回避し、ダクネスが剣で受け止めようとするが。

「なっ?!私の剣が！」

ダクネスの剣は見事な断面で切り裂かれていた。あと少しダクネスが反射的に避けてなかったらダクネス自身が真っ二つになっていた。

俺の視線は自然とカマキリ野郎を見る。奴は俺の方に狙いを定め一歩一歩こちらに近づいてくる。

「何あれっ?何なのあれっ?どう見ても殺しに来てるよねっ?!」

「ちよっ、どういうことですか迅! アレも貴方を作ったのと同じ人が作ったんじゃないんですか!?!」

俺とめぐみんがマジで笑いものにもならない状況にヒステリックな声を上げる。問われた迅は顎に手を当ててうぐむとうなっている。

「どうやら、ゼアが彼等を動かしてるみたいだね」

「ゼアが?なんでだよっ?」

「どうやら、ゼアは君に仮面ライダーの資格があるのか試したいみたいだ」

「ゼアにも意思があるのか?」

「うん、あるよ」

あるよって……いや、迅みたいなのやつがいるんだから衛星に人工知能を組み込んでたってなんの不思議もないか。

うん?つまりは何か?

「俺にアイツを倒せってのか?」

「うん」

いやいやいやいや……!

「無理無理無理無理! あんなもん斬られた瞬間即死じゃん! 迅、お前が倒してくれよ!」

「いや、チュートリアルには丁度いいんじゃないかな?」

「ゲームオーバーのあるチュートリアルなんて聞いたことがねえよ!

「おい、お前ら逃げるぞ！」

「いや、君もうゼアにロックオンされてるから逃げられないよ？」

「オーマイガー！」

「あつ、そうだめぐみん爆裂魔法でまとめて吹き飛ばしてくれよ！」

「嫌です」

「そうだ、やっちま……え？」

「今コイツなんて言った？」

「あんなかつこいい集団を破壊するなんて私のポリシーに反します」

「マジで泣かすぞテメエ！今はそんなこと言ってる状況じゃないだろうが！」

「羨ましぞ、カズマ！あんなに沢山の悪漢に袋叩きにされるなんて。んっ！」

「お前は黙っててくれ！頼むから！」

「いつまでも、ごちゃごちゃ言ってるんじゃないわよ！あんたが戦わないと私達まで巻き添えなのよっ、とつとと戦いなさい！」

「いつてえ！」

しびれを切らしたアクアがポケット入っていたプログライズキーを取り出して俺の顔面に投げつけてきやがった。マジで泣かしてやるうか、この駄女神！

「つて、言ってる暇ねえか……！」

そんなことを考えてる間にもヒューマギアは俺の方に近づいてくる。

俺はアクアに渡されたプログライズキー、『ライジングホッパープログライズキー』を見る。ゼアでコイツの使い方はダウンロードしてあるから戦い方はわかる。

俺は覚悟を決め、プログライズキーの起動スイッチを押す。

『Jump！』

んで、これを……ベルトの右側にあるオーソライザーに翳す。

『Autnorize！』

そして次の瞬間、メカメカしいバツタが空から落ちてきて、敵を威嚇するように俺の周りを飛び回る。さらに俺の周りに設計図のよう

な映像が展開される。

俺はゆつくりと両手を交差させ、左手をベルトに添え、右手の親指でプログライズキーのカバーを弾いて展開状態にして顔の横に構える。

「変身！」

『Progriize! 飛び上がライズ! ライジングホッパー!』

ベルトのライズスロットにプログライズキーを挿入する。ゼロワンドライバーがプログライズキーのデータを読み込み、俺の全身が黒いライダースーツ、ライズアーキテクターを覆う。そして、俺の頭上でバラバラになったライダーモデルの体が分解され装甲として全身に装着された。

『A jump to the sky turns to a r  
ider kick.』

変身を終えた俺は自分の両手を見る。俺、変身したのか……日本人男子の夢である仮面ライダーに俺が……!

「おおつ、カズマカッコいいですよ！」

「カズマ、ゼアから変身ポーズは満点だつて評価が届いたよ」

「……カズマ? めぐみん、迅それは違うぞ」

「え?」

惚けているめぐみんに俺はクルリと一回転し、腕を組んだようなポーズで右手の人差し指をめぐみんに向ける。

「ゼロワン! それが、俺の名だ!」

「「おお〜!」」

「カズマさんたらノリノリね……。」

「よくわからんが、カズマのテンションが高くなっていることだけはわかる」

ゼアから教わった決めポーズをすると、めぐみんと迅がパチパチと

拍手を送ってくれる。アクアとダクネスは呆れているように見えるけど、今は関係ない。

「いっくぜえー！」

俺はテンションが最高潮の状態でカマキリ野郎に向かっていく。右手のカマを振りおろそうとする前に懐に入って胴体に重いパンチをかますと、吹き飛びゴロゴロと地面を転がる。

「スゲえ……なんてパンチ力だ……！」

ゼロワンのパンチ力に関心しているといつの間にか近づいてきたカマキリ野郎のカマが迫ってきた、俺は強化された視力でそれを避け逆にキックをかます。足元が狙われたのでジャンプして回避するが、気づくと俺は5メートル近く上空にいた。

「たっかー！どんな脚力だよ!?!」

そーいや、これバツタのプログライズキーで変身したんだから当然か。

カマキリ野郎は地面から俺を見上げ、ビームを打ってきた。打てるのかよ、ビーム！俺はそれを正面からキックで押し返す。

「おりやあおお!!」

強烈なキックを喰らいカマキリ野郎は吹っ飛ぶ。追撃をしようとしたら、背後からいつの間にかアイツらの取り巻きが近づいてきていて俺に攻撃してきた。

「コイツらの存在忘れてたな！」

「カズマ、これ！」

「んっ?」

俺は迅が投げ渡してきたアタツシユケースのようなものを受け取る。勿論、これの使い方もゼアから教わっている。

『Blade rize!』

ゼロワンのメインウエポン、アタツシユカリバーを展開し取り巻きのヒューマギアを切り裂く。

『Changer rize!』

『Full charge!』

一度アタツシユカリバーを閉じて再び展開し、必殺技を放つ。

『Kabanslash!』

放たれた斬撃が取り巻きのヒューマギアを一掃した。残った、カマキリ野郎を見定め俺はアタッシュユカリバーを放り投げて指先を向ける。

「お前を止められるのはただ一人、俺だ！」

『Rising Impact!』

ライズスロットにセットされたプログライズキーを押し込むと足の力が最大に強化され、その力で一気に迫り、カマキリ野郎を上空に蹴り飛ばす。

上空に跳躍し、降下の力で加速したライダーキックをカマキリ野郎にかました。

ライジン

グインパクト

俺のライダーキックはカマキリ野郎を貫通し、体を貫かれた奴は爆散した。

もう敵がいなくことを確認すると、ベルトからプログライズキーを抜き取り変身を解除する。

「……スゲエなこれ。」

俺は自分をここまで強化した力の源であるプログライズキーを見ながら、ただそれだけ呟いた。というか、それ以外に言葉が見つからなかった。

これが、俺の仮面ライダーゼロワンの初陣だった。

## ボクの仕事はキミのサポート

『Rising Impact!』

「おりやあああ!!」

俺の必殺技を喰らい、一撃熊は爆散する。その様子を後ろで見ている。俺がはしゃぎながら見ている。

「凄い、凄い！もう一撃熊を相手にできるようになるなんて！パワーアップが早いね、カズマ」

「当たり前だろうが！お前が毎日のように無茶な依頼をとってくるから、そりや強くなるだろうよ！」

俺はドライバーからプログライズキーを抜いて変身を解除して、迅の胸ぐらを掴んで文句を垂れる。俺はゼロワンに変身した後から迅がギルドからめちやくちや難易度の高い依頼ばかり受けてきて、俺を戦わせようとする。お陰でだいぶステータスが上がったわ！

因みにアクア達は別の依頼を受けている。ただでさえギリギリの戦いなのに、アイツらがいたらマジで危ない。

「無茶って人間が悪いなく。君でもギリギリ勝てるレベルの依頼しか受けてないよ。それに、君変身してないと弱すぎるし。早く戦闘に慣れてもらわなきゃ」

「しゃあねえだろ！俺、冒険者なんだから！」

冒険者は最弱職なだけあって成長値もダントツで低い。オマケにカンストするのもかなり低い、唯一メリットがあるとしたらどんな職業のスキルでも習得できることだ。

だが、どうやらこのゼロワンドライバーにはカンストの上限を高めてくれる機能も搭載されているらしい。流星は紅魔族を生み出した天才が人生を掛けて作った魔王軍への切り札か……。

だが、迅や新さんには悪いが俺は魔王を倒すなんて諦めかけている。実際、アクアは何人も転生者をこの世界に送っているらしいが、その実未だに幹部すら倒せていない。そんなのを相手に戦って勝てると思えるほど俺は自身家じゃない。だって、前世二一トだし。

「じゃあ、そろそろ新しい戦い方を試してみようか」

「新しい戦い方……？」

迅はポケットに手を突っ込むと、あるものを取り出して俺に放り投げてきた。両手でキャッチしたそれは青色のプログライズキーだった。シューティンググウルフ？

「新しいプログライズキー。お前他にもプログライズキー持ってたのかよ」

「そりやそうだよ。ライジングホッパーだけで戦えるほど魔王軍は甘くはないからね。でも僕もそんなに持ってないんだ、プログライズキーの管理は亡姉ちゃんが担当してるから」

亡、迅の口ぶりからして4体の自我を持つヒューマギアの一体なんだろう。

だが、そんなことよりそろそろ迅に本音を言っておいた方がいいかなと思いきまざいながらも口にした。

「……なあ、前から言おうと思ってたんだけどよお。俺魔王軍と戦うつもりなんて殆どないぜ？」

「え？」

迅は俺の言葉に呆けてしまっている。まあ、そりやそつか。アクアに転生された〓魔王を倒す気があるって新さんは考えてただろうから……。

俺はさつき思ったことをそのまま口にした。すると、迅は困ったように頭をかく。

「困ったなあ……僕達は君が魔王と戦うことを前提にしてるのに」

迅は耳元の機械に触れながら何やら思索している。そう思っていた矢先、その機械から携帯の着信音みたいな音が響いた。

そして、迅は俺の方を見て口元に笑みを浮かべる。なんか、嫌な予感……。

そのいやな予感的中したらしく、迅は懐から黄色いバックルを取り出し、腰に押し当てる。すると、俺のゼロワンドライバーのようにベルトとなって装着される。

『Force Rizer……!』

そして、今度はポケットからピンク色の新たなプログライズキーを



取り出した。

「新しいベルトにプログライズキー……まさか、お前も」

『Winger!』

迅は一度空中にプログライズキーを投げて、キャッチするとスターターを押してプログライズキーを起動させ、ベルトにプログライズキーをセットする。警告音の待機音がなり、プログライズキーから鳥のライダモデルが飛び出す。

「変身!」

『Flying Falcon!』

ベルトの下部にあるアンカーを引くと、プログライズキーが展開され、ライダモデルが迅を覆う。それが弾け飛ぶと全身からゴムのようなものに繋がれた装甲が一気に全身を纏う。

「うあつ、ぐああああつ!」

『Break down…!』

「イエーイ!」

その姿は紛れもなく、仮面ライダーだった。

「お前も変身できたのかよ……。」

「うん。ゼロワンのサポートのためにはこれくらいできなきゃ!」

「というか、なんでこのタイミングで変身したんだよ?」

「ゼアに相談したんだけど、意見が対立したら殴り合うのが一番効率的なんだって!」

「どこの少年漫画だよ!」

「ほらほら、カズマも早く変身してよ」

ファイティングポーズをとって、完全にやり合う気満々の迅。明らかに余計なこと言っちゃまった感がある。もう、こうなったらあのカマキリ野郎同様絶対逃げられないじゃねえか。

『Jump!』

「変身」

『Rising Hopper!』

「行くよお!」

俺が変身したのを確認すると、迅は背中に装備された翼を展開し、

羽根型のエネルギー弾を飛ばしてくる。

「殴り合うんじゃないのかよー！」

俺はライジングホッパーの脚力で必死に回避しながら文句を垂れる。なんとか避けながら、迅に接近しパンチを叩きこもうとするが、それよりも早く迅の姿がそこから消えた。

「とうっ！」

「飛べるのかよー！」

そう、迅は背中中の羽を使い空へと逃げたのだ。さらに、空中から急降下し翼で切り裂く攻撃を仕掛けてくる。ゼロワンの姿でもかなりいてえ！しかもヒットアンドアウェイの戦法をとってるらしく俺の攻撃の前に逃げられる。

しびれを切らした俺はホッパーの脚力を使い迅を捕まえようとするが、

「いい加減にしろおおおおお!!！」

俺の手はギリギリのところまで届かず、そのまま地面へと落下する。クソツ、バツタの脚力でも翼がある敵には届かないか！

あつ、そうだ、さっきのプログライズキー。ドライバーの右脇のホルダーにセットしておいたプログライズキー。描かれているのは狼の横顔、アビリティの部分にはBULLETと書かれている。

バレット、『弾丸』か。こいつならもしかしたら届くかも。

「……やってやらあー！」

『Bullet!』

『Autnorize!』

ウルフのキーをオーソライザーに翳すと、空から狼のライダモデルが落下してきて、迅を威嚇するように遠吠えをする。ハッキリ言う、超かっけえ！

「よし、行くぞウルフ！」

『Progrize!』

ドライバーがプログライズキーのデータを読み込むと同時に俺の装甲が変形し、機械部分がむき出しになったところへ分解されたウルフが新たな装甲となる。

『撃ちまくくりステイ！ Shooting Wolf！ The  
levitation increases as the bullet  
et is fired.』

「おお、カッコいい！」

空を飛んでる迅の奴が手を叩きながら称賛する。シューティング  
ウルフのフォームは青い装甲と狼のようなフェイス、そして、足には  
鋭い爪が装備されている。

『Blade rize!』

アタツシユカリバーをブレードモードにして、構える。準備が整つ  
た俺を見て迅が再び翼を広げて上空に飛び立つ。

俺は持ち手についているアタツシユカリバーのトリガーを引きな  
がら、剣を振り抜く。すると、狼型のエネルギー弾が放たれ迅に向  
かっていく。

「ははっ、鬼さんこっちらっ！」

「あの野郎！」

しかし、迅は余裕な様子でそれを回避して飛び回る。クソッ、アイ  
ツ戦い慣れてやがる！

待てよ？なんでアイツはわざわざ俺の攻撃を避けたんだ？あの羽  
根があれば、相殺できただろうに？

そこで、俺の頭に一つの仮説が立った。だが、こいつをためにはま  
ずはアイツを地面に叩き落さないとな。

俺はドライバーからウルフのプラグライズキーを抜き、折りたたん  
でアタツシユカリバーのライズスロットにセットする。

『Progress key confirmed. Ready  
to utilize.』

「これでも喰らえ！」

『Shooting Kaban Strash!』

トリガー引き、剣を振り下ろすと無数の狼の弾丸が迅に向かって放  
たれていく。幾つから回避できたが、2体の狼が奴の両腕に噛み付  
く。

「あつ、コラッ！離せっ！」

まるで、近所の犬猫にでも噛まれたような反応をする迅だったが、狼達がそんなことを聞いてくれるわけもなくそのまま地面に叩き落された。

「イツタア……やったなあ！ジャキーン！」

地面に叩き落された迅は再び翼を展開し、羽を飛ばそうとする。

「ここだ！」

『Shooting Impact!』

「うおおおおお!!!」

迅が羽を展開した瞬間、俺は攻撃を腕でガードしながら突っ込む、そして、迅の間合いに入ると狼のオーラを纏った鋭い爪がついた足でボレーキックを迅に叩き込んだ。

「ぐあああ!!」

ボレーキックが、炸裂し吹き飛ばされる迅。

「お前は羽根で攻撃するとき、上空に飛ばない。飛行と攻撃は同時にできないんだろ？」

俺が抱いた疑問、その答えは単純に出来ないだ。だから、アイツは飛行時はわざわざ接近して、着地時は俺から離れたところから攻撃をしていたのだ。

「へへっ！凄いね、カズマ……数回見ただけでそのことに気付くなんて」

「生憎知力だけは異常に高いんでなっ！」

自分で言ってる悲しくなるが今回はそれに関して感謝だ。

「じゃあ、僕も本気でいかせてもらおうかな」

「あれで、本気じゃねえのかよ！」

つっても俺はもう二回も必殺技使ってるのにコイツは一回も使っていないところを見ると俺とこいつの力量の差は明らかだな。

「……………」

俺達は互いにベルトに触れる。

『Shooting Impact!』

『Flying Dystopia!』

迅は旋回しながら上空飛び上がり、ライダーキックを放つ。俺もそ

れを正面から受けて立つために青いエネルギーを右足の爪に収束し、ライダーキックを放つ。

「おりやああああ!!!」

「はああああああ!!!」

シ

ユ      フライイング

ー      デイストピア

テ

イ

ン

グ      インパクト

二つのライダーキックが激突し、お互い地面に着地する。そして、その勝者がどちらかは、

「ぐっ、がはっ……!」

俺の変身が強制的に解除されたことで明らかになった。

「あく、負けた〜!」

でも、なんでだろ……。悔しくねえつつうか、どこかスッキリした感じがする。考えてみたら、誰かと殴り合うなんてこれが初めてだったな……。結構清々しい。

大の字まま起き上がらない、俺の隣に迅も寝転ぶ。

「楽しかったね!」

「ああ……まあ、否定しないけどよ。俺達、なんで戦ってたんだっけ?」

「それは君が魔王討伐なんてしないって言ったからでしょ」

「あく、そうだった。」

途中から本気で忘れてた。

「……なあ、お前さあ。親父さんに命令されたからってのはわかるけど、魔王倒すのは流石に無理じゃね?」

改めて迅に聞いてみると、迅はキョトンとした顔をした。俺、なんか変なこと言ったか?

「僕達は魔王軍と戦えなんて命令父さんから受けてないよ」

「は〜」

迅の口から飛び出した言葉に俺は目を見開く。だったら、なんでコイツはゼロワンのサポートなんて仕事してんだ？

「僕達が魔王軍と戦うのは僕達自身の意思だよ。僕が命じられたのはゼロワンにドライバーやプログライブスキーを渡すことだけだよ」

……言われてみればゼアで会った、新さんは迅や他のヒューマギアの話は一切していなかった。アレは迅の役目が既に終わっていたからなのか。

「じゃあ、なんで……。」

「それが父さんがやり残したことだから、かな？」

それを聞いて、ストンと腑に落ちた。そうか、俺は何処かでコイツは機械なのだという先入観を持っていたらしい、考えてみれば当然だ。親がやり残したことを子がなそうとするなんて。

コイツはただの機械じゃない……心を持った、ある意味人間より人間らしい存在なんだ。

「はあ……あくあ、聞きたくなかったぜ、そんな言葉」

俺はまだ節々が痛む体を起こしながら本気でそう口にする。俺はどんな形であれ、仮面ライダーゼロワンを引継いでしまった。なら、俺にはコイツらの願いを叶える義務がある。

「……わかったよ、俺にもできる範囲で戦わせてもらう。だけど、第一は命大事にだからな！危なくなったら、速攻で逃げるからな！」

迅は俺の言葉を聞くと、笑みを浮かべ差し出された俺の手を握り立ち上がる（やっぱ機械だから思ってたよりちよつと重い）。

「ゼアの言うとおおり、男同士の喧嘩っていいものだね！またやろうよ！」

「二度とやらねえよ！」

## シャイニングホップ・プログライズキー

ギルド、俺と迅は久しぶりにアクア達と合流し今後の行動について話し合うことになっていた。なっていたのだが、

「カズマ、大丈夫ですか？」

「……………無理」

俺は机に突っ伏したまま、髪を弄ってくるめぐみんの質問に答える。というか、これしか言葉が出てこない。つうか、言う元気がない。全身が筋肉痛で痛くて痛くて仕方ない。

「ねえねえ、カズマさん。私お酒が飲みたいんだけど、お金貸してくれない？」

「おお〜……………」

俺は懐から金が入った袋を取り出してアクアに差し出す。もう、こいつを叱る気力すらない。それに、迅がとってくる依頼はリスクだが報酬もいいので困りはしない。

「おう、仮面ライダー。今日もお疲れだな」

「おつ、仮面ライダー！一撃熊を倒したんだってな、今度その話聞かせてくれよ！」

最近、俺の異名に仮面ライダーが定着してしまった。なんでも、俺の変身した姿を何人かの冒険者が見ていたらしく、めぐみんが自分のことのように話したのがきっかけらしい。

ぶっちゃけちよつと恥ずかしいけど、今はそれよりこの疲れをどうにしてほしい……………。

あの迅との殴り合い(?)の後も、二週間近く俺は迅による魔改造を受けていた。その際、迅が管理している4つのプログライズキーを譲渡された。

一つはバイティングシャークプログライズキー。アビリティはフッキングで刃を操る形態になれる。

二つ目はフレイミングタイガープログライズキー。アビリティはファイヤーでその名の通り掌から火炎放射を放てる形態になれる。

三つ目はラッシングチータープログライズキー。アビリティは

ダツシユで超高速で動ける形態になれる。

四つ目はライトニングホーネットプログライズキー。アビリティサンダーで迅のライティングファルコン同様、空中戦と電撃を得意とする形態になれる。

これで俺が使えるプログライズキーは、ライジングホッパー、シューティングウルフ、バイティングシャーク、フレイミングタイガー、ラツシングチーター、ライトニングホーネットの計六つ。戦い方にも大分幅が出てきたが、迅曰くこれでも全然足りないらしい。

さらに、今日のうちに討伐系のクエストで溜まったスキルポイントを使って、ダクネスから教わった『物理耐性』、『魔法耐性』のレベルを上げて打たれ強くなった。魔法系のスキルを取ろうかと思っただがプログライズキーの方が明らかに使い勝手がいいので他のスキルに回した。アタツシユカリバー用に『片手剣スキル』、他の冒険者にも頼んでもう一つのアタツシユウエポン、アタツシユショットガン用に『狙撃スキル』、『千里眼』。などなど、アレ？これゼロワンと合わせたらかなりチートなんじゃ？

いやいや、ゼロワンの時点でチートだったわ。

つうか、プログライズキーそんなに持ってないとか言っただけめちゃくちゃ持つてんじゃねえかと文句を言ったら、「いやあ、実を言うと亡姉ちゃんが渡してくれたたの忘れてたんだ」だって。ヒューマギアが物忘れすんなよ！

「なあ、迅。お前あとファルコンキー以外に幾つキー持つてるんだ？」

「えつとく、三つ、……いや、使えるのは二つかな」

「?どういうことですか」

歯切れの悪い迅の言葉にめぐみんが反応する。迅は苦笑いを浮かべてポケットから金色のプログライズキーを取り出す。

アレ？このキー……。

「2つ目のホッパーのキー？」

そう、そのキーに描かれていたのは紛れもなくライジングホッパーキーと同じバッタのマーク。違うのはクレストがゼロワンの顔になっただけだ。



「これはライジングホッパーの上位互換、シャイニングホッパープログラズキーだよ」

「上位互換ということは今カズマが使っているものより強力なのだろう？何故使えないんだ？」

ダクネスが最もな疑問を投げかける。

「このキーはね、まだ未完成なんだよ」

「「未完成？」」

「これはゼロワンが使った他のプログラズキーの戦闘データを元に完成させるんだ。だけど、知っての通りゼロワンは最近まで変身者がいなかったから」

「なるほど……アレ？じゃあ、新さんがいない今、完成しないのか？」

「いいや、君が使ったプログラズキーに戦闘データが保存されてゼロワンドライバーを通じてゼアに集められて、このキーに送信されるんだ。」

まあ、まだ全然データが足りてないけどね」

なるほど、コイツが俺を戦わせてたのはこれを完成させる為でもあったのか。

「それにしてもさあ、最近この辺り強い魔物多すぎじゃね？ここ駆け出しの街なんだよな？一撃熊とか、マンティコアとかいたんだけど？」

「ああ、それならこれが原因だろう」

俺が再び机に突っ伏して、質問するとダクネスが一枚の紙を俺の前に置く。

ええっと、内容を要約すると最近魔王軍幹部が近くの古城に住み着いて、その魔力に当てられたモンスターの生態系が不安定になったと……。

「ふくん……。って、魔王軍幹部っ!？」

このゼロワンドライバーを作った新さんでも倒せなかった幹部クラスがこの街の近くにいるのか!？」

「……なあ、迅。今の俺達が幹部クラスと戦って勝てる確率ってどれくらいだ?？」

「「ちよっ！」」

俺の言葉にアクア達が声を上げるが、迅は頭についた白い機会に触れてゼアと連絡を取る。

「うーん、ゼアの計算だと……高くて29.6%だつて」

そんなもんなのか……。

「じゃあ次の質問、さっきのプログライズキーが完成したら勝てる確率はどうなる？」

「相手によるけど87.6%だつて」

「そんなに跳ね上がるのかっ!？」

スゲえなシャイニングホッパー。魔王軍の幹部相手にほぼ8割で勝てるのか。

「じゃあ、幹部のところに行くのはシャイニングホッパーが完成するまで待つしかないか……。」

「カズマ、貴方幹部を倒す気なんですか？」

めぐみんがさっきからの俺の質問で察したらしく俺に聞いてくる。

「しようがねえだろ。新さんにはゼロワンドライバーもらっちゃったし、迅とも約束しちゃったし。

なに、お前らは反対なのか？」

一応、俺達はパーティを組むときに建前上本気で魔王軍と戦うつもりという事で組んでいたのので特に文句はないと思っていた。

「私は別に異論はないが……。」

「私もです、寧ろ……。」

「アンタの口からそんな言葉が出たことのほうが驚きよ」

「よしアクア、さっきの金返せこの野郎」

アクアの発言にキレた俺は掴みかかり、さっきの金を取り返そうとするが、

『緊急っ！緊急っ！全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まってくださいっ！』

ギルド職員の焦りきった声色のアナウンスで思考が切り替えられた。

コブシを止めるな、アイツを止めろ！

俺達がギルドの指示で正門の前に集まると、そこには首のない馬に跨った漆黒の鎧を纏う騎士がいた。唯一、普通と違うのはその首が頭についているのではなく、腕に持たれてるという点だ。

「なあ、迅……アイツ、まさか……。」

「間違いない、奴はデュラハンのベルディア。魔王軍幹部の一人だよ」  
「やっぱりかよ……。アレが、俺の戦うべき相手……。とてもじゃないが、今の俺が勝てる気が微塵もないぞ。」

「でも、なんでそんな奴がここに……。」

「貴様らに問う」

デュラハンの声に俺達は息を呑む。

「毎日毎日、俺の城に爆裂魔法を撃ち込んでくる大馬鹿はだれだああああ!!」

デュラハンの激昂に俺達は啞然とした。

「ちよつと待って、いまコイツ爆裂魔法って言った？爆裂魔法って言ったよね？」

「おい、めぐみん……お前、まさか……。」

「……………」

「めをそらすなあああ!!」

「いひやいいひやいれふ……!」

俺は目を背けためぐみんの口をこれでもかかってくらい引つ張る。  
「なんてことしてくれたんだ、貴様っ!!」

「よく聞け貴様等!この街には低レベルの雑魚しかいないことは知ってる!どうせ、俺には手を出せまいと放置していれば調子に乗ってポンポン撃ち込んできおって!おかげで耳鳴りはやまんわ、食事は通らんわで陰湿にもほどがあるわ!」

「ほんつと、すいませんデュラハンさんっ!!うちの馬鹿がほんつとにすいません!!」

「ってか、ちよつと待てめぐみんって爆裂魔法を撃ち込んだら動けなくなる。ってことは、コイツを背負って帰った共犯者が。」

ザッ!

足音がしたほうを向くと、アクアが忍び足でその場から去ろうとしていた。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………テヘペロ!」

「貴様アアアアアアアア!!!」

俺はアクアの顔をこれでもかかってくらいい横に伸ばした。どっかのゆるきやらにしてやろうかコノヤロウ!!

「らつて、らつて、アイツのせいでロクなクエストが受けられなくて腹いせがしたかったんだもの!」

「お前、知っててやってたのかよ!」

俺が迅に鍛えられてる間になんちゆうことをしてくれたんだこの馬鹿共は!?

取り敢えずめぐみんに謝れと言おうとしたとき、奴は自分から前に出て、

「まんまと騙されましたね悪しきものよ! 私は紅魔族随一の魔法使い、めぐみん! 我が爆裂魔法を撃ち込んでいたのは貴方をここにおびき出すため!」

ウソをつけっ!

「ほう、頭のおかしい紅魔の者か…………」

「何だど!? 私の頭のどこがおかしいのか文句があるなら聞こうじゃないか!」

おい、蒸し返すな!! お願いだから、勝てる確率3割もねえんだぞ!! 「余裕ぶつていられるのも今のうちです。こちらには心強い味方がいるんですから!。先生方、お願いしますっ!」

「もう仕方ないわね! アイツのせいでろくなクエスト受けられないし、倒して賞金にしてやるわ!」

そう言つて、前に出るアクア。

おい、アクアはわかる。アクアはわかるが、先生『方』ってなんだ、先生『方』って。え？俺達も入ってるの？

なんか、周りの冒険者も道を開け始めたんだけど……。

「ほう、アークプリーストか……それに、そのフードの小僧は人間ではないな……面白い、貴様等をいたぶればその娘も少しは反省するか？」

奴は馬から降りて剣を取り出す。

やべえ、こいつ完全にやる気満々だ……！

「……仕方ないやるぞ、迅！」

「オツケー！」

こんな時まで軽いお前は！その能天気さがちよつと羨ましい！

「ねえねえ、私は？」

「アクアは支援魔法以外手を出すな、狙われたら守れる自信がねえかな」

下手に手を出して、アイツの中のアクアの危険度が跳ね上がりでもしてみる、俺達二人がかりでも止められる自信がない。

相手は騎士系の敵、だったら特殊攻撃系で攻めてみるか。俺はフレイミングタイガーをチョイスし、構える。

『Fire!』

『Wing!』

『Autnorize!』

キーをオーソライザーに翳すと、空からもはやお馴染みのバツタのライダモデルと、炎を纏った虎のライダモデルが落ちてくる。迅のベルト、フォースライザーからもファルコンのライダモデルが飛び出す。

「二変身！」

『Progrize!』

『Forcerize…!』

迅がフォースライザーのアンカーを引くのと同時にプログライズキーをドライバーに差し込む。

『Gigant flare! Flaming Tiger! E

xpllosive power of 100 bombs.」

『Flying Falcon! Break down!!』

バツタとトラが同時に分解され最初から装甲が移動した状態で赤い装甲がさらに上から装備される。

トラのようなフェイスと両手に炎を吐き出す赤い装甲、『タイガーガントレット』が装備され、仮面ライダーゼロワンフレイミングタイガーに変身した。

「その奇怪な姿……なるほど、貴様等が最近近くのモンスターを狩っているという仮面の戦士か。俺への牽制のつもりだったか？」

いえ、全くそういった意志はございません……。俺はただこの脳天気な単に連れ回されていただけでございます、と言いたいが言っても信じてもらえないんだらうから取り敢えず何も言わずに武器を構える。

『Bladerize!』

『Shotgunrize!』

「うおおおおお!!」

俺がアタツシユカリバーを、迅がショットガンを展開し同時にデュラハンに向かって走り出す。同時に攻撃すれば、片手が頭で埋まっている今どちらかが剣を受け止めておけばもう片方が攻撃を仕掛けられる。

「ふっ、面白いっ!」

そう言ったデュラハンは頭を空に放り投げる。

迅が正面から銃口を向けるが、剣を振り下ろされそのガードのためにショットガンを使う。そのすきに俺が背後からカリバーで切裂こうとするが、

「ふんっ!」

「うっ!」

「なにっ!?!」

迅ごと剣を回転させ、背後にいる俺を斬り飛ばした。

「がはっ!」

「うう………忘れてた、あのデュラハンは魔眼のスキルを持って

るんだ……。」

「魔眼？」

「ほう、今の一太刀で動けるとは。思ったより丈夫な鎧だな」

さつき投げた頭をキャッチして余裕の佇まいのデュラハン。魔眼……そうか、さつき投げた頭。あれを頭上に放り投げることで死角をなくしたのか。

「クソツ……！変わった頭の使い方をしやがって！」

「どうする、カズマ？」

迅の質問に俺は思考を巡らせる。

迅のアタツシユショットガンは威力は強いが反動も強い。空中で標準を合わせるのは難しいだろう。頭を空中に投げた瞬間を迅に狙ってもらうしかないか……。

俺は両手から火炎を放射し、構える。それを見て悟った迅がショットガンを構える。

両手の炎を溜めて、巨大な炎球を生み出しそれを投げつける。だが、軽々とその炎を斬りさいた。そのすきに、俺は背後に周りゼロ距離で炎をぶつける。

「温いっ！」

「グハッ！」

しかし、奴の鎧は溶けた様子もなく熱を感じてるように見えない。そのまま蹴り飛ばされて、後方に下げられる。

「チイツ！炎じゃだめなら、電撃ならどうだ！」

『Thunder!』

『Autnorize!』

ライトニングホーネットのキーを取り出し、ドライバーに読み込ませる。空から巨大なハチが飛んできて、俺の周りを飛び回る。

『Progrize!』

『ラララ 雷鳴！雷電！電撃！Lightning Hornet！  
Piercing needle with incredible  
force.』

ハチがバラバラになると装甲へと変わり、ライトニングホーネット

へと変身する。ハチをモチーフとしたフェイスと、蜂の巣のような胸装甲、右膝に蜂の針のようなパーツが装備されている。

「喰らえっ!」

胸部のアーマーから無数の蜂型のユニットがデユラハンへと向かっていく。デユラハン再び頭を空に放り、デユラハンが蜂達を相手をしているうちに俺が背後から足の針で攻撃を仕掛けようとする。

「ふんっ!俺に小細工は聞かんぞ!」

だが、それも見透かされ斬られそうになるが……ライトニングホーネットに搭載された飛行能力でなんとか回避する。

「迅、今だっ!!」

「ラジャー!」

『Flying Kabanshot!』

アタツシショットガンから放たれた、ファルコンのライダモデルがデユラハンの頭に向かっていく、よし、アレが本体だとすればこれで俺達の勝ち……!

「甘いわっ!」

だが、弾丸はベルディアの剣から放たれた紫の光によって掻き消される。

「そんなんありかつ!?!」

なんて叫んでるうちに俺も他の弾丸に撃ち落とされる。

「グハッ……!」

ゴロゴロと地面を転がり胸を抑える。ゼロワンに変身してなかったら、とつくに死んでるレベルだぞ、コレ……!

しかし、空中への攻撃もできるとはあれじゃ直接飛んで攻撃しても撃ち落とされて終わりだ。

「カズマ、僕に考えがある。少しだけ時間を稼いでくれない?」

「……まっ、俺にはこれ以上策は思いつかねえし。任せたぜ、相棒」

『Dash!』

『Autnorize!』

俺は機動力に優れたラッシングチーターのプログライズキーを起動させて、ドライバーに読み込ませる。



チーターのライドモデルとともにデュラハンに向かっていきながらベルトに、プログライズキーをドライバーに挿入する。

『Progrize!』

『スピーディーランダー! Rushing

Cheatah! Try to outrun this demon to get left in the dust.』

並走していたチーターのライドモデルが装甲になり、チーターのフェイス、胸装甲になり、足には高速で動けるための加速装置が取り付けられている。

「行くぞっ!」

俺は他のフォームのときにはのときには出せなかった超高速移動で一気にデュラハンに肉薄する。

『Rushing Impact!』

空中でバク転し、そのままライダーキックを放つ。さらにチーターの脚力を利用して両足で連続キックを叩き込む。

「うおおおおおおおっ!!!」

「……手数は認めるが、一撃一撃が軽い!」

だが、それすら奴に通じず空中にかちあげられてしまう。そして、落ちてくる俺めがけて剣をデュラハンが剣を構えるが、

「カズマ、下がって!」

迅の声が聞こえ、振り抜かれる剣をギリギリのところであわしそれを足場にして後ろへと飛ぶ。

『Freezing Kabanshot!』

俺が回避すると、背後から白い弾丸がデュラハンに向かっていく。デュラハンはそれを右腕で受けとめようとするが、

「なにっ!?!」

デュラハンの手元が凍りつき、鎧に霜が降りる。鎧が凍ったせいでその部分が地味に動きが鈍くなる。

「カズマ、これが有効みたいだよっ!!」

迅はアタッショットガンに装填してあったプログライズキーを投げ渡す。

フリージングベア。アビリティはブリザードか……なるほど、どんなに固くても鎧は鎧、鉄でできたものは凍りやすいし、氷が溶けにくい。

「わかったぜ、迅！」

『Blizzard!』

『Autnorize!』

3度目ならぬ、4度目の正直！ドライバーに読み込ませると、空から巨大なシロクマのライダーモデルが落ちてくる。

『Progrize!』

『Attention freeze! Freezing Bear!  
! Fierce breath as cold as arctic winds.』

俺に覆いかぶさるようにしたあとクマのライダーモデルは装甲になる。

クマをモチーフにしたフェイスと、他の装甲とは違い半透明な装甲が元の装甲に装備されていて、両手にはフレイミングタイガーとよく似たガントレットが装備されている。

「さあ、行くぜえー！」

両手のガントレットから、粉雪のような凍結剤を放射する。この冷気は防ぎようがない、剣で受け止めようが何しようが凍りつき動きはどんどん遅くなる。

「クツ……！」

確かに相性は抜群だな。あつ、いいこと思いついた！

俺は一気に接近して、懐に飛び込む。さっきまでならともかく氷のせいで鎧が動かしづらくなっていて鈍くなった攻撃を避けながら奴が持っている頭に冷気をかます。

「冷たっ！はっ、手が、頭が……！」

放たれた冷気が頭と手をくっつけてしまった。これで、魔眼とやらのスキルはもう使えまい。

『Freezing Impact!』

「はあああああ!!!」

ブログライズキーをドライバーに押し込み、必殺技を放つ準備をする。両手のガントレットにエネルギーが集中し、文字通りブリザードのように凍結剤が放たれる。

「ぐっ、うううう……！」

凄まじい吹雪を喰らい、氷塊とかしたデュラハンに熊の爪で強力な一撃を放つ。

フリ  
リ  
ー  
ジ  
ン  
グ

インパクト

氷が粉々に粉碎され、デュラハンは吹き飛ばされる。頼むからこれで決まってくれよと願うが……、

「……今のは効いだぞ」

「嘘、だろ……？」

今の俺の出せる全力だぞ……？全然効いてねえじゃねえか……。

「此度は随分楽しめた、だが、そろそろ紅魔の娘には俺の城を破壊した報いを受けてもらわねばならない。」

そう言つて、デュラハンはおもむろに指先をめぐみんに向ける。

『『汝に死の宣告を……』』

「めぐみん、避けてっ!!」

『『お前は一週間後に死ぬだろう!』』

デュラハンの動きを見て、迅が叫び声を上げるがそれよりも先にデュラハンの指先から放たれた魔力がめぐみんへと飛んでいく。

「危ないっ!?!」

「ダクネスッ!?!」

咄嗟に近くにいたダクネスがめぐみんを突き飛ばし、奴の魔力を喰らう。

「ッ!」

紫の魔力はダクネスに直撃するが、大した変化は見られない。

「なんだ、今は……!!?」

「……『死の宣告』、デュラハンの固有スキルで対象に死の呪いを与えるものだよ」

「ほう、よく知っているな。少し予定が狂ったがお前達冒険者は結束が硬いからな。そのクルセイダーは一週間後に死ぬ!死の恐怖に怯え、苦しむことになるのだ。こうしたほうがその娘も苦しむだろう、精々自分の行いを悔い改めるといいっ!フハハっ!」

「ゲスがっ……!」

迅の説明にデュラハンが得意気に補足する。

だが、俺はこのとき暫くパーティを離れていたせいで忘れていた、「な、何ということだ!すると、お前は呪いを解いてほしければどんないかがわしい要求でも飲めと、そう言うんだな!!?」

「へ?」

うちのクルセイダーのドMっぷりを。

「見てくれカズマッ!あの兜の下のデュラハンの目を!あれは私を城へと連れ去り呪いを説いてほしくばどんなにハードコアな変態プレイを強行する変質者の目だ!」

「ええ〜〜!!」

ちよつとだけ、デュラハンに同情した……。

「囚われの女騎士、なんとも燃えるシチュエーション……だが、行きたくない!行きたくはないが……仕方ない、行ってくりゅ!」

「落ち着け、バカタレ!」

デュラハンに向かって走っていきこうとしたダクネスを俺と迅が必死になって止める。

「カズマ、僕の思考回路に理解不能な感情が行き交ってるよ」

「安心しろ、それは理解しなくていい感情だ」

「とっ、とにかく紅魔の娘よ。俺の城に爆裂魔法を撃つのはもうやめろ!そして、そのクルセイダーを助けたければ我が城に来るがいい!!配下のアンデッドを蹴散らし、俺のもとへとたどり着ければな!」

そう言っつて、デュラハンは去っていった。

「めぐみん、どこに行く気だ」

俺は一人デュラハンが去っていった方向に歩き出すめぐみんの手を掴んで止める。

「今回は私の責任です。私が城に行つて呪いを解除させてきます」

「やめとけ、お前じや一撃撃つたら終わりだ。俺も行く、ここでアイツを仕留められなかつた俺の責任でもあるからな」

「そういうことなら、僕も」

「私も行こう。さつきはふざけて済まなかつた。自分の呪いを解いてもらうのを人任せにするなど、騎士の名折れだ」

「……さつきの変態発言で十分騎士の名折れだと思うけどな」

「くうっ！流石、カズマ。あの、デュラハン以上に私のツボを心得ている」

……戦力は俺とダクネス、迅とめぐみん。作戦によつては一撃与えることくらいはできるだろう。そう思い、城へと歩き出そうとしたとき。

『セイクリッド・ブレイクスペル』!!』

アクアから放たれた神聖な光がダクネスに命中した。

「もう大丈夫よダクネス、呪いは解除したから！この私にかかればデュラハンの呪いも楽勝よ！」

……忘れてた、こいつ女神だった。

「つたく、折角皆やる気になつたのに、よ……？」

ドライバーからキーを抜いて変身を解いた瞬間、俺の視界が歪み足に力が入らなくなる。そのまま、地面に倒れそうになったとき迅が支えてくれたお陰で地面とのキスは免れた。

「……バイタルが大分低下してる。ちよつと無茶しすぎたみたいだね」

「……みたい、だな」

ダクネスの呪いが解けたおかげで痛みを抑えてた興奮物質の分泌が途絶えたのかさつきまでの戦闘での痛みが全身を駆け巡る。

「カズマッー！」

迅に支えられた俺のもとにアクア達が駆け寄ってくる。アクアが回復魔法で目に見える傷を治してくれる。

「カズマ……その……」

その中でこの騒動の原因であるめぐみんが申し訳なきように、今にも泣きそうな目で俺を見ている。

「まったく、そんな顔をするなら最初からあんなことやるなよ……。だが、凹んでる子供相手に追い打ちをかけるほどの体力は俺には残っていない。」

「だから、めぐみんの帽子にポンツと手をおいて短くこう告げた。」

「安心しろ……次は勝つ」

「そうだ、今度こそ……アイツを倒す。それが、俺がこのドライバーを託された理由なんだからな。」

「なあ、迅……」

「なんだい、カズマ？」

「魔王軍の幹部って全部で何人いるんだ？」

「……僕が知ってる数が変わってなければ、魔王の幹部の席は全部で九つだよ」

「九人……そうか……」

その後、迅は俺に何も言わずに街の中に戻っていった。

## カノジヨの目に映るのは？めぐみん視点

皆さん、始めまして。紅魔族随一の魔法使い、爆裂魔法の使い手、めぐみんです。

今日のお話はカズマに変わって私視点での話をさせていただきます。

「カジュマしやああああん!!」

さて、今私達の前には檻の中に入れられたアクアが無数のブルータルアリゲーターに群がられてる姿があります。

……話は数時間前に遡ります。きっかけはアクアがまた無駄遣いしてお金をカズマにせびつてるところからでした。

『もうお前に金はかさんつ！宿代を出してもらっただけありがたいと思え！それでも金がほしいなら働け冒険者っ！』

まあ、カズマの言うことも最もなのでアクアは大人しく依頼を受けてきた。その内容は汚染された湖を浄化することらしい。

アクアは体に触れた液体を真水にする不思議な体質らしく、半日水に使っていけば湖は完全に浄化されるらしいがその間モンスターから身を守る手段としてカズマが提案したのがあの檻というわけです。

結果、アクアは湖に生息しているブルータルアリゲーターにたかられてるわけです。

私の爆裂魔法ではアクアを巻き込んでしまいそうなので、こうして畔で見守ることしかできないのです。

ですが、私とその隣でそれを見守るダクネスにはもう一つ心配事があります。

私は頭上を見上げます。

「喰らえっ!!」

「うっ、やるねっ!!今度は僕だっ!」

そこではゼロワンとなったカズマと変身した迅が空中戦を繰り広げていた。今は剣を持った迅をショットガン?という武器を持っているカズマが胸の装甲から放った蜂で攻め立てている最中だ。

最初に迅と戦ったときは一矢報いたただけで惨敗したと効いている

が今は互角に戦えているように私には見える。

……あの日。ベルディアが街に来た日からカズマは迅との特訓をさらにハードにしたように思う。私達が出会ったばかりの頃のカズマなら絶対にこんなことはしなかっただろう。

少なくとも他の依頼中の時間を使ってまで、特訓をしたりはしなかっただろう。

だけど、何処かカズマらしいように感じます。

カズマは照れ隠しで口は悪くなるが、責任感が強い。

私達のパーティを全員何処か問題を抱えている。例えば私は火力が出せるが連発できない。アクアはあの無鉄砲さ、ダクネスは性格。

カズマは最弱職の冒険者ではあるが、頭の回転が早く入ろうと思えば別のパーティに入れるだろう。だけど、カズマは私達を置いていくようなことはしない。一度仲間になった以上、パーティを率いてる責任感を感じているからだ。

だからだと思う。カズマは私達紅魔族の祖、ヒデンアラタという人物から託された仮面ライダーゼロワンで戦うことに責任感を感じている。ゼロワンは魔王軍を倒すためにアラタさんが未来の冒険者に託した、謂わば彼の希望。それを成り行きとはいえ受け取ってしまったカズマは魔王を倒さなければいけないという責任を感じているのだと思う。

魔王を倒す、というのは私も目指してみたい。カツコいいですし……だけど、アソコまで焦って戦うことはないように思えるのは否めない。

このままだと、カズマは戻れないところまで行ってしまいかもしれない、そう考えずにはいられなかった。

「……大丈夫ですかね、カズマ」

「確かに心配ではあるが……今は迅に任せよう。アイツが一番近い立ち位置にいるのはきつと迅だからな」

「……そうですよね」

ダクネスの言葉を否定できないのは少し悔しい。

私達二人は迅より早く出会った。だけど、一緒にいた時間はきつ



と、もう迅の方が多だろう。それに、何処か二人の距離感が友人というより、親友のそれに近いようで……。

そんなことを考えていると、私達の背後に何かが降ってくる。きつと、戦いが終わったのだろうか。

「どちらが勝ったと思いますか？」

「カズマじゃないか？ さっきまで、押していたし」

「では、私は迅に賭けます。負けたほうが今日の夕食を奢るといっているはどうですか？」

「ふふっ、いいだろう。受けて立つ」

やがて、粉塵が晴れるとそこには地面に倒れ込んだカズマとそこへ剣の鋒を向けている迅の姿があった。

賭けは私の勝ちですね、ダクネス。

## カゾクの話

俺はベルディアの放つ魔法への対策として迅との空中戦のために変身していたゼロワン・ライトニングホーネットの状態で地面へと落下する。

背中に凄まじい痛みを感じる中、首元に迅のアタツシユカリバーの刃先が向けられる。

「……クソツ、また負けたか」

「今回は危なかったよ、もうちよつとで負けそうだとヒヤヒヤしちゃった」

アタツシユカリバーをアタツシユモードにして手を差し伸べてくる迅の手を取り立ち上がり、互いにベルトに挿入してあるプログライズキーを抜いて変身を解除した。

「迅、シャイニングホツパーキー。あとどれくらいで完成する?」

「……まだ、5割くらいだね。他のプログライズキーのデータを直接送ればもう少し早くできるかもしれないけど、その為の装置がないから」

「お前と会ったあの研究所にはないのか?」

「ないよ。あそこはゼロワンの資格者を待つだけの場所だもん。それ以外は全部父さん達が持ってた」

なるほど、だからあの研究所ガラガラだったのか……。

そのことを思い出すと、前から聞こうと思っていたことを聞こうと思った。

「そういや、お前以外のヒューマギアの場所ってわからないのか?」

「無理無理、一体のヒューマギアから情報が漏れたりしないようにマスター権限が同一人物に譲渡されない限りゼアの力で探せないんだ」「マスター権限?」

聞き覚えのない言葉に、俺は首を傾げる。

「僕のマスター権限はもう君に譲渡されてるよ。まあ、特に命令に従わせる効力とかはない座標だけがわかる機能だけだ」

なるほど……それじゃ、他の3人と会ってその権限をもらわないと

場所はわからないのか……。

俺と迅はめぐみん達の隣に座り、話を続ける。

「3人とも別々の研究所を管理しているはずんだけど……心当たりがあるとしたら、まあ紅魔の里じゃないかな？」

「紅魔の里ですか？」

確かに紅魔の里はアラタさんはかなり縁のある土地だ。なんせ、紅魔族の原点はアラタさんが生み出した改造人間ってくらいだからな……。

「めぐみん、心当たりあるか？」

「そういえば、里の外れにいかにもな洞窟がありますね……でも、何度か中に入りましたが何もありませんでしたよ？」

「……アラタさんのことだから、迅のときみたいに仕掛けがあるとかかもしれないな」

しかし、紅魔の里か。遠いな。俺達が街を離れている間にベルディアが攻めてきたらなんの意味もないしな……。

「迅、他に心当たりはないのか？」

「……ゴメン、ないや」

「？」

気のせいかな？コイツ、今何かを隠したような……。

まあ、今はいいか……。今はベルディアを妥当するための策を考えなくちゃなあ。

「なあ、迅」

「ん？」

「原典の仮面ライダーゼロワンってどんな人だったんだ？」

本物のゼロワンなら、こんな時にどうやって立ち上がったのかが気になり尋ねてみる。すると、迅は気まずそうに口を開いた。

「あく、悪いんだけど。それは教えられないんだ」

「？どうしてだ？」

前にゼアにはアラタさんが残した様々なライダーの情報が記録されていると迅に聞いたことがある。まさか、肝心のゼロワンのデータだけないなんてことがあるわけない。

「だって、君。それを話したら、その人物を真似るでしょ？」

「まあ、そうだけど……。」

そう言うと、迅の表情が真剣なものになる。コイツ、こんな顔も出来たのか……。

「……カズマ、よく覚えておいてほしい。僕達は本物の仮面ライダーゼロワン達からしたら偽物だ」

「……まあ、そうなるわな」

「だけど、志まで偽物になっちゃいけないんだ」

「どういう意味ですか？」

「私達にはよくわからないのだが」

「……………」

めぐみんとダクネスは疑問符を浮かべているが、迅が言いかけた気がする。つまり、迅は原典を知った俺が本物のゼロワンを真似るだけの存在になることを危惧しているんだ。

確かに時間をかけた志ならまだしも、そんな薄っぺらい志で戦える自信はない。

俺はライジングホッパーキーを見ながら、そう考える。そんな俺に迅が言葉を付け加える。

「君は君らしい仮面ライダーゼロワンを目指さなきゃいけないんだよ」

俺らしい……ゼロワン、か。

「見つけられるかね……俺に」

「きつと見つかるよ、そんな気がする」

……そうかもな。

「……そういや、お前の仲間のヒューマギアってどんな奴らなんだ？」

なんか、シリアスになった空気に耐えきれなくて前からちよつと気になってたことを聞いてみた。

「あつ、それは私も気になってました」

「ああ、私もだ」

確か、コイツの上に亡つていう女性型のヒューマギアがいるんだよ

な、亡姉ちゃんって呼んでたし。

「僕の一つ上にいる亡姉ちゃんは優しいんだけど、無口でね。あと、綺麗な人だよ」

「へえ〜。」

それはそれは……ちよつとお近づきになってみたい……。

「仕事はプログライズキーの開発と管理を担当してるんだ。カズマが持つてるキーの半分は姉ちゃんが、もう半分は父さんが作ったものだよ」

プログライズキーを作るヒューマギアか……見つかつてくれれば戦力増強できるかもな。

「その上に雷兄ちゃん。面倒見がいいんだけど、怒りっぽくてね。口癖が『雷落とすぞー!』だったよ」

「その彼の役目はどんなものなんですか?」

「武器の開発なんかを担当してるよ。アタツシウエポンは雷兄ちゃんが作ったんだ」

武器、か……。これからのことを考えると、やっぱり装備の強化もほしいよなあ……。でも、怒りっぽいのか、ちよつと怖いな。

「最後に一番上、つまり一番最初に父さんに作られたヒューマギア、滅。父さんの助手でヒューマギアのチューニングとかその他全般できる万能型なんだけど……」

「「けど?」」

「なんというか、笑顔が恐ろしく怖いんだよね……。」

「え?そんなこと……?」

「そんなことって……!尋常な怖さじゃないんだよ!滅茶苦茶怖いんだから!ユアちゃんとフタバちゃんなんて、子供の頃それを見て泣き出しちゃったんだから!」

「ユアちゃん?」

「フタバちゃん?」

また聞き慣れない名前に首を傾げる。

「アレ、話してなかった?父さんには赤ん坊の頃から面倒見てた双子の姉妹がいたんだ……僕達には妹みたいな子達だったよ」

そういった、迅の顔は何処か寂しげだった。

……当然だよな、その二人は人間。アラタさん同様まず、間違いないこの世にはもういない。

「その二人はなんで、アラタさんが面倒を？」

「僕が生まれたときには居たからよく知らないけど、父さんの友人のアークウィザードに頼まれたって聞いてる」

「何故、そのアークウィザードはアラタ殿に子供を？」

「なんでも、そのアークウィザードとはある国の王宮で虐げられてた妾の女性に恋をしたらしくて……とある大きな依頼の報酬で彼女を望んだら。全面戦争になったらしくて……」

なるほど……反逆者の子供として生かすわけにはいかないと友人であるアラタさんに任せたと。

「アレ？アラタさんって、独身だったのか？」

「……一人だけ愛した女性がいたらしいけど、病で先立たれたって聞いているよ」

「……そうか」

つまり、アラタさんにとっての家族はその姉妹と、四人のヒューマギアだけだったのか。

「あつ、そろそろ終わったみたいだよ」

しんみりきた雰囲気破るように迅が澄んだ湖に走っていく。アラアの浄化が終わったんだろう。

……アラタさんのためにも迅のためにももつと頑張らなくちゃいけない、と俺は覚悟を新たにしました。

ケツトウ開始！

「佐藤和真っ！僕と勝負しろ！」

……なんで、こうなった？

クエストからの帰り道俺は今、見るからに勇者ですって感じの鎧をつけてる奴に見るからにすげえ力を感じる剣を向けられている。

「アクア様を変な願いで連れてきたただけでなく、あまつさえ檻に放り込んでモンスターの囿にするなどという蛮行！とても許してはおけない！」

どうも、コイツは俺と同じアクアに転生させられたやつで、なんだっけ？魔剣グラムとか言うのを特典としてもらっていて自分を転生させてくれたアクアを崇拜しているらしい。

つい最近まで馬小屋で暮らしていることやその他諸々のアクアの扱いを聞いて憤慨し俺に剣を向けてきてるわけだ。

だが、その間にダクネスが割り込む。

「いい加減にしろ。さつきからなんだ、お前は？カズマのことを良くも知らずにペラペラと」

「そうですね、ウチのカズマはロクデナシですけど、いぎとなったら頼りになる人ですっ！」

ダクネス、めぐみん、お前ら俺のことをそんなふうに……。この際、ロクデナシって言葉は流そう。ちよつと泣きそうよ、ボク。

「その風体、クルセイダーとアークウイザード。それに随分綺麗な人達だな。君はパーティーメンバーには恵まれてるんだね」

「あ？？」

おい、そいつらがいいのは見てくれただけだぞ。この野郎。うちのパーティーでマトモな奴なんて迅くらいなもんだ。

「その君なんて、そんなぼろぼろな格好をさせられて！」

「あつ、コレ父さんからもらった服で割と気に入ってるんだ」

「え？あつ、そう……。」

まあ、数百年あんな洞窟にいたら服もそれだけボロボロになるよな……。今度服屋に行って作り直してやろう。

「君達、よければ僕のパーティに入らないか？不自由な生活はさせないし、高級な装備品も買い揃えてあげよう」

なんか、ウチのパーティメンバー勧誘し始めた。そういうや、迅の奴がさっきの一言から話してないけど……。

「……………(スチャ)」

「(ガツ!)」

あつぶねえ！コイツフォーライター取り出してやがった……！慌てて手首を掴んで首を横に振ると、唇を尖らせて懐にしまい込んだ。

そーいや、アクア達はどうかと背後でヒソヒソと話している三人の声に聞き耳を立ててみると。

「ちよつとやばいんですけど、あの人本気で引くぐらいやばいんですけど。ていうか勝手に話すすめるしナルシストも入っていて怖いんですけど」

「どうしよう、あの男はなんだか生理的に受け付けない。攻めるより受けるほうが好みの私だが、あの男は無性に殴りたい」

「撃つていいですか？あの苦労知らずの、スカしたエリート顔に、爆裂魔法を撃つていいですか？」

滅茶苦茶、不評だった……。まあ、俺達はこれでも協力して魔王軍幹部と戦った仲だ。割と絆は強いはずだ。

「とにかくっ！君みたいな奴にアクア様は任せておけない！君を倒して、アクア様を開放するっ！」

だが、このイケメンはなんとしてもアクアを引き込みたいらしい。仕方ねえ、やるか……。

ゼロワンドライバーを取り出そうとしたが、そこでさっき聞いた迅の言葉が頭に引っかかる。

『君は君らしい仮面ライダーゼロワンを目指さなきゃいけないんだ』

この戦いは、果たしてゼロワンとして戦う必要のある戦いだろうか……。ゼロワンは魔王軍と戦うための代物、それを人間相手に使ったらそれは兵器以外の何者でもない。

俺は胸に突っ込んだ手を離して、アタツシユカリバーだけを展開す



る。

「ちよつ、ゼロワンにならない気なのカズマツ！」

「黙ってる、コレは俺の喧嘩だ。」

アクアの声を無視して、俺は構えを取る。

「行くぞっ！」

「こいつ！」

「はあっ！」

振り落とされた魔剣をアタッシュカリバーで受け止める。

「くっ！」

この野郎、なんて力してやがる……！明らかにレベル30は超えてやがるな。

だがなっ！

「オラッ！」

「なにっ!？」

俺だつて迅に鍛えられて、とつくにレベル40は超えてんだよっ！  
なにより、アイツの攻撃に比べたら遅すぎるんだよ。

「はあっ！ぜいっ！たあっ!!」

「クッ！」

怒涛の連続攻撃を叩き込み、奴に攻撃のすきを与えない。考えてみれば、このアタッシュカリバーは雷って奴が作ったって言っても刃の部分のアラタさんが作ったはずだから魔剣と同等と見てもいいかもしれない。

「ふっ！」

「なっ！」

そして、俺のつきが奴の魔剣を弾き飛ばした。トドメだこの野郎……！一度、後ろに下がりジャンプする。

「ライダー、キーーーーーック!!」

「ぶべっ！」

俺のライダーキックが御剣とか言う、イケメンのムカつく顔に突き刺さった。そのまま吹き飛び、地面を数回バウンドして動かなくなった。

「キョウヤツ!!」

アイツの取り巻きが心配した様子で抱き起こすが当たりどころが悪かったらしいピクピクしてるだけで立ち上がる気配はない。

「迅、死んでないよな?アレ?」

「うん?脈拍は正常だし、命には別状なさそうだよ」

そうか、仮面ライダーが流石に人殺しはまずいよな。

「カズマ、勝負の景品は?」

「バーカ、仮面ライダーが追い剥ぎなんてできつかよ」

そんなことやってみろ、俺はマジでゼロワンの資格を失っちゃまう。なにより、アラタさんに申し訳が立たねえだろ。

オマケにこっちはさっきの迅との特訓で疲れてんだ、あくあ、早く帰って飯食って寝てえ……。

## サクセン会議

「なんでよく!!」

ギルドの換金カウンターでアクアの悲鳴がギルド中に響いた。

「どうしたの、アクアは？」

「昨日あった、ミツルギってやつ居たる？アイツがギルドから借りた檻をカツコつけて斬つちまったからその弁償分を賞金30万エリスから差し引かれて、3分の1になつちまったんだと」

迅の質問に聞き耳スキルで聞いていたアクアと受付嬢の話を説明してやると、迅はふくんと行って直ぐに興味を失った。

ダクネスとめぐみんは少し離れたところにあるクエストボードで良さげなクエストを探している。タイムリミットも残り少ないからな……。

ベルディアの奴は多分ダクネスにまだ『死の宣告』がかかっていると思ってるだろ。なのに、一週間以内に俺達が赴かなければ確実に確認に来る。そしたら、今度こそ犠牲なしではいられない。

「見つけたよ、佐藤和真！」

だが、そこへ噂をすればなんとやらというが、声のした方向を見ると、そこには昨日俺がライダーキックを顔面に喰らわしたソードマスターの、確か……ミツルギって奴が立っていた。

「なんのようだ？」

「君に話が『ゴッドプロー』!!」ぐべらっ！」

俺に話しかけてきようとしたミツルギの顔にアクアの必殺ゴッドブローが炸裂した。野郎、また腕を上げやがったな、あれなら世界を狙えるぜ……!!

「きよ、キョウヤ！」

彼を慕う少女達が吹っ飛ばされたミツルギに駆け寄るが、それよりも先にアクアがツカツカと近づいてその胸ぐらを掴む。

「ちやつと、アンター！アンタが壊した檻の弁償金払いなさいよっ！三十万よ三十万！」

「あつ、はい……。」

胸ぐらを捕まれ、怒鳴られたミツルギは大人しく金が入っているであろう袋をアクアに差し出す。つうか、弁償金って二十万だったよな……？

「さ、佐藤和真……今日は君に話があつてきたんだ」

「なんだよ？言つとくがウチのパーティメンバーはやらねえぞ、あんなんでも俺の仲間なんぞでな。それとも、昨日の仇討ちでもしに来たか？」

「いや、アレは100%僕に比がある。君のことをよく知らずに失礼なことを言つてしまった申し訳ない」

そう言つてミツルギは謙虚な姿勢で頭を下げてきた。なんだ、コイツの態度の変貌ぶりは……。

「仮面ライダー……。」

「ツ!!」

ミツルギの呟きに俺と迅に緊張が走る。

「驚いたよ、最近街で噂になつてる魔王軍幹部を追い返した仮面ライダーの正体が君だと聞いたときには。それは、アクア様から貰つた力なのか？」

「……違う。俺達よりも早くこの世界に来た先輩が魔王を打倒するために後輩に残した力だ。俺はそれを成り行きで受け取つた」

言いながら、懐から取り出したゼロワンドライバーをミツルギに見せる。

「そうか……。改めて、今日は君に話があつてきたんだ」

「……………言つてみるよ」

取り敢えず話だけ聞こうと思ひ、先を急かしてさつき頼んだオレンジジュースを煽ろうとするが、

「僕達と協力して魔王軍幹部、ベルディアを打倒してほしいんだ」

その意外な言葉にオレンジジュースを吹きかけた。

「ど、どういう意味だ、初めから説明しろ」

「そうだね。君も知ってるだろう、この街の外れにある古城に住み着いているデュラハン、魔王軍幹部のベルディア。奴のせいでこのあたり一帯の生態系が崩れ危険なモンスターが溢れている。なにより、街

に住む人たちの気が休まらない」

「だから、俺達で討伐隊を編成すると?」

「そうなるね」

「……………悪い話ではない。前にアクアの奴に聞いたがコイツが持っている魔剣グラムは神器。アンデッドや邪神、悪魔相手に凄まじい威力を発揮するらしい」

「この間の戦闘で決定打を与えられなかった俺達にはその穴を埋める事ができる機会だ。」

「アクア様の浄化の力、君たちの仮面ライダーの力、そして、僕の魔剣の力があれば例え魔王軍幹部でも互角以上に戦えるはずだ」

「だけどさあく、それって都合が良すぎないかな?」

だが、その誘いを否定したのはまさかの迅だった。

「迅?」

「だって君、昨日アレだけカズマのこと侮辱しといて今更その力を知ったら協力してくれなんて、虫が良すぎると思わないの?」

「おい、迅……………」

「……………確かに君の言うとおりで。だが、僕にも魔剣を託された者として、街の平和を保つという使命がある。昨日のことは何度でも謝ろう。だから……………」

「コイツもコイツで、それなりの覚悟を持ってるんだな。チラリと迅を見るとバツが悪そうな顔でそっぽを向く。ホントに、そういうところ人間らしいよな……………」

「わかった、仲間には俺達から伝えておく」

俺は椅子から立ち上がりて手を差し出す。

「よろしく頼む」

「こちらこそ、よろしく頼むよ」

ここに、対ベルディア討伐部隊が結成された。

~~~~~

「……………」

「……………」

あの話し合いのあと、仲間から多少の反発はあったもののベルディアを倒すという名目のもと組むことを承諾してくれた。

今は、ベルディアの城に向かう真つ最中なわけだが……。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

け、陰悪雰囲気パネエよく!!

後ろからだだ漏れの不機嫌オーラが戦闘を歩く俺達に針のように襲いかかる。

なにこれ、なんなのこれ？拷問でしょ、拷問以外の何者でもないでしょ、隣のミツルギなんてこの空気のせいで汗ダラダラじゃねえか……。

「全く、何故こんな人達とパーティを組まなきゃいけないんですか……………」

「それはごっちの台詞よちびっ子！なんで、キョウヤを傷つけた男の仲間なんかと協力しなきゃいけないのよ!?!」

「おい、今言ってはならないことを言いましたね。爆裂魔法で吹き飛ばす覚悟はできていますか？そもそも、貴方のところの優男は勝手に勝負を挑んで勝手に負けたんでしよう、逆恨みも甚だしいですねっ!」

「キョウヤは優男なんかじゃないわよ!」

やべえよく、めつちや喧嘩してるよ……………。こんなんで、ベルディア戦になんて望めるかよ……………。

「おい、めぐみん。いい加減にしろ、これから一緒に戦う仲間だろう!」

「クレメアもその辺にしてよ」

ダクネスとフィオとか言う盗賊の女の子が、めぐみんとクレメアというランサーの少女を宥めるがどんどん二人はヒートアップしていく。

「だいたい、あんなナルシストの何がいいんですか!?! 私達が断る気のないと思ってるあの誘い方、ホントに気持ち悪かったんですけど!?!」  
「あつ、それ私も思った」

「グハツ……!」

「おっ、アクアさんにめぐみんさんや。ミツルギ君にさり気なくダメージ入ってますけど〜!」

「わかってないわね、あれはナルシストなんかじゃないわ。優しさよ、あの優しさがキョウヤの魅力の一つなのよ。それがわからないなんて所詮はおこちやまね」

「なんだと、貴様っ!」

杖を振り上げクレメアに遅いかかろうとするが、ダクネスに背負いじめにされている状態なので背の小さいめぐみんは手足をジタバタすることしかできない。

そこへ空気の読めない駄女神がさらに煽りに入る。

「でも、この作戦はいくらなんでも都合良すぎないかしら? いくら決定打がないからつてようはカズマと迅を囷にして自分だけいいこともつてこうつて作戦でしょ?」

「あつ、アクア様! 僕はそんなことは決して……!」

「でも、そういう作戦じゃない」

「それは……」

ミツルギまでオーラに当てられて萎んでいく。おい、迅、こういう雰囲気と和ませるのはお前の得意分野じゃなかったか?

そう思い、見てみると迅はそっぽを向いていた。どうやら、俄然せずを貫くらしい。

「はあ、しょうがねえなあ……!」

「……お前らしい加減にしろよ?」

「……ここはガツンと言ってやらなきや駄目だ。」

思ってた以上に低い声が俺の口から出た。その声は口論を止めるのに十分な力を持っていた。

「か、カズマ……?」

「な、なによ、急に……」

俺は真剣な口調で諭すように皆を見回して話す。

「俺達はなんでここにいてる？ベルディアを倒すためだろうが。アイツがいなくならない限りアクセルの街の人たちは震えて暮らさなきゃならねえ。俺達はアクセルの街に住む全ての冒険者の代表なんだ、その責任を今一度ここでしっかりと再確認しろ」

「責任……。」

ミツルギを含む6人はその言葉を噛みしめる。

「そうだ、俺達は街の奴等に託された側の人間なんだ。託された以上、責任が付きまとう。その責任がねえなら今すぐ街に引き返せ、ない奴が来ても足手まといだ」

そう言っただけで俺は歩き出し、その隣を迅が歩いてくる。そして、少しするとミツルギが俺の後ろをついてくる、その後をアクア、ダクネス、めぐみん、フィオ、クレメアと続いてくる。

「あゝ、緊張した……。」

柄じゃねえよ、あんなの……。平静を保つのがかなりきつかったぜ……。

「やるね、カズマ。大したカリスマだよ」

どうせ、心拍数とか凶って俺の心情を知っていたであろう迅の奴が茶化すようにいつてくる。

「こうでもしなきゃ、纏まらねえだろ。この私の強いパーティーは……。それに、」

「それに……？」

「アクセルの人達だけじゃなく、その他にも託されちゃったもんがあるからな」

腰に装着されたゼロワンドライバーを見ながら、迅に言う。アラタさんに託されたこのドライバーを持つ俺にも責任があるからな。

「その責任を果たしに行こうぜ相棒」

「……うん、行こうカズマ」

決戦のときは近い……！



## サクシ策に溺れる

「さくして、迅。見張りは何体くらいいる？」

「ちよい、待ってね」

迅は耳の機械を使い、ゼアと更新。城の前で待機している見張りの数を確認する。

「約三十体のアンデッドナイトが待機している、他のところにも十をこえるアンデッドナイトが見張りについている。どうやら、僕等が来てもいいように見張りを強化してるらしいね」

各場所に十体以上の見張りか……。

「隠密による作戦はまず不可能と見ていいな。」

「どうする、佐藤和真？」

「正面突破が妥当だろうな、他の所は数が少なくても罠があると考えるべきだ。」

「私の爆裂魔法で城ごとベルディアを吹き飛ばすというのはどうでしょう？」

「無理だ。お前は既にあの城に何度も爆裂魔法を叩き込んでるんだろ？それでも、アイツがピンピンしてたところを見ると闇雲に打つのはリスクが高い。撃つなら奴がどの位置にいるのか見極めてからだ」

「……わかりました」

俺の意見を聞いて、めぐみんは引き下がる。

「俺と迅が特攻する！ミツルギ、クレメア、ダクネスは第二陣、アクアは支援魔法、めぐみんとファイオは待機だ」

「「「了解っ！」」」」

『F a n g g e r！』

『W i n g g e r！』

『A u t h o r i z e e！』

バイティングシャークキーを取り出して起動させオーソライザーに翳す。

空からホッパーとシャークのライダモデルが空から落下してくる。

「二変身っ！」

『Progrize!』

『Forcerize!!』

『ギリギリバイ!ギリギリバイ!Biting Shark!Fangs that can chop through conc rete.』

『Flying Falcon!Break down!!』

ホッパーとシャークが装甲になり、サメのようなフェイスと、俺の両手にエラのような刃が装備されているバイティングシャークの形態になる。

「はあっ!」

「たあっ!」

俺のエラのような刃、アンリミテッドホッパーと迅の翼による斬撃でボロボロの騎士型のアンデット、アンデットナイトを蹴散らしていく。

「私も行くぞっ!」

「行くよっ、クレメア!」

「任せて、キョウヤ!」

それに、ダクネスにミツルギ、クレメアの奴が続いてくる。一体一体は弱い、これなら十分押し切れると考えていると、

「……………(ピタッ!)」

「ん?」

目の前のアンデットナイト達の動きが止まった。他のところも見てみるとそれぞれが相手していたアンデットナイト達も動きを止めていた。

だが、次の瞬間一斉に同じ方向に向かっていく。その先にいたのは、

「ッ!逃げろ、アクア!」

「え?私?」

そう、奴らはアクアに向かって一斉に向かっていた。

「チッ!」

『Fire!』

『Autnorize!』

『Gigant flare! Flaming Tiger! Explosive power of 100 bombs.』

走りながらタイガーキーを起動させ、ドライバーに差し込みフレイミングタイガーのフォームに変身し、アクアに群がろうとしていたアンデットナイトを焼き尽くす。

「まずいよ、カズマっ!」

「どうした、迅ッ!」

「門の中や他のところから無数の敵性反応が近づいてくるっ!」  
「なっ!?!」

迅の言葉に俺もミツルギも声をあげる。

他のアンデット達もここへ向かってきているってことかよ!?! そう考えているうちに巨大な門が開き中から無数のアンデットナイトが溢れてくる。

「どうする、佐藤和真! このままじゃジリ貧だ!」

「……派手に動くなっ! 円陣だっ!」

俺の叫びに前衛組がハツとなってアクアを中心に円陣を組む。

「落ち着いて隣の奴の背中を守れっ! 数は多いが雑魚の群れだ! 消耗を抑えて粘ればいずれこちらが有利になる! アクアを狙ってくるなら寧ろ好都合だ!」

「なるほど、理に適った作戦だ。ふっ!」

ミツルギが俺の作戦に賛同すると同時に、俺の背後に迫っていたアンデットナイトを切り裂いた。

~~~~~

「ふう〜。なんとか全滅させられたな」

「ああ」

円陣作戦は功を成し、無事門に群がっていたアンデットナイト達を排除した。なんとか、少ない力で倒し切れた。

「さあ、突入するぞ!」

俺の号令で門の中へと入るが、

「うっ……!」

「アクア様?どうかなさいましたか?」

「この城、なんか気分悪くない?」

「そうですか?確かに息苦しい気はしますが……。」

「私が女神だからかしら?それとも、アンデット臭が酷いから?」

アクアがうめき声を上げるがどうやら、歩けない程ではなさそうなのでミツルギに任せて先を急ぐ。こういう場合ってやつぱり最上階とかにボスは待ち構えてるよな……。

それにしても、

「さつき、門から出てきたやつを見る限り……城内のアンデットの大  
半が消えてると考えていいな」

「ああ、これはベルディアも予想外だったろう」

まさか、アクアにアンデットを引きつける力があるなんて知らな  
かったぜ。

「取り敢えず、先を急ぐぞ」

~~~~~

「この部屋は……?」

俺達が城を登り続けていると、やたらと拾いいかにもな部屋に辿り  
着いた。ここまで登ってきた感想を言うと、どうやら全てのアンデッ  
トナイトは門前で倒してしまったらしい。

一体も現れなかったから。

「フィオ、畏感知に反応はあるかい?」

「ううん。私の畏感知には反応ないよ、キョウヤ」

盗賊職のフィオの言葉で安心し、全員が部屋の中に入る。各々、部  
屋の中を探索してみるが変わったところは特に何も、

そう思った瞬間だった。

ダクネス、ミツルギ、クレメア、フィオの足元に魔法陣が現れたの  
は。

「なにっ!?!」

俺はヤバい予感がし、一番近くにいたダクネスに手を伸ばすが、  
「ダクネスッ!」

俺の手が届く前にダクネスの姿は何処かへと消えてしまった。ミ

ツルギ達も同様だ、この場にはアクアとめぐみん、迅そして、俺だけが残ってしまった。

「クソツ、どうなってる罫はないんじゃないのか!？」

「駆け出しの街の盗賊がわかるような罫ではなかっただけの話だ」

「「ツ!!」「」」

向かい側にある大仰な扉がギイイイという音ともに開くと、そこには俺達がここに来た目的が堂々とした姿で立っていた。

「ベルディア……!」

「久しいな仮面の戦士、紅魔の娘、そして、アークプリーストよ」

ベルディアが部屋に入ると同時にバンツと勢い良く奴の背後の扉も閉まる。

「ダクネス達をどこにやった……!?!」

「安心しろ、城の中にランダムで飛ばすだけのトラップだ」

こいつの話を信じるわけじゃないが、少なくとも即死系の罫じゃなかったことは安心しよう。

「ノコノコ現れたはね、糞アンデット!これでも喰らいなさい!『セイクリッドターン・アンデット』!」

アクアが速攻で必殺の対アンデット最高威力の魔法を放った。だが、

「効かんな」

「なっ!?!」

借りにも女神の対アンデット魔法だぞ!

アクアの方を見ると自分自身、信じられないという顔をして掌を見ている。

「なんで……?いつもより力が出ない」

力が出ない?そこで、俺はさつき城に入ったときアクアが気分が悪いと言ったことを思い出す。

「まさか、この城は……!?!」

「気付いたか。この城には神聖魔法の力を半減させる結界が張り巡らされている。この城そのものがお前達のために用意した罫だったのだ」

つまり、この城そのものが結界になって、アクアの力を阻害しているってことか……？

そこへ、めぐみんが得意気な表情で杖を持つ。

「ふっふっふっ、城そのものが結界だと言うなら私の爆裂魔法で吹き飛ばしてしまえばいいだけのこと！策を見誤りましたね、ベルディア！生き埋めになるから、撃てないと思ったら大間違いですよ！」

多分、変身してる俺達がいれば瓦礫程度ならなんとかなれると計算してるんだろう。実際、その程度なら飛べる俺達が崩壊前に城から逃げればどうとでもなる。

だが、待てよ……生き埋め？

「めぐみん、撃つなっ!!」

「え？」

俺の叫びに杖に魔力をためようとしていためぐみんがやめる。

「テメエ、そのために俺達とダクネス達を分断したのか」

「ああ、なるほどね……。」

迅も俺の言いたいことを理解したように、鋭い視線をベルディアに向ける。

「どういうことですか？」

「こいつはな、めぐみんへの対策としてダクネス達を城のどこかに転移させることで爆裂魔法で巻き込んでしまう状況を作ったってわけだ」

「なっ!?!」

「魔王軍幹部なんて大層なネーミングを持つわりには随分コスイ手を使うなあ、おいつー!」

「なんとでも言うがいい。俺とて、出来る事なら正面から叩きのめすのが理想だが、俺は魔王軍幹部。魔王様の危険になりうる存在はどんな手を使っても排除するのが使命っ!!」

そう言う奴は傍らの床に刺してあった剣を抜き、俺達に向ける。

「あの日、お前達と戦ったあの時、貴様等はいずれ魔王様の脅威になると確信した。だからこそ、この手を使ったのだ。かかってくるがいい仮面の戦士達よ！せめてもの情けだ、あの日の決着俺自らの手でつけ

てやろう！」

……既に俺達の作戦は瓦解している。アクアの浄化の力は既に使えず、ミツルギもこの場にはいない。爆裂魔法も封じられてしまった以上、俺達に残されたのは仮面ライダーの力のみ。

だがー！ーッ！

「俺達だって最悪の状況を想定してなかったわけじゃない。お前に負けたあの日から、ミツチリ特訓してきたんだ……！勝手に勝った気になるのはやめてもらおうかッ！」

ここに決戦の火蓋が切つて落とされる。

## 宿敵とのサイセン

「アクア、コイツ持って下がってろ」

「わ、わかったわ!」

俺はアタツシユショットガンをアクアに預けてめぐみんと一緒に下げさせる。

「カズマ……」

「……約束したろ?信じて」

不安げな視線を俺に送るめぐみにそれだけ告げて、ベルディアの前に立つ。

「迅、コイツで行くぜ」

「了解っ!」

『Power!』

『Authorize!』

俺はパンチングゴングのプログライズキーを起動させ、オーソライズすると巨大なゴリラのライダモデルが現れる。

「行くぜっ!」

『Progrize!』

『剛腕GOGO!Punchng Kong!Enough power to annihilate a mountain.』

ゴリラが分解され、装甲に再構築される。ゴリラをモデルにしたフェイスパーツに上半身全体に黒い装甲、両手には巨大な拳『マキシムコンガー』が装備されている、フレイミングタイガーからパンチングゴングに変身する。

「僕から行くよ!」

迅は翼を展開し、羽の弾丸をベルディアの近くに放つ。

「くっ!目くらましか!?!」

ベルディアの視界が粉塵で覆われる、だが本来アンデットは生命力を感じする力に長けているが迅は生命体じゃないから感知されない。

「はあ!」

「くっ!」



そこへ、アタツシユカリバーを持った迅が特攻する。迅はあの戦いから、ベルディアの動きを何度も計算し、予測している。今のあいつなら奴の動きを避けるのは他愛ない。

アタツシユカリバーで斬撃を与えながら、ベルディアを攪乱する。そこへ、

「迅ッ、背中ッ！」

「オツケー！」

俺の合図に迅は身をかがめ、それを踏み台に飛び上がった俺のパンチを落下と助走の威力を載せてベルディアにかます。

「らあっ！」

「ぐうっ！」

流石のベルディアも高い打撃力を誇る、パンチングゴングのパンチはきいたらしい。さらに、俺は連続でパンチを叩き込み攻撃のすきを与えない。

「ぬう！舐めるなっ！」

だが、流石魔王軍の幹部というべきか無理矢理体制を立て直し剣を横なぎに振り払う。俺達はバックステップでそれを交わすがその剣に紫色の光が灯る。

「喰らうがいいっ！」

ベルディアがその刃を振るうと無数の魔力弾が俺達目掛けて飛んでくる。

『Dash！』

『スピーディーナンダー！Rushing  
Cheetah！Try to outrun this demon  
to get left in the dust.』

迅は飛行で、俺はパワー重視のパンチングゴングからスピード重視のラツシングチーターに変身し回避する。

「たあっ！」

「くっ！」

俺はそのまま、ベルディアの懐に飛び込み剣を持っている手を蹴り飛ばし魔力弾の発射を止めさせる。

「アクアッ！」

「えっ？あつ、はいっ！」

俺の合図にアクアは持っていたアタツシユショットガンを俺に投げ渡す。

『Shotgunrize!』

『Power!』

『Chargerize!』

投げ渡されたそれを素早く展開し、コングキーを装填して、再びアタツシユモードにする。

「ふんっ！」

ベルディアのよこなぎが振るわれたが、アタツシユショットガンを空中に放り、仰け反るようにして回避する。そして、

『Fullcharge!』

身を低くし、キャッチしたアタツシユショットガンの銃口をベルディアの腹部にあてがう。

「ゼロ距離だ、流石に効くだろ？」

『Punching Kaban Buster!』

「ぐおおおおおおっ!!」

放たれた拳型の弾丸がベルディアを吹き飛ばした。

「迅ッ、畳み掛けるぞ！」

「ああー！」

『Rising Hopper!』

『Rising Impact!』

『Flying Dysstopia!』

俺はライジングホッパーに戻り、プログライズキーを押し込み、迅はフォースライザーのアンカーを開閉し必殺技を発動する。

俺達は同時に立ち上がり、ベルディアにライダーキックを叩き込む。

「はあああああ!!」

「ぬおおおおお!!」

「はあっ!!」

俺達二人のキックが直撃したベルディアは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられる。

「これで、決まってくれば……なんて、わけがないよな……。」

この程度で終わってくれる相手なら何百年も魔王軍幹部なんてはつてないはずだからな……。

「クツ、ハハハハハハ!!」

その裏目の期待に答えるように粉塵により隠れた壁から奴の笑い声が響く。

「いつぶりだ、この高ぶりは……!まさかここまで俺を楽しませてくれるとは思わなかったぞ……!」

煙の中から出てきたベルディアの鎧は俺達のライダーキックを喰らったところからヒビが入っていたが、本人はまだまだやる気満々のようだ。寧ろ、火がついたようにすら見える。

「さて、ここまでのものを見せてもらった以上、俺も全力で答えなくてはなるまい」

次の瞬間、俺の隣にいた迅が背後へと吹き飛ばされた。

「なにっ!?!」

目で追えなかった?まさか、これ以上速度が上がるのか?

「余所見をしている場合か?」

「しまっ……!」

背後から聞こえた声に咄嗟に振り向いた俺だったが、それよりも早く俺の体を奴の剣が切り裂いた。

「グハッ!」

そのまま、吹き飛ばされ地面を数回バウンドしてゴロゴロと転がりようやく止まったところでダメージが限界を迎えたらしく変身が解除される。

「ほう?急所は外したか……大した判断能力だ」

「ハアハア……。」

「カズマツ！」

地面に倒れた俺を心配し、アクアとめぐみんが駆け寄ってくる。危なかった……反射的に後ろに飛んでなかったら、間違いなく俺は死んでた……。だが、どのみち変身が解除される程のダメージを喰らったせいで全身が痛み頭がクラクラする。

「だが、鎧が解除されたところを見るとその小僧はここまでのようだな」

「……ここまで、だと？笑わせんなよ……。」

ふらつく頭を精神力で無理矢理働かせながら立ち上がる。足もふらつくが今更、そんなこと関係ねえ……！

「確かに俺の強さは仮面ライダーによるものだ。けどなっ、俺自身も運の良さと諦めの悪さだけは大したもんだっ！……テメエを倒すためなら十回だろうと二十回だろうと立ち上がってやる！」

全身がズキズキ痛むが、ライジングホツパーのキーを持ち再び変身の構えをとる。

「カズマツ！」

その隣に、さつきベルディアに吹き飛ばされた迅が立つ。

「迅、やるぞ……！なんとしても、ここでアイツを……！」

倒す、と言おうとしたとき俺の腹部に鈍い痛みを感じた。視線を落とすと、そこには俺の腹部に迅の拳があり、迅に殴られたのだと脳が結論づけるまでそう時間はいらなかった。

「ゲホッ！ゴホッ！」

俺は痛みで膝を付き、腹部を殴られたことにより気管の一部から空気が逆流し咳き込む。

その際、懐にしまってあったプログライズキーと、持っていたホツパーキーを落としてしまった。

片手で腹を抑えながら、ホツパーキーを拾おうとするがその前に迅が回収する。その手には俺が落とした他のキーも握られていた。

「迅……お前、どういうつもりだっ……!?!」

「……アクア、カズマの回復をお願い」

「えっ？ええ、解ったわ！」

迅は未だに咳き込みながら言った俺の質問には答えず、迅が俺を殴ったという光景に呆けていたアクアに回復を指示する。

「質問に、答えろよッ……!」

「……カズマ、君をここで死なせるわけにはいかない」

迅は俺の質問にそう答えるとベルディアの方を向いて、

「ベルディア、少しだけ時間をくれないか？皆と最後の話がしたい」

「……ッ!!」

「……いいだろう、貴様の覚悟に免じわづかなながら時間を与えよう」

ベルディアは迅の要求に答えるように持っていた剣を地面に突き刺し構えをとく。

「おい、最後つてどういう意味だよ……?」

「……カズマ、君に話しておきたいことがある」

「んなもんどうでもいいから答えろよッ!」

「カズマッ!!」

「ッ!」

いつにない迫力を持つ迅の声に俺は反射的に口を噤む。

「……聞いてくれ」

そして、迅は語りだした。

「カズマ、ホントはさ。僕の仕事は君のサポートなんかじゃなかったんだ……。」

迅がずっと俺達に言えなかった真実を……。

## トモに捧げる 迅視点

「カズマ、ホントはね。僕の仕事は君のサポートなんかじゃなかったんだ……。」

僕はカズマが落としたプログライズキーをベルトのホルダーにセットしながら話し始める。

「なに、言ってるんだ……？お前は実際に俺をサポートし続けてくれたじゃないか」

「僕の本当の仕事は……ゼロワンドライバーを手にしたものが悪意のあるものだった場合。殺してでもドライバーを奪うこと」

「!!!」

皆、絶句してる。そうだよ、驚くよね。こんなこと聞かせたら……。

「僕は人間の善性だけじゃなく、人間の悪意もよく見てきた。なにせ、天才的な頭脳を持つ父さんを利用しようとする馬鹿共はあとを絶たなかったからね」

その悪意が……奴を生み出した。

僕が四人の中でその役目を滅に与えられたのは最も感情豊かな僕が、警戒をかくぐるのに適任だったからだ。

「じゃあ、あのカマキリ野郎を動かしたのは……。」

「……うん、ゼアが動かしてたなんて嘘っぱちさ。僕がそう動くようにプログラムを仕込んだんだ」

ペローサマギアにゼツメライズキーを渡したのも僕だ。あれは滅が作ったものを受け取っていた。

「……初めて君とあったときはなんてよわい冒険者なんだろうって思った」

父さんが言うには、父さんの故郷の人間は皆強い力を女神に与えられるって聞いてたから……。

「だけど、僕の無理難題に付き合ってくれて……君は悪い人間じゃないって確信した。」

アクア、めぐみん、ダクネスも決して悪い人間じゃない、それも、君

が善性のある人間だということを裏付けてくれた。優しい人間の周りには同じように優しい人間が集まる。

「君を支えていこうって、決心がついたのは、あの初めての殴り合いかな……。魔王を倒す気がないなんて……。自分で言うのも何だけど正直に言うことかかって思ったよ」

そうだ、あのあと僕の本音を話してから彼は僕を対等な仲間の一人として見てくれるようになった。僕らの願いのために彼が本気になってくれたことが嬉しかった。

「……初めてベルディアと戦ったとき、不謹慎だけど楽しかった。君みたいな仲間と肩を並べて戦えることが光栄ですらあった」

あんな気持ち、滅達としか感じたことがなかった。

最後にフォースライザーにセットされたファルコンキーをライズホルダーに装填すると、シャイニングホッパーキーを取り出す。

「……だから、今命を賭けて君を助けられることがこんなにも誇らしい」

『Shining Jump!』

シャイニングホッパーキーを起動させフォースライザーに差し込み、アンカーを引く。

『Force rize…!』

「ぐつ、うおおおお!!」

「おい、何してんだお前っ!？」

『Shining Hopper! Breakdown…!』

ゼロワンのように装甲が変わることはなかったが、僕の全身から金色の光が放たれる。

「ツ……い」

「迅ッー」

全身の痛覚機関に凄まじい痛みが迸る。だけど、コイツに勝つにはこの方法しかないんだ!

以前、カズマに言った。プログライズキーのデータを直接送る装置がないと。ならば、僕自身がその装置の役割を果たせばいい。足りないデータは僕自らが観察したゼロワンの戦闘データを使う……!

「だけど、その前に……僕が動けなくなる前にアイツに、少しでもダメージを与える……！」

「待たせたね、行くぞ……！」

「こいつ！」

僕は強化された脚力で一気にベルディアの元へと迫る。

「ッ!？」

突如、目の前に現れた僕に咄嗟に剣でガードをするベルディアだが、それを無視して殴りつけ後方へと吹き飛ばす。

「この力……さつきまでとは違うということか……！」

僕は足元に置いておいた、アタツシユカリバーを拾い、構える。

瞬間、僕達の剣が交差する。

「くっ！」

「ハアッ！」

連撃を叩き込み、奴に攻撃のすきを与えない。

「貴様ッ、死ぬ気だな……！」

「生憎、僕の命は所詮仮初……！失うことに恐怖なんてないっ！」

もう痛みすら感じない……どうやら痛覚回路が限界を超え、オーバーヒートを起こしたらしい。だけど、今更そんなことは関係ない。

「これが……僕がカズマに出来る、最後の罪滅ぼしであり、恩返しなんだからねッ！」

一度、ベルディアから距離を置き、アタツシユカリバーを投げ捨てフォースライザーのアンカーを二回連続で展開する。

『Shining Utopia!』

金色のエネルギーが右拳に集中し、脚力を最大にしてベルディアに走っていく。それに対抗するようにベルディアは剣を振り上げる。

「うおおおおおおお!!！」

「はあああああああ!!!」

だが、剣と拳が交差するというその瞬間、僕の体から火花が散る。

「がはっ！」

……この機体に限界が来たのか。

動きが止まった僕にベルディアの剣が迫る。



その時、僕の視界の端にいたカズマと目があった。

「あとは……任せたよ」

その言葉を口にしたのと同時に……ベルディアの剣が僕の体を切り裂いた。

「迅……………ッ!!!!!!」

さらば、トモよ

「迅………！！」

俺は痛む体に鞭をうち、ベルディアに切り飛ばされた迅の元まで駆け寄り、その上半身を抱き起こす。

「おいっ！ 迅っ、しっかりしろ、おいっ！」

俺はボロボロになった迅を抱きかかえ必死に呼びかける。人工皮膚が剥がれ、そこから青い液体が流れる……その姿が迅が人間ではないと俺に突きつけるがそんなことは俺にとっては関係なかった。

俺は迅を回復させるためにアクアに向けて叫ぶ、

「アクアッ、回復魔法を……！ 早くッ！」

「無理よ……回復魔法は生物にしか効かないわ」

顔をうつむかせて答えたアクアの言葉にハツとする。迅は機械生命体……回復魔法が効かないのは道理だった。

「カズ、マ……僕はここまでみたい、だ……。」

とところどころノイズがかかった声で弱々しく、迅は言う。

「縁起でもねえこと言ってるなよ！お前がこんなところでくたばるたまかよ！」

「これ、を……。」

迅がフォースライザーから外したシャイニングホッパープログライズキーを俺に差し出す。俺はそれを震える手で受け取る。

「これは……。」

「僕と……君が使った、プログライズキーのデータで完成した、真のシャイニングホッパーキー……これならベルディアにも勝てる、筈だ」

「お前、これを完成させるために……！」

迅が、玉砕覚悟でベルディアに向かっていった理由がこのプログライズキーを俺に託すためだとわかり涙が止まらなくなる。

「うん……あと、君達を騙し続けていたせめてもの罪滅ぼしになればと思ったんだ」

「……このっ、馬鹿野郎がっ！！」

迅の言葉に俺は本気で怒りの籠もった声で怒鳴り返す。

「今更、水臭いこと言うなよ……俺達、親友じゃねえかよ……！」

「親友って……僕を許してくれるの？ 一歩間違えてたら君を殺してた僕を……。」

「関係ねえよ……。今までだって一歩間違えば死ぬような戦いを一緒に乗り越えてきたじゃねえかよっ！……俺にとつてお前は掛け替えのない親友以外のなんでもねえんだよ……！」

ヒューマギアだとか、人間だとか関係ない……！それが俺の本心だ、これ以上ないオレの気持ちだ。

迅は俺の言葉に一瞬、呆けたような顔をするとうゆつくりと微笑み、「そっか……君は僕のことを友達と思ってくれてたんだ。……」だつたら、僕もその友達のためにもう一仕事しないとね……！」

そう言った迅は抱き上げていた俺を突き飛ばし、ベルディアへと走り出す。

「なにをっ……！」

ベルディアは突然のことにすぐに反応出来ず迅はそのまま奴の腰にしがみつく。そして、迅の全身から凄まじい光が放たれ、次の瞬間、

凄まじい爆炎が俺達の視界を覆った。

凄まじい熱風と爆音から顔を隠すように手でガードするが、迅が自爆したという事実腕が力を失いだらんと垂れ下がる。

『カズマ』

その時、アイツの声が聞こえた。幻聴かもしれない。だけど、ハッキリと俺の耳にアイツの声が聞こえた。

『君と友達になれて僕は、幸せだったよ。ありがとう』

その声が聞こえなくなったと同時に、爆炎の中から何かが俺の目の前に転がってきた。

「ああ……ああ……！」

地面に膝をつき、落ちてきたそれを拾った俺の視界が滲んでいく。

「迅ッ……!」

それは、迅が変身に使っていたファルコンキーとフォースライザーだった。どちらもところどころ焼け焦げていた。

「……ああ、ああああああああ!!!」

俺の慟哭が部屋の中に木霊した。

「……ッ。」

「……ヒグ」

俺と同じようにアクアとめぐみんが涙を流すのが視界の端に見えた。

「……見事だ」

「ニッ!!」

爆炎の中から聞こえた声に俺達の視線はそこへ集中する。そして、爆炎が晴れた先にいたのはほぼ無傷のベルディアの姿だった。

「そんな……。」

「……あの小僧は命のない人形のようなものだと思っていたが、友の為に命を投げ出したあの男は敵ながら称賛に値する」

迅を称えるベルディアの言葉で俺は迅から託されたシャイニングホップパーキーを握りしめて立ち上がり、めぐみん達の側による。

「めぐみん……コイツを頼む」

「……はいっ!」

俺は迅の形見の品とも言えるフォースライザーを万が一でも戦闘で巻き込まないためにめぐみんにそれを託す。彼女は自分も辛いだろうに、目元の涙を必死に拭い気丈な態度でそれを受け取る。

俺は手に残ったアイツのフライングファルコンキーを見つめる。

「なんで……俺の、俺なんかの為に……! ホントの馬鹿野郎だよ、お前は……。」

「……!」

「……!」

「ベルディア……! お前だけは、絶対にここで倒すっ!」

『Shining Jump!』

俺は親友に託されたプログライズキーを構え、起動させる。

『Authorize!』

オーソライザーにプログライズキーをスキャンすると、いつも降ってくるライダーモデルではなく空中に鍵穴のようなものが現れる。

「ふっ！」

そこへ、キー状態にしたプログライズキーを突き刺し鍵を開くようにひねると、そこからオンブバッタのように一体のバッタの上に更にバッタが乗った金色の光を放つライダーモデルが現れる。

「変身っ！」

掛け声とともにプログライズキーをドライバーのライズスロットに装填し、ドライバーに読み込ませると、展開された巨大な網が二体のバッタを捉え、そのまま俺の体に纏わせる。

『Progrize!』

『The rider kick increases the power by adding to brightness! Shining Hopper!』

全身をパワードスーツ『シャイニングアーキテクター』が覆い、全身に黄色いラインが現れ、変身が完了する。

『When I shine, darkness fades.』

——その姿はまさしく闇を切り裂く光の名にふさわしい姿だった。

「最終ラウンドだ。決着をつけよう、ベルディア……！」

「来るがいいっ！仮面の戦士！」

## ケツチャクの時

「最終ラウンドだ。決着をつけよう、ベルディア……！」  
「来るがいい！仮面の戦士っ！」

ベルディアの声と共に、俺はライジングホッパーより更に強化されたジャンプ力で一気に奴の背後に跳躍し振り返り様に拳を振るう。

だが、寸手のところで背後に飛んで回避される。

「速いな……だが、俺の魔眼の前には意味をなさんっ！」

アクセルで初めて戦ったときのように頭を頭上に放り投げ、魔眼のスキルを発動させる。今、攻撃に行けば確実に返り討ちに合うだろう。

しかし、俺は変身したときにラーニングしたシャイニングホッパーの能力を起動させる。空間に無数の攻撃パターンが可視化され、その中の一つに沿って攻撃する。

「そこかっ！」

赤い点滅とともにパターンの一つに俺が現れたのを魔眼で察知したベルディアがそこへ剣を振るうが、

「オラアっ！」

「ぐはっ！」

その俺の姿は剣が触れるよりも先に消滅し、全く別方向からの攻撃が奴を襲った。更に追い打ちをかけるように正面から殴りかかるが、ベルディアはそれよりも先に剣を構える。

だが、

「たあっ！」

「ぐおっ！」

またしてもその姿は寸前でかききえ、全く別の方向からの回し蹴りを喰らい吹き飛ぶ。

「ぼっ、馬鹿なっ！確かに奴は俺の間合いに入ったはず……！なのに、その姿が寸前にかき消えるだど!?」

地面に落ちた奴の首を体が回収しながら、驚愕の声を上げる。

そう、これがシャイニングホッパーの能力。考えうる全てのパターン

ンを計算し、状況に応じた最善の選択を瞬時に選択し、攻撃を繰り返す事ができる。

「お前じゃ、勝てない。これは、俺だけの力じゃない。アイツが、俺の親友が命を賭けて託してくれた力だ……い……い……一人で戦ってるお前に勝てるわけがないんだよ……!」

「……減らず口をッ!」

俺は向かってくる、ベルディアの正面に一瞬で移動し、奴の巨体を斜めに蹴り上げる。

「はあッ!」

「ぐはッ!」

さらに俺は蹴り上げたベルディアの元まで高速移動し、再び蹴り飛ばし、さらに先回りして蹴り飛ばすを繰り返す。流石のベルディアも空中戦などやった筈もなくなすすべもない。

「ぬう……!」

綺麗に着地した俺とは対象的にベルディアは落下の法則したが、地面に叩きつけられる。

「ならば、これでどうだっ!!?」

ベルディアは剣を構え、さっきの倍近い魔力弾を俺に放つが、今俺にはそれを回避するための動きが全て見えている。まさしく、世界が色あせて見えた。

俺はその場から一步も動かず、最低限の体を動かすだけの僅かな動作で全ての魔力弾を回避した。

「馬鹿なっ……!?!」

唾然とする、ベルディアを他所に俺は追撃をするべくドライバークーキーを押し込む。

『Shining Impact!』

「はああ……ッ!はああああ!!」

右足にエネルギーをためて、ライダーキックを放つ。ベルディアはこれ以上のダメージを受けないために剣でガードし、それでも威力を殺しきれず後方へと下げられそこに更に高速移動した俺がもう一度キックを叩き込むと剣が音を耐えて粉々に砕け散る。

「俺の剣がつ……!?」

「これで、フィニッシュだ……!」

「お前を止められるのはただ一人……俺だ!」

ライズホルダーにセットされていた、迅のフライングファルコンキーを抜きオーソライザーに連続でスキャンさせる、

『Bitrize!』

『Byterize!』

『Kirorize!』

『Megarize!』

四回連続でスキャンしたあと、再びドライバーのキーを押し込む。

『Shining Mega Impact!』

迅、力を……借りるぜっ!

全身にエネルギー滾らせ、ベルディアへと駆け出す。

「消えたっ……!?」

「はあ!」

「ぐおっ!」

ベルディアの眼前で姿を消し、奴の背後から蹴り飛ばし、さらに飛ばされた場所に高速で移動して天井めがけて蹴り飛ばす。

「ぐはっ!」

天井に叩きつけられたベルディアをさらに上に向けて蹴りつける。天井がキツクの威力に耐えられず破れ、上の階に出るがそんなことを無視して連続でベルディアを蹴り上げ次々と天井をぶち破っていく。やがて、破られる壁もなくなり俺達の体は城の上空にまで登っていた。

俺は止めとばかりにベルディアの体を下に蹴り飛ばし、そこに最大の威力を集中したキツクを叩き込んだ。

「はああああああああ!!!」



「ぬおおおおおおお!!!」

グ　メガ  
ン　イ  
ニ　ン  
イ　パ  
ヤ　ク  
シ　ト

俺達は城を破壊しながら、元いた部屋まで落下した。

「ハア……ハア……」

俺は着地したのと同時に膝を折り、地面に片膝をつける。このシャイニングホッパーは他のプログライズキーとは比べ物にならない出力を出せるが、それは肉体の身体能力を前借りするだけだ。

戦闘後。当然、バックファイアが襲ってくる。

だが、当のベルディアの身体は崩壊を初め既に戦う力がないことは明白だった。

「……まで、か……」

地面に伏したまま諦めたようにそう呟いたベルディアら最後の力を振り絞り右手に乗せた頭部を俺に向ける。

「仮面の戦士よ、お前は俺に『友から託された力を持つ俺に、一人で戦っているお前が勝てるわけがない』と言ったな?」

「……ああ」

「フツ……なるほど、道理だな」

最後にそう告げると、ベルディアの身体は粒子となって消滅した。

「勝ったぞ、迅——」

俺はファルコンキーを握りしめ天井に空いた穴から空を仰ぐ。俺の仮面越しの俺の視界に一羽の鳥が通り過ぎていく。その光景を目に焼き付けながらゆっくりとドライバーに手をかけた。

「うっ、がっ……!」

ドライバーから、プログライズキーを抜き変身を解除すると、全身

から力が抜け地面に倒れ込む。

「カズマツ！」

「カズマツ、しっかりしてください……！」

必死に呼びかけるアクアとめぐみんの声が遠のいていくのを感じながら、俺の意識は闇に沈んだ。

## タタカイの傷跡 アクア視点

「カズマ、入るわよ〜」

私達はカズマが泊まっている部屋の扉をノックし、返事が返ってくる前に中に入る。

「……………」

そこには、髪をボサボサのまま虚ろな目をしてベッドに腰掛けているカズマの姿があった。

あの日……ベルディアを倒し、迅を失ったあの日からカズマはダメージのせいで丸3日目を覚まさず、目を覚ましてからもずっとこの調子だ。

余程、迅を失ったことが応えたのだろう……。

「カズマ、お弁当持ってきましたよ?」

「……………」

めぐみんがお弁当を差し出してもピクリとも動かない。

「換気をしよう、空気が淀んでいるからな」

ダクネスが気をきかして窓を開ける。空気が淀んでいるのはそれだけが理由ではないのは明白だった。

「そ、それにしても今日はいい天気ですね〜。カズマ、リハビリも兼ねて久しぶりに簡単なクエストでも受けに行きませんか?」

お弁当箱を机に起き、カズマに呼びかけるように尋ねるめぐみんだったが、カズマの口から出たのは私達の思いもよらない言葉だった。

「俺は……もう、戦えない……。」

「「えっ。」」

私達はベッドの上のカズマに一齐に視線を向ける。カズマの表情は私達の視線を受けても眉一つ動かさず、無気力な表情のまま。

「ちょ、ちょっと!?!?どういうことよ、それっ!?!?戦えないって、魔王との戦いはどうするのよ!?!?」

「……………」

カズマは相変わらず表情一つ動かさない、焦点の合わない目でひた

すらに虚空を見つめている。

「アンタねえ……！」

流石に我慢の限界が来た私は、カズマの胸ぐらを掴み無理矢理ベツトから下ろし顔をグンツと近づける。

「お、おいつ……！」

「アクア……！」

めぐみんとダクネスが宥めようとするがそれよりも先に私はカズマに今まで溜まっていた鬱憤を全てぶつける。

「いい加減にしなさいよっ!!アンタがいくら悲しんだって迅は帰ってこないのよ!?アンタがやるべきは親友の願いを叶えてあげることでしょうっ!!これ以上グズってるつもりなら、必殺のゴッドブローをその横つ面に——」  
「フツ、ハハハ……」  
「——え？」

怒鳴り声の中間こえる場違いな笑い声、何かを嘲るような笑い声、嘲笑。その発生元は私がいま胸ぐらをつかんでいる顔を俯かせたカズマからの声だった。

そして、視線を上げた彼は濁ったその目を私に向けて、たった一言。

「殴りたきや……殴れよ」

口元に歪んだ空虚な笑みを浮かべながら、そう告げた。

その一言でカズマが嘲っている相手がカズマ自身なのだと、理解した。

その笑みに気圧され掴んでいた手を離し、フラフラと後ろに下がる。

「悪い……今日はもう帰ってくれ……！」

右手で額を抑え、切実な声で私達にそう頼むカズマに私達は何も言えなかった。

~~~~~

「重症ね……！」

「無理もないですがね……！」

私達はギルドの酒場でテーブルを囲い、カズマについて話し合っていた。まさか、あそこまで心の傷が深いなんて……私の回復魔法は心までは癒せないのが悔やまれる。

平和な日本で暮らしていたカズマにとって、親友を失うなんて初めての経験だし落ち込むのは仕方ない。オマケにあんな最後を目の前で見せられたら……。

「なんとかか……できないものだろうか？」

「……………」

ダクネスの間に私もめぐみんも答えることができなかった。

ふと、ギルドを見回すと他のテーブルも私達と同じような状況になっていた。迅と交友があった冒険者は少なくない、彼は何百年もあの洞窟にいたからこの街のことが目新しかっただろうし、色んな人と話をしてきたから。

ギルド全体がまるで、お通夜のようなだった。

「ねえねえ、この席いい？」

声のした方向を見ると銀髪の見覚えのある盗賊の少女がいた。

「……クリス」

現れたのはダクネスの友人のクリスだった。

クリスは私達の返事を待たずに空いていた席に座り、口を開く。

「迅のこと、聞いたよ……。」

「……そうか」

「……カズマは大丈夫？」

「大丈夫とは、言い難いな……………」

ダクネスは唇を噛みながら悔しそうにクリスに言う。多分、この中で一番悔しい思いをしているのはダクネスだと思う。

生真面目な彼女のことだから自分がトラップになんて引つかからなければめぐみんの爆裂魔法で状況を打破できたかもしれないも思っているんだと思う。

それに関してはあのミツルギってソードマスターと同じだった。城の外で合流した彼は迅の話を知ると、非常に悔しそうな顔をし目覚めたカズマに土下座して開口一番こう言った。

『済まなかった！僕がなんの考えもなしに君を誘ったばかりに……君の大切な友人を……！謝って済むことではないとわかっているが……本当に済まなかった！』

その懺悔にカズマは何も言わなかったが、カズマは彼を責めること  
はないと思う。

ミツルギは修行のために王都に向かったらしい、見送りの際、  
『アクア様、僕は必ず強くなってみせます。胸を張って、彼の……カズ  
マの友人になれるように頑張ります！』

そう力強く宣言して旅立った。

「ダクネス達でも駄目だったかあ……。まあ、アタシもショックでは  
あるけどさ、迅はいい子だったし」

「そうね……。」

「はい」

「ああ」

迅は私達にとつてもかけがえの無い仲間だった……。確かに彼は  
人間じゃなかったけど女神の私にはわかる。彼には確かに心があつ  
た。とても、とても優しい心を持った存在だった。

私達は最後まで気付かなかったけど、迅は自分の本当の役目を隠し  
て私達を騙してたことに心の底から罪悪感を感じてたんだと思う。

カズマが落ち込んだるのはその気持ち最後まで察してやること  
ができなかったこともあるんだろうけど。

「……そうだ！貧乏店主さんに頼んでみたら？」

クリスが何かを思いついたように、私達に提案した。

「「貧乏店主？」」

聞き慣れない単語に私達は疑問符を浮かべる。

「この街にはね、元々凄腕のアークウィザードとして名を馳せた人が  
営んでいる魔道具店があるんだけど、その店主さんは冒険者の人達  
の悩みを色々親身になって聞いてくれることで有名なんだ」

「なるほど、だが貧乏店主というのは？」

「なんか、頑張れば頑張るほど貧乏になる難儀な性格だかららしいよ  
？」

なるほど……。

見ず知らずの人にカズマのことを相談するのは気が引けるけど  
……もう私達には手段が思いつかないしその人に頼んでみるしかな

いのかしら？

クリスは持っていた紙とペンで地図を走り書きして私達に渡すと、席を立つ。

「アタシもなんとかカズマにやる気を出してもらえるように試してみるよ」

「すまないな……。」

「まあ、カズマには色々されたけどこの街の為に戦った英雄が凹んでるなら手を差し伸べないとね」

そう言つてクリスはギルドを去っていった。

私達も件の貧乏店主とやらに会いに行くべくギルドをあとにした。

## カレラにとっての仮面ライダー

「何が恩返しだ、馬鹿野郎……。」

俺は宿の部屋で迅の形見であるフォースライザーとファルコンキーを握りしめて、目の前で俺を守って死んだあの馬鹿へ愚痴る。

俺への恩返し……アイツは俺にそういった……。

「いつも、貰っていたのは……俺のほうじゃねえか」

ゼロワンも、プログライズキーも、戦う理由も、全部……全部、アイツが俺にくれたものだ。

それに対して、俺はなんだ……。アイツに何をしてやれたってんだ……。

コンツ……コンツ……

扉のドアがノックされる音が室内に響いた。

また、アクア達か？アイツらには悪いが俺にはもう、戦う理由も気力も残されちゃいない……。

ベットから立ち上がる気にもなれず、勝手に入ってくるか、勝手に帰っていくかを待つ。

そして、その答えは前者だったらしく扉を開きその人物は室内に入ってきた。

「やっほー、久しぶり！元気……じゃなさそうだね」

部屋に入ってきたのはダクネスの友人で、スキルを教わったときに俺にパンツをさられた盗賊ことクリスだった。

「……何しに来た？」

「君を励ましに、かな？」

「帰れ」

「えっ、ちよつと……！」

俺はクリスの体を部屋から押し出そうとする。今更、部外者にズカ



ズカと俺の心を踏み荒らされたくはない。

「……そんなに自分のことが許せない？」

その一言で、クリスを追い出そうとした俺の手が止まる。そのすきに部屋に入り、真っ直ぐな目で俺を見る。

「君の今の目にはとてつもない、後悔と自責の念が見える。ひよつとして、自分のせいで迅が死んだって思ってるんじゃない？」

「……だったら、なんだよッ？」

まるで俺のことを皆見透かしたようなそんな目に苛立ちを感じ、少し語気を強く聞き返す。

「自分のことを許してあげたら？」

「許せるわけがねえだろっ!!」

クリスの言葉を俺は即座に否定した。

「さつきからなんだ……！まるで俺のことを全部知ってるみたいに話しやがって……！ロクに付き合いもない、お前に俺の何がわかるんだ？ああっ!？」

自分でも八つ当たりだということはある……だが、それでも言わずにはいらなかった。

「部外者の分際で人の心に土足で踏み込んでじゃねえ！……自分を許せだど？そんな事ができたら、俺はこんなに苦しんじやいねえんだよ……！」

俺がもつと綿密に作戦を組み立てていれば、ベルディアの戦力を見誤まっていなければ迅は死なずに済んだ。

「俺の軽率な判断がきつかけで……迅を死なせた」

「何言ってるの？違うよ」

俺がもつと強ければ、シャイニングホッパーキーを作るよりも速くベルディアと決着をつけてさえいれば、迅は死なずに済んだ。

俺はクリスの言葉を無視して言葉を続ける。

「俺の弱さが……アイツを殺した……！」

「違う……」

そもそも、俺がゼロワンドライバーを受け取らなければ、迅が死ぬことはなかった……！

俺はさらに震える右手を左手で抑え、語気を荒げて口にする。

「迅を殺したのは……俺だッ……!」

「違うッ!」

クリスは俺の言葉を否定すると立ち上がり、俺の手を掴む。

「来て。その証拠を見せてあげる」

「お、おい……!」

クリスは俺の静止を聞かずに俺を部屋から連れ出した。

~~~~~

「おいっ、こんなところで何をするつもりだ……!?!」

宿から連れ出された俺は街外れにある小さな孤児院まで連れてこられた。ただし、俺達はそのことは少し離れたところにある曲がり角で覗くようにしていた。

「あの孤児院は私とダクネスがよく出入りしてるところでね、身の上のない子供達を預かっている孤児院なの」

「だから、それが……!」

「よくし、それじゃやるよ〜!」

どうしたんだ、と聞こうとした瞬間孤児院の子供たちが中から出てきて元気な声で話し始めた。

「それじゃ、『仮面ライダーごっこ』やろうよ!」

「じゃあ、俺が仮面ライダー!」

「ええ〜、僕がやるよ〜!」

「お前は敵役やれよ〜」

俺はその光景に目を丸くする。まさか、異世界で仮面ライダーごっこをしている子供を見ることになるなんて……。

「あの子供達が言ってる仮面ライダーっていうのは君のことだよ?」

「俺の?」

言われてみれば……この世界に俺以外の仮面ライダーなんて、迅がいなくなった今もういない。

「子供っていうのは英雄に憧れるものなんだ。あの子供達にとって君はヒーローなんだよ。」

「英雄? ヒーロー?」

……俺には過ぎた称号だ。そんなもの、俺には似合わない。あんなものは迅という犠牲の果に得た勝利だ。

「違うよ。寧ろ、あの子達と同じだ。俺は所詮仮面ライダーごっこをしてきたに過ぎない……。」

クリスを直視できず、情けなくも視線を逸しながら言う。

俺は原典の仮面ライダーのようにはなれない……何故なら俺が偽物であるという事実はどう足掻いても覆らないんだから。

「俺はあの人達のようにカッコいいヒーローにはなれないよ……。アイツを亡くして、もう何をすればいいのかすらわからなくなっちゃった……。あの人達ならそれすらも力に変えられるだろうけど、俺はそんな強い人間じゃないッ！」

思い出してみると子供の頃、大人になったらあんな人になりたいと初めて思った相手が仮面ライダーだった気がする。特に印象が強かったのは、仮面ライダー剣。字は違うが俺と同じ名前の人が変わ身したライダー。

ゼロワンになってから特に印象に残った言葉が脳裏を離れない。

『例えカードが1枚も無くても！お前を封印できるはずだ！俺に、ライダーの資格があるなら！戦えない、全ての人の為に！俺が戦う！』

あの人はその言葉の通りにライダーの資格を示した。だけど、俺は迅の犠牲の果てにそれを得た……そんなものに一体どれだけの価値があるというのか。

この世界の住人であるクリスに俺達の世界の仮面ライダーについて話しても仕方ないのに、俺は何を話してるんだ……。

もう、終わらせようと宿に向けて歩み始めようとするがそれよりも先に俺の前にクリスが立ちはだかる。

「もういいだろ……？もう戦いたくなくなってるんだ」

「……もういいだって？何がいいの？いいわけないでしょう!？」  
「ッ」

「……このまま何もしまままそのままずっと腐っていく気なの？それでいいの!？それで迅が喜ぶと思ってるの!？」

クリスは俺の胸ぐらを掴み真正面から俺の目を覗き込んで怒声を

飛ばす。そして、諭すように俺に話してきた。

「君がどう思おうと、あの子達にとつての仮面ライダーは、この街のヒーローは君なんだよ。あの子達だけじゃない、ダクネスに、アクアさん、めぐみん、ギルドの冒険者の皆や君を知るこの街の人達、そして、勿論、君に未来を託した迅からしてもだよ」

迅達にとつての仮面ライダーが……俺？

「仮面ライダーっていうのは変身できればいい人の称号なの？違うでしょ？それに相応しい行いをした人のことを仮面ライダーっていうんじゃないの？だったら、君は紛れもなく仮面ライダー以外の何者でもないよ」

「だけど……俺は……。」

迅を……親友を守れなかった……。

その俺の心を読み取ったのか、クリスは俺に優しく微笑んで言う。

「君は街の人達を守るためにあの判断を下した。それは絶対に間違えてなんかいない」

「……………」

「君は街の人達を守るために魔王軍幹部に戦いを挑んだ、その君が弱いわけがないッ！」

「……………ッ！」

「そんな君だから迅は命を賭けたんだよ!!君が自分の未来を託すに値する存在だと思ったから。……だから、その君がいつまでもメソメソしてちや駄目だよ」

俺の顔に両手を添えて、俺の顔を覗き込むようにして話すクリス。気付けば、俺の目から大粒の涙がポロポロと溢れていた……。

「だってそれは、君の親友の生きた意味を否定する行為なんだから」

涙なんて、迅を失ったあの日に流しきったと思っていたのに。

「この言葉の意味、君ならもう……わかってるよね？」

トウジヨウ！先輩ライダー、その名は鎧武

「……………」

俺はクリスと別れ、街の中にある小さな橋の上からその下に流れる小川の水面に映る情けない自分の顔を見ていた。

クリスに仮面ライダーについて説かれ、僅かながら活力のようなものが蘇った。だが、

「……………クソッ……………」

懐からドライバーを取り出すと、それを持った手が目で見えるほどに震えている。止めようとしても意識しても、全く止まってはくれない。

……………こんな俺に戦う力なんて、あるのか？

「アレ？カズマさんじゃないですか」

話しかけられた方向を見てみると、そこには長い茶髪の女性、頭の上のアホ毛がトレードマークの女性。アンデットの王、リッチーのウイズが立っていた。

~~~~~

「どうぞ」

「……………悪いな」

俺はウイズに差し出された紅茶に口をつける。紅茶についてはあまり詳しくないが……………なんというか心が落ち着く。

橋の上であった俺は彼女に誘われ、彼女が経営している魔道具店で一休みをしていた。

店の中には様々な鉱石や目新しいアイテム、様々な色の液体の入った試験管。まさに、魔道具店という感じのする店だった。

「……………アクア達に言われたのか？」

俺の言葉を聞き、ウイズの背中が微クリと震える。

「な、なんのことですか？」

「あのポーシヨンの棚……………」

俺が指差した試験管のなんだ棚、その中に一つだけ無色透明な液体の入った試験管があった。

「アレ、アクアが触れたせいで浄化されたもんだろ？」

「あ、アハハ……お察しのとおりです」

……まあ、アイツらが関わってなけりやウイズみたいな美人が俺を気にかけてくれるわきゃないわな。

「大方、俺が意気消沈してることへの相談でもされたんだろ？」

「………はい、ご友人を亡くされたとか」

申し訳なさそうに言うウイズ。彼女は何も悪くねえのに、こんな顔をさせてることに罪悪感がある。

「さつき、知り合いにも励まされたよ……なさけねえよな……冒険者なのに、仲間が失われることだって覚悟しなきゃいけないはずなのに、いざ親友を失ったらこの様だ」

「そんなことはありません。冒険者でも、仲間を失えば辛いに決まっています。それが親友なら尚更に」

「……ウイズも、そういう経験があるのか？」

ウイズは元々アークウイザードとして、冒険者として活動していたと聞いている。実感のある口調からもしかしたらと思った。

「……はい、私も仲間を失ったことはあります」

「立ち直れたのか？」

「立ち直ったというのは、語弊がありますね……その仲間の意思を継ぐために戦った、という感じですね」

——強いな、彼女は……。俺なんかよりもずっと。

「俺は弱い……一度の挫折でもう折れかけている」

「——ですが、挫折を知っている程人は強くなれる」

「え？」

「確かに、挫折は恐ろしいことです。それは一生のトラウマにすらなりうることです、だけど、その挫折を知っているからこそ二度と同じ過ちを繰り返さないために強くなれる、私はそう思います」

挫折が人を強くする、か……。

「だけど、俺は……これから、自分が何をすればいいのかすらわからない」

「——だったら、これを使ってみたらどうでしょうか？」

そう言ったウイズはカウンターの下から布に置かれた水晶を取り出した。

「これは？」

「これは触れた人の悩みを解決してくれる魔道具です」

「どうやって？」

「なんでも、心の中にその悩みを解決してくれる人が現れるというもののらしいです」

机の上にそれを起きながら、ウイズは水晶のシステムについて話す。

俺の悩みを解決できる人、なんて……。

「さっ、触れてみてください」

ウイズに言われ、俺は手を伸ばした、一度引っ込め掛けたが、勇気を出して水晶に触れた。

触れた瞬間、俺の意識は暗転した。

~~~~~

そこで見たものはこの世のものとは思えない光景だった。

荒廃した世界、緑溢れた美しい世界、怪しい月が覗く夜の世界、古代の建築物のようなものがある世界。それら全ての世界が一つの世界の中で集約していた。

「ここは……一体……？」

『ここに人が来るのは君で二人目だ』

声のした方向を見ると、そこには白い髪白い外套を纏った赤いオツドアイの青年がいた。

「ッ……!？」

俺は突然感じた鼓動に、胸を抑える。

なんだ……？この人と俺のドライバーが共鳴しているような感覚がする……。

『君の友達の命はまだ助かる』

「えっ?」

男性の言葉に俺は即座に反応する。

俺の友達……迅の命がまだ助かるって言ったのか？この人は……。

「それって……それって、どういうことなんですかッ!？」

『……その答えを君自身気づいてるんじゃないか?』

「ッ……!？」

いつの間にか俺の背後にいた男性の声にバツと振り返り、その言葉の意味を思索する。

『動いてみることだ。君が今やるべきは、その先にどんな結末が待っているとしても、足掻き続けること』

足掻き続ける……。

『君が持つベルトは君にしか使えない。君にしかできないことをやり遂げるための力、人はそれを『責任』と呼ぶ。これは、君自身理解していることだ』

責任……。確かに俺は、ベルディアの城へ向かう途中アクア達に責任を説いた。

「だけど、俺は……。」

正直言うと、俺は怖い……。また、俺の弱さで誰かを失うことになるのかもしれないことが。ドライバーを持ってないのは迅の死への後悔だけじゃない。

結局、俺はどこまで行っても臆病者でしかないんだ……。

それすらも見透かしたように男性は微笑むと、

『……そんなに今の自分が許せないなら、新しい自分に変わればいい。変身だ。君には、君達にはその力があるんだ、だから、諦めてはいけない』

新しい……自分に変身……。

この言葉から感じる重み、これはきつと彼がここまで行き着くのに経験したものから来ているのだろうということが不思議とわかった。

男の人に光の蝶が指に止まり、それを俺に向けると無数の蝶が俺に飛んできて視界が覆い尽くされる。

『戦うんだ。自分の為に、友の為に、仲間のために。先を歩む君の、その背中を見た者達の心を奮い立たせてくれる力、君はいつかそういう本当の強さを手に入れることができるだろう。』

その時、君は本当の意味で仮面ライダーになれる』



~~~~~

「……ズマさんっ、カズマさんっ！」

「……ッ！」

体を揺さぶられるのを感じ、俺の精神は覚醒する。どうやら、俺は机に突っ伏して気絶していたらしい。ウイズの呼びかけに俺は体を起こす。

「俺は一体……?」

「あの水晶に触れた瞬間、気を失ってしまいました……。」

「今のは……夢だったのか?」

夢にしては、かなりリアリティのある夢だったが、そう思っている  
と、

「あの、それは?」

ウイズは俺の手を指差して尋ねる、その手には確かに何か握られていた。

「プログライズキー……?」

それは俺が見たことのないオレンジ色のプログライズキー。そこには、動物の絵ではなく俺が見たことのない仮面ライダーの顔が描かれていた。

「オンステージング……ガイム?」

鎧武、迅が言っていた十五人目の平成ライダー。確か、変身者の名前は葛葉紘汰さん……。

「まさか……。」

そういうことなのか……?

「……………」

俺はプログライズキーを胸の上で握りしめ、決意を固めた。

……ありがとうございます、先輩。

「ウイズ、色々ありがとな。……まだ、立ち直れてるかわかんないけど……元気だた」

プログライズキーを懐にしまい、ウイズに礼を言う。その俺の顔を見て優しく微笑んで、

「はい、頑張ってください。応援しています」

その笑顔に頷き返し、俺は店をあとにした。

~~~~~

ダクネス視点

「クリスとウイズの励ましは効果がありましたかね？」

「そうね、ウイズは店から出るときには憑き物が落ちたみたいな顔して立って言ってたけど」

隣を歩くアクア達がウイズの話を聞いて、今のカズマの状態を考察している。

一体、カズマはあの魔道具で誰にあつたのだろうか……。今の彼を元に戻せる人間など、中々いるものではない。

クリスにも話を聞くと、

『大丈夫……きつと彼は大丈夫だよ』

そう言っていた。

——出会ったばかりのアイツは私好みのダメ男だった。情けなくて、弱くて、策を弄する事以外ほとんど何も出来ないようなやつだった。

だが、迅と出会い。本当の友情を知り、戦うことに責任を感じて、それでも仲間のために、私達のために戦うことを選んだ。

迅との出会いで私などより余程、騎士らしい男に成長した。

なのに、私は……足を引つ張り彼の死に際にも立ち会うことができなかった。だから、そんな私にできることは彼を立ち直らせることしかないと思っている。

そんなことを考えていると、宿につきアイツの部屋の前に立つ。

「カズマ、入るわよ」

もはや、ノックすらしなくなったアクアが扉を開けるが、

——そこにはアイツの姿はなかった。

「「え？」」

あるのは、部屋に備え付けられたベットと小さな机とセットの椅子だけだった……。

「ちよつ、カズマは……？」

アクアが狼狽えるが、それをなだめるより先に私は机の上に置かれ

た紙を手取る。

「あの馬鹿者め……！」

カズマの筆跡で書かれたその手紙に私の口から自然とそんな言葉が出た。

「なんて書いてあるんですか？」

めぐみんが聞いてきたので、その内容を声にして伝える。

『『少しの間、旅に出る。必ず、お前たちに顔向けできるようになって帰ってくる。だから、待っていてほしい サトウカズマ』』

## アラタな出会い

「アイツら、怒ってるだろうなあ」

アルカンレティアという街に向かう商団の馬車の一つに乗せてもらって街を出て一日。俺が残した手紙を読んで、今頃憤慨しているであろう仲間を思いながら呟くように口を開く。

行き先も告げずに勝手に出て来といて何言っただかど我が事ながら思う。

それでも、この旅は俺が決意を固めるための旅。近くにアイツらがいると、何処か甘えてしまいそうで何も言えず出てきた。

俺は持つてきておいた、この国の地図を広げ、これからの計画について改めて確認する。

「まずは、もうすぐ着くアルカンレティアって街に寄って食料とか補給して……そこからは徒歩だな。地図もあるし、迷うことはないと思うが、着いてからが問題だな」

探すにしたって、洞窟というキーワードしかないわけだし……現地の人に聞く、多少変な目で見られそうだがそれしかなさそうだな……。

「お客さん、そろそろ付きますよ」

御者のおっちゃんに言われ、馬車の窓から外を見る。

「アレが、アルカンレティア……」

そこは、巨大な湖と温泉が湧くという山と隣接した都。青で統一されたその街は世辞抜きにとても美しかった。

「水と温泉の都と言われるだけのことはあるな……」

まずはこの街で野宿に必要なものとか揃えないとな、アクセルではアクア達と鉢合わせないために買い物もできなかったが、ここから目的地までも2、3日はかかるらしいし。

~~~~~

「お待ちになつて〜!」

「ハア……ハア……何なんだアイツらは?」

俺は建物の影から俺を探しているであろう一団に警戒の眼差しを

送る。

この町に入ってから何かがおかしかった……。

入り口でいきなりアクシズ教団に入らないかと勧誘されたときから気づくべきだった……あのときは熱心なアクアの信者だと思っていたが……まさか、この街があくのアクアを信仰しているアクシズ教団の総本山だったとは……！

見るからに荒くれ者って感じの男に絡まれている女性を助けてからは決定的だった……。お礼がしたいとか女性が言い出し、やんわりと断ったら『私占い師なんです、占わせてください』とかわけのわからないことを言われ、『見えました、貴方に不幸が訪れます。ですが、アクシズ教団に入ればその不幸を回避できます』とか更に訳のわからないことを言われ断り続けているのに追いかけて回してくる。

見かけの美しさに騙されていた、とんでもなく恐ろしい街だここは……。

これがアクシズ教団の総本山、アルカンレティアか……。神が神なら信者も信者ってわけかよ……！

この街で一晩明かすなんて、気が気じゃないぜ……。だけど、テントとか食料の補給とか野宿の準備もしなきゃいけないし……。

「クソ、どんずまりじゃねえか……。」

仕方ない、とつとつと用を済ませて宿にチエックインして鍵締めて寝よう。2、3日歩けば向こうにもつくはずだし。

「おお、見つけましたよっ！さあ！この入信書にサインをそれだけで貴方に幸せが訪れますよ！」

「くそつたれ、見つかったか……！」

俺は必死に街の中を疾走する。ゼロワンとして戦ってきたお陰で、体力は多分上級職以上まで上がってるってのに、なんでそれに追いつけんだよアイツらッ！

しかも、なんか追いかけてくる奴ら二十人くらいに増えてんじやねえか！

街の中を走っていると、目の前の道に一人の少女が立っているのが見えた。このままだと俺に巻き込まれて勧誘されるか、物理的に人の

波に飲まれるか。どっちにしても巻き込んでしまう。

咄嗟にそう思い至った俺はその少女の手を取る。

「来いっ！」

「えっ？」

突然、手を握られた少女は目を丸くしていたが俺に引つ張られるままにあとをついてくる。

「あつ、あの……………」

「悪いっ、説明は後にしてくれ……………」

しめた、ちょうど良いところに曲がり角が……………!

曲がり角を曲がると直ぐに足を止め、『潜伏』のスキルを使って息を殺す。少女にも人差し指を口元に当てるサインを見せると自分の手で口元を抑える。

そして、目の前をアクシズ教徒が去っていくと。息を大きく吐き出す。

「なんとか……………まいたか……………」

「あの……………」

「ああ、悪いっ。アクシズ教徒の連中に追われててな、巻き込んだりや悪いと思っただが……………大丈夫だったか？手、大分強く握っちゃったけ、ど……………」

俺は顎下を流れる汗を手の甲で拭いながら、少女の顔を見ると声を失った。

「はい、大丈夫です……………あの、私の顔になにかついてますか？」

その少女は黒い髪に紅い瞳。俺の仲間の一人、めぐみんとよく似た容姿の少女だった。

「紅魔族……………」

彼女は俺の目的地への道を知る人物だった。

## 迅の復活回のお試し版

「らしくないじゃないか、カズマ」

「え？」

目の前の赤いライダーから発せられる声はとても聞き覚えのあるものだった。

彼は振り向きざまに変身を解除して、俺の前に立つ。その姿は俺達と同じライダーのユニフォームとも言えるスーツで、腰には見たことのない短剣の形をしたドライバーが装着されていた。

だが、服装が変わっていてもその顔を俺が見間違えるはずがなかった。

「君は諦めは人一倍悪いって言ってたじゃないか。なのに、もう終わりなのかい？」

そいつは、俺がずっと待ち望んだ親友だった……。

「うっせー……よ、馬鹿……野郎……！」

涙が流れるのを抑えきれず、声が掠れる。全身の痛みが一瞬引き、こんなときに不謹慎だが胸には喜びしかなくなった。

「カズマッー！」

だが、さらに新たな声が俺を現実を引き戻した。声のした方向を向いた瞬間、俺の目の前に一本の剣が突き刺さった。

その剣はまるで、ライジングホッププログライズキーを模したようなデザインで、色もキーと同じ明るい蛍光色の黄緑色だった。

これが投げられた方向を見ると、そこには雷の兄貴とユア、そして、そのユアに肩を借りているアクアの姿があった。

「それは、『プログライズホップブレード』！お前がゼアにラーニングさせた善意と、アクアの聖なる魔力で作られた剣だ！それなら、メタルクラスタの状態のまま戦えるっ、マクスウエル的能力も打ち敗れるはずだ！」

コイツが、アクア達で共同で作ったゼロワンの新兵器。

「カズマさんッ!!」

「ッ……！」

ユアから投げ渡されたメタルクラスタキーを受け取り、視線を向けるとアクアが声を張り上げて俺に叫ぶ。

「その剣は皆で繋いだ私達の希望よっ!!それを与えられといて、負けるなんて許さないわっ!!女神の名において命じます、立ちなさいカズマッ!」

アクア……。

「立ってっ!カズマ!」

「カズマさんっ!!」

兄貴、ユア……。

「カズマ……!」

「いつまでも寝てんじやねえぞ……!」

滅、フタバ……。

「立ってください、カズマッ!」

「カズマさんッ!!」

「カズマッ!」

めぐみん、ゆんゆん、クリス……。

「立てえ!カズマア!!」「アクセルの英雄の意地をみせてやれえ!」「こんなところで終わるなんて承知しねえぞお!!」「悪魔なんぞに負けてんじやねえ!!」

ギルドの冒険者達……。

「僕の親友はこんなところで地べたに這いつくばるような男じゃないよ」

迅……。

「まったく、目の前で自爆してトラウマ刻み込んでくれた奴のセリフじゃねえだろ……それ?」

「それは、ホントにゴメン」

「まあ、ちゃんと帰ってきたし許してやるよ。ただし……後で一発殴らせろよ、なっ!」

俺は迅が差し出した手を握り立ち上がってホッパブレードを抜く。

「……上等だぜ、テメエら……!」



『うおおおおおおお!!』

立ち上がった俺の姿に連中から歓声とも言える声が響く。

「流石、カズマ。そこなくっちゃね」

「……やるぜ、相棒。今度は死んでくれるなよ?」

「ああ、勿論だ」

俺と迅はお互いのプログライズキーを構え、マクスウエルを睨む。

## アタラシイ仲間

「悪かったな、巻き込まれて……。」

「いえ、助けようとしてくれたんですよね？私もアクシズ教徒の人達が怖いってことは知ってますから……。」

「そっか……。」

俺たちは今、近くにあった喫茶店（勿論店の人間がアクシズ教徒でないことを確認済み）で向き合って話をしていた。さっきの詫びも兼ねて話をしていた。

「……………」

「……………」

お互い、初対面ということもあって大分気まずい……。だが、俺は彼女にどうしても聞きたいことがあった。

「どうかどうか、暫く悩んだが俺は意を決して、口を開いた。

「……なあ、君のその容姿、紅魔族でいいんだよな？」

「は、はいっ！」

緊張してるのかどこか上ずった声で答える少女。

「紅魔の里の近くにあるっていう洞窟についてなにか知っていないか？」

「……洞窟、あの里の外れにある何もない洞窟ですか？」

「それだっ!!」

俺はそのドンピシャな答えに思わず机を叩いて、立ち上がってしまった。

「ヒッ……!」

「アッ、ゴメン……。」

いきなり立ち上がった俺にビビって、萎縮してしまう少女。

「あの洞窟がなにか……?」

「……実は友達のためになんとしてもそこに行かなきゃいけないんだ……だから、良ければその場所について知っているなら詳しく教えてもらえないか？」

「でも、あそこらへんはかなり入り組んでいて紅魔の里の人間ならと

もかく他所の人がたどり着くのはかなり難しいですよ！」

「そんな……。」

俺は机の上に両手の拳を乗せて俯き、思考を巡らす。

クソツ、そうなるとやっぱり現地の人間に道を聞くしかないじゃないか……こつちは少しでも早く辿り着きたいのに……！

「あの……良ければ私が案内しましょうか？」

「え？」

俺は少女の言葉に思わず顔を上げ、その顔を見る。何処かおどおどしたような態度だが、ハッキリと口にした。

「とても困っているように見えるので、良ければですけど……」

「是非っ！頼む、いや、お願いしますっ！」

俺は机に額をくっつけ懇願するように頼み込む。

「あつ、頭を上げてください。私で良ければ案内しますので……！」

「ありがとうございます。感謝するよ。どれくらい感謝しているかというところからの人生で『一番感謝している人は？』と聞かれたら君だって即答できるくらいに感謝している！」

「や、やめてください、それ何かの嫌がらせみたいですからっ！」

「ご、ゴメン……。」

割と冗談じゃなかったんだが、良かった……これで案内が手に入ってた。

「俺の名前はサトウカズマっていうんだ、これからよろしく頼む」

少女は俺の名乗りを聞いて僅かばかりに悩んだあと、意を決したように何処かで見たとのことのあるポーズを決めて、

「わ、我が名はゆんゆん！アークウィザードにして上級魔法を操るもの！そして、いずれは紅魔族の長となるもの……」

少女、ゆんゆんは段々と小さくなる声で名乗りを上げると顔を真っ赤にして俯いてしまった。なんかデジャブを感じると思ったら、めぐみんの名乗りに似てるな……でもめぐみんはもっところ、堂々としていたように思う。恥ずかしいのかな？アクアが言うには紅魔族は皆めぐみんみたいな連中だって聞いてたんだが。この娘みたいな常識的な娘がいたんだな。

「よろしく、ゆんゆん。」

「は、はい……」

やっぱり恥ずかしいのか、顔をうつむかせながら俺が差し出してきた手を握り返す。

「あと言い忘れてたんだけど……できれば明日にでも出発したいんだ。大丈夫かな？」

「だ、大丈夫です……これから宿に戻って準備すれば」

「悪いな……宿まで送るよ、買い物はあとでもできるからな」

「ありがとうございます」

「いや、礼を言わなきゃいけないのは俺の方だ」

見ず知らずの相手に凶々しいことを言ってるんだからな。

~~~~~

「ゆんゆん、例の洞窟まであとどれくらいだ？」

「多分、あと一日半くらいだと思います……」

俺はゆんゆんと獣よけの火を囲い今後のことについて話していた。

アルカンレティアで物資の補給を終え、早速次の日の朝から街を出て徒歩で目的地に向けて歩いていった。途中、運のいいことにモンスターとは出会わなかった。この辺のモンスターは強いものが多いと聞くので変身しなければ戦うのは難しいだろう。覚悟はしておかないとな。今更、震えてるから戦えませんが言えない、彼女は俺が巻き込んだんだからな。

アルカンレティアを出てから一日目の夜、俺はゆんゆんに事情の全てを語った。偶然仮面ライダーという力を得たこと、迅という人間ではない友人を得たこと、そして、魔王軍幹部ベルディアとの戦いでその親友を失ったことを……。

「そんなことがあったんですか……でも、その友人の為ってどういうことなんですか？その人は、もう……」

「確かにアイツの身体はもうない。だけど、アイツら人工知能の死は俺達人間の死とは違うかもしれないんだ」

「ゴメンナサイ……よくわからないです」

まあ、この世界の人間に素人の俺が人工知能の講義をしたところで

分かるわけもないんだが……。なんとやったものか、

「つまり、記憶さえ残ってれば新しい体を作って復活できるかもしれないってことなんだ」

もしも、紅魔の里に研究所があるとすればそこには当然迅の兄弟とも言えるヒューマギアがいるはずだ、出来ればヒューマギアに詳しいという滅と言う奴がいるのが理想だけど、他の二人でも迅が復活できるかどうかの答えを知っているはずだ。

そのことを、ゆんゆんに離すと人工知能のことに関してはまだよく理解できていないようだが友達を蘇らせる方法（アンデットとかではなく）を探しているということだけは理解してくれた。

だが、それを聞くとゆんゆんは俯いてどこが迷いがちに質問してきた。

「もし、もしもですよ？その研究所に迅さんを蘇らせる手立てが無かったとしたら？」

確かに、この情報は紘汰さんがマジックアイテムを通じて教えてくれたもので確証はない。彼が嘘をついているとは思わないが、その懸念をしなかったわけではない。

夜空を見上げながら、スウつと息を吸って答える。

「アイツとの約束を守るために魔王軍と戦う……。なんて、言えたらカッコいいんだろうけどな」  
「え？」

「正直、俺にはわからないんだ……。迅が帰ってこないってわかれば、多分、俺は……。悲しむと思う、辛いと思う……。情けないけど、泣いちゃうかもしれない。

「……だけど、戦わなくちゃいけないとは思う」

俺の答えにゆんゆんは顔を伏せて、それでもちやんと聞いてくれている。優しい娘だなど思いながら、俺は言葉を続ける。

「どんなに苦しくても、悲しくても、無様でも、情けなくても、前に向かって進まなきゃいけないと思う。そうしないと、アイツの心が救われない」

アイツ自身を救えなくとも、俺が戦い続けることで、アイツの心だ

けは救うことが出来るはずだ。

「その覚悟が出来るか……そのときになんなきやわかんないけどな」

本当に情けない話だ……俺がアクア達を置いてきたのは、そんな情けない姿を見られたくないからでもある。そんなことさされてみる、決心が揺らぐじゃないか。

「……どんなに辛くても俺の、俺達の望んだ結末のために戦える、そういう男に俺はなりたい。」

「……羨ましなあ」

彼女がポツリとつぶやいた言葉は俺の耳にも届いていた。その言葉に反応して彼女の顔を見るとまた顔を赤くして俯いてしまう。

「実は私……友達に追いつくために修行してたんです。だけど、どこに行っても仲間がでなくて……だから、命を懸けてまで自分を助けてくれた友達がいるカズマさんが羨ましいんです。」

「……不思議なもんだな。君みたいな優しい娘に仲間ができないなんて」

「え？」

「俺みたいな怪しいやつ頼みは無償で聞いてれて、親身になって俺の話聞いてくれるやつが優しくないわけ無いだろ？あつ、そうだ、よかつたらこの旅が終わっても俺と来ないか。アクセルの街で待ってる仲間もゆんゆんみたいな娘なら歓迎してくれる思うしさ」

俺の提案を聞くと、ゆんゆんは目からポロポロと涙を流しだした。

「えっ？何故泣くツ!？」

「す、すみません、そんな風に言ってもらえたことあまり、なかったもので……」

いや、それならそれでいいんだけど絵面的に見て女の娘を泣かしてる男みたいになってるから、泣き止んでほしい。

「ま、まあ、返事は急がなくていいからさ……旅が終わったとき改めて聞くから」

そういや、ゆんゆんってめぐみんのことしてるのかな？でも、見た感じ、ゆんゆんより年上に見えるからそうでもないのか？

## 二人目のレジエンド

「ここか……」

「はい」

アルカンレティアを出て、約2日半。俺達はようやく目当ての洞窟の前にたどり着いた。道の途中に出てきたモンスター達はなんとか変身して撃退した。変身してる間も一切震えは引いてくれなかったがゆんゆんの魔法のサポートもあつて事なきを得た。

「ゆんゆん、ここから先は俺一人で行くよ。後でこの間の答えを聞きたいから里に行つても大丈夫だ付き合わせて悪かったな」

流石にこれ以上迷惑をかける訳にはいかないと、ことわりをいれ中に入ろうとするがその後を彼女が付いてくる。

「こ、ここまで来て付いていけないというのは無責任だと思えますから最後まで案内させてください。そ、それに、わ、私たちはその……な、なか、なか……」

彼女はその言葉を発するのを恥ずかしがって躊躇する。そうか、そうだよな、

「仲間だもんな、最後まで一緒に行こう」

「はっ、はいっ！」

そして、俺達は洞窟の中へ足を踏み入れた。

~~~~~

「ここが行き止まりです」

暫く、洞窟の一本道を歩いていると行き止まりにぶつかった。

俺は壁に手を当て仕掛けがないか探る。

確か、迅のときは部屋そのものがエレベーターになってたんだよな……。

壁全体を調べていると一部分だけ不自然に盛り上がっているのが確認できた。砂埃を落としてみると、そこには俺よく見慣れたものが埋め込まれていた。

「プログライズキー……」

そこに埋まっていたのは確かにプログライズキーだった。ただし、

俺が持つてるキーのように絵柄が書かれているものではなくまるで液晶画面のようになっていた。

ここに埋まっているのがプログライズキーだとしたら、ここは間違いなくアラタさんの研究所で間違いないはずだ。さらに言えば、ゼロワンの資格者にしか入れない仕組みが施されているはず。

となれば、答えは一つ。

「ドライバーをかざせてことか……!」

俺は懐からゼロワンドライバーを取り出し、オーソライザーの部分を壁に埋まっているプログライズキーにかざす。

『Authorize!』

ドライバーをかざした瞬間、プログライズキーの液晶画面に『UNLOCK』の文字が浮かび、壁からゴゴゴという凄まじい音が洞窟に鳴り響く。

「カズマさん、なにが……?」

「ゆんゆん、下がっててくれ」

「は、はい……」

俺達は万が一の場合に備えて一步下がり、その光景を期待を込めた眼差しで見守る。やがて、壁に埋め込まれたキーの画面の文字が『OPEN』に変わり、壁が左右に割れる。

「たどり着いたぞ……迅ッ!」

俺は興奮を抑えきれず、そんな言葉を漏らしてしまう。そして、自分の意識が考えるよりも速く、足が前に向かって歩きだしていた。

「あ、待ってください……!」

洞窟の最奥に向かって歩いていく俺の後をゆんゆんが着いてくる。

また、しばらく洞窟の一本道を歩いていると、

「誰かいる……!」

道の先の暗闇に一つの人型の影が見えた。

「思っていたより、早かったな。ゼロワンの資格者」

そこにいたのは目つきの鋭い金髪の男。頭にヘッドバンドのようなものを巻いており、服は迅の着ていた服に負けず劣らずボロボロな黒い服。そして腰に、一本の剣……日本刀……がさしてあった。



間違いない、コイツがここの管理を任されているヒューマギア……。男性タイプってことは、まず亡ってやつでないことだけは明らかだ。ということとは、

「まずひとつだけ教えてくれ、お前は滅か？それとも、雷か？」

「俺の個体名は滅だ」

滅っ！迅が言っていたヒューマギアの制作に携わった、アラタさんの助手のヒューマギア……！

「滅、早速で悪いんだが話を聞いてほしい」

「その必要はない。お前がここに来た理由は、わかっているからな」「えっ？」

滅はそう言うと、俺たちに背を向けて研究所の先へと歩き出す。いきなりのことだ呆けていた俺達はその場で立ち尽くしていたが、滅は一度首だけ振り返り。

「どうした？迅の修復が可能か、しりたくはないのか？」

その口ぶりは本当に俺達の状況を理解していることを裏付けた。俺とゆんゆんは慌てて、滅のあとをついていく。

「どうしてそのことを知ってるんだ？確か、同一人物にマスター権限が譲渡されない限りお互いのヒューマギアの情報閲覧できないはずじゃなかったのか？」

やはり、気になり前を歩く滅の背中に疑問を投げかける。滅は振り返ることもなく、そのことについて話す。

「その説明は不十分だ、例外がある。万が一、ヒューマギアの機体が破壊された場合衛星ゼアを通してそのデータはこのラボに転送されるよう俺がプログラムを仕込んだ。このラボにはヒューマギアのリペアのための装置が格納されているからな」

「じゃあっー！」

「ああ、迅の修復は可能だ。だが、その前にゼロワンの資格者、お前にやってもらうことがある。」

「なんだよ」

俺達はいつの間にか結構広い部屋に出ていた。そして、滅の言葉の続きを聞こうとした瞬間、

「ッ、ゆんゆんっ!」

「えっ?」

「……俺は滅が真一文字に抜いた刀をかわすためにゆんゆんと一緒に一歩退いた。」

「痛ッ!!」

だが、ギリギリのところがかわしきれなかった。刃先が俺の右肩を浅く切り裂いた。

「カズマさんッ!!」

「大丈夫、かすり傷だ……それより、」

俺は刀を振るった張本人である滅に鋭い視線を向ける。

「どういうつもりだよ、滅ッ!」

「なんで、人間の味方であるはずのヒューマギアが俺達を攻撃したんだ?」

「危機感知は大したものだ……だが、その程度で選ばれた者であるつもりでいるなら、大きな間違いだ」

「どういう意味だ?」

「……迅のデータを閲覧し、貴様にはゼロワンの資格がないと判断した。よって、ゼロワンドライバーを回収する」

「なっ!何言ってるんだ、俺は迅から確かに資格を認められてるんだぞ!?!」

「奴の考える資格と俺の考える資格は違うということだ。奪われたくないのなら、抗うといい。力を示せば俺の考えも変わるかもしれないぞ」

冷たい口調でそういった滅は刀を鞘に収め懐からあるものを取り出した。

「迅と同じ、フォースライザー……!」

「何を驚いている?まさか、変身できるのはお前と迅だけだとも思ったのか?」

『Forcerizer……!』

そう言って、滅は腰にドライバを装着する。

「ゆんゆん、下がっててくれ……」

「カズマさん……」

クソツ、なんでゴール前で……!!

心の中で愚痴りながらゼロワンドライバーを取り出す。こんな時まで震えは止まっていない。だけど、ここで引き下がる訳にはいかない。

そう思っていたときだった、

「楽しそうなことやってるじゃないか、俺も混ぜてくれよ」

俺達を通ってきたのとは逆の通路からパシヤリというシャッター音のような音と、男性の声が聞こえてきたのは。

「まだ、誰かいるの?」

俺達は通路から近づいてくる足音に警戒を飛ばす。だが、暗闇から見えたその顔を見た俺の心は警戒より驚愕という感情に支配された。「よう、速かったな……この世界の仮面ライダー、いや、今はどっちつかずのただの小僧か」

「あ、貴方は……!」

そこにいたのはマゼンタのYシャツを着て、その上から黒い上着を来た男性。そして、胸元に特徴的なマゼンタのトイカメラを首から下げていた。俺が知っている姿より幾分か老けているように見えるけど……その顔を見間違えるほどではなかった。

何故、この人がここに……!?

「門矢、士……さん……!」

「ほう……俺のことを知ってるのか」

そこにいたのは間違いなく、通りすがりの仮面ライダーと世界の破壊者の異名を持つ仮面ライダー。仮面ライダーディケイドその人だった。

オレの夢は……

「手を出すなどといったはずだ、仮面ライダーディケイド」

「なに、手は多くて困りはしないだろう。俺も葛葉の奴が力を託したやつの実力が気になるからな」

突如現れた仮面ライダーディケイド、門矢士さんは滅と何かを話している。だが、話の流れからして士さんも俺と敵対しているのか？

「待ってくれ！滅が俺を襲う理由はわかった……だけど、何故貴方が……本物の仮面ライダーである貴方が……!?!」

士さんは俺の質問に口元にいやらしい笑みを浮かべ、ドライバーを腰に当てる。

「なあに、そつちのほうが面白いからだ」

そう言つて、ドライバーの左脇に現れたカードケース……確かライダーブツカードとかいうディケイドのメイン装備……からディケイドのカードを取り出して、構える。

「余計なことはするなどといったはずだ、仮面ライダーディケイド」

「そう邪険にするな。同じ『滅ぼす者』の称号を持つもの同士、仲良くしようじゃないか」

「フンツ」

士さんの言葉に不機嫌そうに鼻を鳴らすと、滅も懐から紫色のプログライズキーを取り出す。描かれているのは……蠍か？

『Poison!』

『Kamen Ride……!』

「変身……!」

「変身!」

滅がプログライズキーをフォースライザーをセットすると、蠍のライダモデルが飛び出す。隣の士さんはカードをドライバーに装填する。

『Force-ize……!』

『Decade!』

滅がフォースライザーのアンカーを引くとライダモデルの蠍が尾

にある針で滅の体を突き刺す、そのまま滅の体をおい、それが弾けると迅のときのようにバンドのようなものに繋がれた装甲が現れ一気に縮んで変身を完了する。士さんも周りに現れた影が一気に収束し最後に頭のプレートが刺さりバーコードを模したマスクの仮面ライダーデイケイドに変身した。

『Stinging Scorpion! Break Down……!』

滅は紫色の蠍をモデルにしたライダーに変身した。

「やるしかないのか……!」

『Fang!』

『Biting Shark!』

「行くぞ……!」

俺がバイティングシャークに変身するのを確認すると滅は、第三のアタッシュウエポン『アタッシュアロー』を構え、俺に向かってくる。確か、あの武器は刃も付いている近遠両方での戦闘が可能なアイテムだったはず。

「フッ!」

「っ!!」

攻撃を繰り出してくる、滅の攻撃を紙一重で交わしカウンターに腕の刃で切り裂こうとするが、奴は一切の防御をせずその攻撃を受け止める。

「その程度では俺にはきかん……シャイニングホッパーでも使わなければ俺には勝てん」

「グッ、がああっ!!」

俺の肩にアタッシュアローの刃を突きつけ、そのまま振り下ろす。さっきの傷も相まって凄まじい痛みが走る。

肩を抑えて滅から退くと、今度はデイケイドが剣状態にしたライドブッカーで切りかかってくる。

「はあっ!!」

「くっ!」

俺は左手の刃で剣を受け止めるが、力の差は明らか。徐々に押されていく。

「葛葉が言ったとおりだな……自分で答えにたどりついてるくせに今のお前はブレすぎだ」

「え？グハっ!!」

俺は蹴り飛ばされ、その間にライドブツカーで切りつけられ後方に無理矢理下げられる。

そこに向かってくる滅に右手の刃で攻撃するが奴はアタツシユアローで受け止め上へ跳ね上げられる。そして、その間に連続でアタツシユアローの刃で俺の体を切り裂いてくる。

「うっ！」

「ふん」

『Kabban Shoot!』

「ぐわあああああ」

俺が一步退いた間に弓を引き、放たれた矢が俺を吹き飛ばす。そして、その背後からディケイドによる銃撃が俺の体をおそう。

「ぐっ……！」

「俺を忘れてもらっちゃ困るな」

『『ライト・オブ・セイバー!!』』

しかし、次の瞬間光の鞭が滅とディケイドに襲いかかる。二人は俺から下がることでその攻撃を回避する。

「私のことも忘れないでくださいッ！」

「……仲間がいたのか」

「酷いっ!!」

そういや、二人共ゆんゆんのことは反応してなかったような気がする。

「まあいい、お嬢さんには悪いがこれは俺たちライダーの問題だ。部外者は黙ってもらおうか？」

そういったディケイドはドライバを展開状態にし、ライドブツカーから新たなライダーのカードを取り出して、装填する。

『Kamen Ride Wizard!』

『ヒー!ヒー!ヒーヒーヒー!』

現れた赤い魔法陣がディケイドを通過すると、その姿が赤い宝石の

ようなマスクのライダー。仮面ライダーウィザードに変身した。これが仮面ライダーディケイドの能力、他の仮面ライダーに変身する力。ディケイドウィザードはウィザードの必殺技のカードをドライバーに装填する。

『Final Attack Ride Wi·Wi·Wi·Wizard!』

「悪いが、しばらく引っ込んでてくれ」

ディケイドウィザードが手をかざすと、ゆんゆんの足元から無数の魔法陣が現れその中から無数の鎖が現れゆんゆんを縛り上げる。

「な、なにこれ……!」

「安心しろ、しばらくすれば勝手に消える」

「ゆんゆんっ!!」

「他人の心配をしている場合か?」

「グツ……!」

ドライバーからウィザードのカードが飛び出して、ディケイドの姿に戻る。

その間にも、俺は滅からの攻撃を受けていた。こいつ、ひよつとしたら、ベルディアと同じか、下手したらそれ以上だっ!

「(こ)までだ」

『Strong!』  
『Progrise key confirmed. Ready to utilize.』

『Hercules Beetles Ability!』

滅はカブトムシが描かれた緑色のプログライズキーを起動させアタッシュアローのライズスロットに装填し、俺に向けて弓を引く。

「亡き者になれ」

「コイツで終わりだ」

『Amazing Kaban Shoot!』

『Final Attack Ride De·De·De·Decade!』

「はっ!!」

「ぐっ、ぐあああああああ!!!」

滅のアタッシュアローによる攻撃と、デイケイドのデイメンションシュートが俺に直撃し、そのまま吹き飛ばされ壁に叩きつけられた。「がっ、ああ………」

変身が解除され地面に叩きつけられた俺を心配してゆんゆんが近づいてくる。

「カズマさんツ!!大丈夫ですか、カズマさんツ!!」

立ち上がろうとするが、全身の痛みのせいで力が抜け立ち上がるこ  
とができない……ヤバイ、意識も朦朧としてきた。

「……もう、立つな。大人しくドライバーを渡せば命までは奪わん」  
滅の言葉に、力を込めて立ち上がるようにしていた足が止まる。

「……確かに、ここでドライバーを渡してしまえば楽になれる……  
元々、仮面ライダーなんて俺には過ぎた力だったんだ。

俺は……アクアに転生されるまで、何一つ持っていなかった。手を  
伸ばせば手に入れられるものもあったはずなのに、何もしてこなかっ  
た……そんな奴に誰かを救うなんてことできるはずがなかった。

全部、迅やクリスのかいかぶりだったんだ……俺には、俺自身には  
なんの力もなかった。

「……」

「へえ………」

「……何故まだ、立ち上がる?」

俺の体は勝手に立ち上がっていた。

「……決まってるだろ?お前にドライバーを渡したくないからだ」

「何故、そこまでしてドライバーに拘る?そこまで力に固執する?」

「何故、か?そうだな、一つだけわかってるのは……このドライバーが  
俺の親友が俺を信じて託してくれたものだからだ」

俺はふらふらで上半身が前に倒れ込むギリギリだが、それでも腹に  
力を込めて倒れないように務める。

文字通り、頭に血が上ってたらしい。だいぶ流れて、頭がスツキリ  
してきた。

「……土さんの言うとおりで……俺自身進むべき道はとつくに決



まっつてたんだ。そこに踏み出せない理由をここに来るといふ名目でごまかしてただけだった。

「悪い、それだけじゃなかった……俺がアイツの夢を叶えてやりたいからだ。そのために、このドライバーは絶対必要だからな」

「そうだ、やつとわかったんだ……。なんで、俺はこんなボロボロになっても、ドライバーを手放したくないのか。」

もう、ライダーの資格なんてどうでもいい。本物の仮面ライダーになれなくてもいいッ!!俺はそんなもののために今まで戦ってきたんじゃないッ!!

「俺はッ!力が欲しかったから……ライダーとして戦ってきたんじゃないっ!!アイツの……迅の夢を叶えてやりたかったから、だからッ!!」

「……所詮は他人の夢のためにしか強くなれないってわけか……その相手を失ったら簡単に折れるのか?」

「デイケイドは俺の叫びを侮蔑するような口調で非難する、だけど、どこかわざとらしく俺の本音を引出そうとしてるのは見え見えだった。」

「アイツだけの願いだからじゃないっ!!迅と、アイツと一緒に戦う中で、誰かの為に戦う喜びを知った……アイツを通じて仲間という存在の大きさを知った……そしたら、いつの間にか」

「仲間と、仲間の夢を護ることが俺の夢になったんだッ!!」  
俺は前のめりになってた体を起こし、真っ直ぐと滅とデイケイドを見据える。

「だから俺は戦う……!アイツだけじゃない、俺を待つてくれている仲間、胸を張って会いにいけるようになりたいから、二度とあんな思いをしたくないからッ、二度と誰にもあんな思いをさせたくないからッ、俺は進む、前に進み続ける……!」

それが、俺が戦う理由……それだけが俺の戦う理由。だけど、それ以上に俺が命をかける理由は必要ない。

「ゆんゆん、旅の初めに俺が行ったこと覚えてるか?」

「は、はい……!」

「……前に進む理由はアイツの夢のためだけじゃなくてもいいみたいだ。だから、ゆんゆん。ここから出てから聞くつもりだったけど、今聞くよ」

俺はゆんゆんを真っ直ぐ見据えて、質問する。

「俺の前仲に進む理由問になつてくれるか？」

「っ！はいっ、勿論です……！」

瞬間、懐にしまつてあつた絺沓さんから貫つたプログライズキーが光を放ちそれが金色のリングのようなエネルギーになつてゆんゆんの周りの鎖を砕いて解放した。

「絺沓さんがくれた、プログライズキーが……。」

手元に戻つてきたオンステージングゲームのプログライズキーはオレンジ色の光を放っていた。

「葛葉が託した力か……。」

「ゆんゆんツ!!大丈夫か？」

「はっ、はいっ！大丈夫です……。」

「じゃあ、はいっ！」

「え？」

「ホッ、ホッ、ホッと」

俺は右手を差し出す。握手を求めているのだと、判断したゆんゆんは俺の手を握り返す。そして、拳を正面、上、下から打ち合わせる。「これは？」

「俺の先輩が使つてた、友情の証？らしいぜ」

「ゆ、友情の証ッ！」

仮面ライダーフォーゼが使つてたサインだったよな、コレ？なんか、ゆんゆん打ち震えてるんだけど……。

「少しは見所が出てきたじゃないか？なあ」

「……………」

「ゆんゆん、下がつてくれ。この二人は俺が戦わなきゃいけない相手だからな」

「……大丈夫なんですか？」

「ああ、ようやく本調子になつてきたからな。今の俺は負ける気がし

ねえよ」

自信満々でサムズアップすると、ゆんゆんは笑顔でうなづき下がってくれた。これは、俺が乗り越えるべき試練だからな。

俺は二人の前に立ち、未だにオレンジの輝きを放つプログライズキーを見る。

「絺汰さん……。」

力を貸してくれるんですね……。

俺はプログライズキーを顔の横に構えて、起動させる。

『Jucy!』

『Authorize!』

スターターを押して、オーソライザーにかざすとゼアから落ちてきたのはライダモデルではなく……。

「アレって、オレンジ?」

ゆんゆんが俺の頭上に現れたソレをみて、眩いた。いや、ハッキリ言って俺も啞然としてる。え?オレンジ?なんで、このタイミングでオレンジ?」

「……………」

「相変わらず、奴の変身は気が抜けるな……。」

「と、取り敢えず、変身っ!!」

テンパリながらも、プログライズキーをキーモードにしてドライブに押し込む。

『Progrize!』

キーに読み込ませると、同時に頭上のオレンジが頭に突き刺さった。

「か、カズマさんっ!?!」

首の上から先がオレンジ頭になった俺を心配して、ゆんゆんが声を上げるがそれよりも先に俺の体がゼロワンと違うライダースーツに覆われる。

『Fruits Worrior! On—Staging Gaim!』

頭部をマスクが覆い、オレンジの中にあつた兜が頭に装着される

と、オレンジが割れて鎧へと変わる。

『Sengoku warriors dance maguificently!』

「これって、仮面ライダー鎧武……?」

このプログライズキーは、ライダーの力をゼロワンドライバーで使うことのできるプログライズキーだったのか。

「なるほどな、そのキーはゼアにある仮面ライダー鎧武のデータにアクセスし、それをゼロワンにमतわせるためのまさしく、鍵だったわけか」

「ああ、なるほど……。」

滅のわかりやすい説明に納得する。

俺は両手に現れた鎧武の武器、無双セイバーと橙丸を構える。

「第2ラウンドか……面白い」

「……………」

ディケイドと滅はそれぞれの武器を構えて、俺を待ち受ける構えを取る。

「行くぜ……ここからは俺のステージだ!!」

俺が駆け出すのと同時に第2ラウンドのゴングが鳴り響いた。

認めるモノ、認められるモノ

「行くぜえ!!」

俺は鎧武の二刀流、無双セイバーと橙丸を構えまずは滅に向かって駆け出す。矢による攻撃を仕掛けてくるが二本の剣でそれをさばく。

「はあっ!」

「ふっ……!」

俺が間合いに入ると滅のアタッシュアローと俺の剣が交差する。何合かの斬り合いの末、お互いに離れる。無双セイバーの鎧のアンカーを引き弾を装填する。互いに弾と矢を放ちながら相手が放った攻撃を回避する。

「だから、俺を忘れるなって言ってるんだろ?」

「……忘れてないですよ」

背後から斬りかかってきたディケイドの攻撃を左手の橙丸で跳ね上げ、右手に持った無双セイバーの鎧を腹部に押し当て、アンカーを引いて弾を再装填してトリガーを引く。

「グッ……やってくれたな」

「まだまだあっ!!」

俺は二本の剣でライドブツカーの攻撃をいなしながらディケイドのボディを何度も斬りつける。

「くう……なるほど、葛葉が力を託しただけのことはあるようだな」

「コイツで決める……!!」

俺は無双セイバーと橙丸を合体させ、薙刀モードにしてドライバーのプログライズキーを押し込む。

『On—Stagging Impact』

「ハッ!ハッ!」

「くっ!」

無双セイバーの双刃から刃をディケイドに向かって放つと、ディケイドの体をオレンジの形をしたエネルギーが捉える。

「セイハアッ!!」

仮面ライダー鎧武の必殺技、薙刀無双ストライザーでディケイドを

切り裂き爆発が起きる。

「……新人ライダーにしては、上出来な方だな」

爆発が晴れるとそこには片膝を地面につけたデイケイドの姿があった。これを喰らって変身解除までいかないところが流石レジエンドって感じだよな。

俺はさらに追撃を繰り出そうと、無双セイバーを構えなおそうとした瞬間鎧武の変身が解除された基本フォームのライジングホッパーに戻る。

「時間制限があるのか」

まあ、俺ごときが先輩ライダーの力を無制限で使い続けることなんてできるわけがないか。

改めて構えなおそうとすると、デイケイドの背後の空間に灰色のカーテンが現れる。あれって、確かデイケイドに出てきた世界を移動できるオーロラ……。デイケイドは俺に背を向けそちら側に向けて歩き出す。

「今日のところはこの辺にしといてやる。機会があれば、また遊ぼう。この世界の仮面ライダー」

「ツ!!士さん……」

この人は今俺のことをこの世界の仮面ライダーと呼んだ。つまり、この人俺のことを仮面ライダーとして認めてくれたってことだ。

「士さんっ!!」

オーロラに向かって歩き出す、デイケイドを呼び止め。頭を下げる。

「……ありがとうございます」

「ふっ、ジオウよりは礼儀をわきまえてるみたいだな。そうだ、コイツを渡し忘れていたな。楽しませてくれた札にくれてやるよ」

そういつたデイケイドは振り向きざまに俺に向かって何かを投げ渡してきた。手元に収まったそれは白とマゼンダ色のプログライスキー。K M E N R I D I N G   D E C A D Eと記されており、デイケイドの正面絵が描かれていた。

「貴方のプログライスキー……」

「そいつが俺達とお前たちを繋げるかはお前次第だ」

「俺達……？それって、一体……」

「じゃあなあ、頼むから俺にこの世界を破壊させないでくれよ」

「ちよ、それどういうっ!!」

意味だつて、聞こうとした瞬間。土さんは手をひらひらさせながらオーロラのカーテンの中に消えていった。

俺はあの人が残していったプログライズキーを見ながら考える。仮面ライダーディケイドは平成ライダーの中でも特に危険な人だからな……一時期ライダーを狩りまくってた時期もあつたくらいだし。それに、あのドライバー……俺が知ってるディケイドドライバーとカラーリングが違つてた。変身できるライダーだつて、クウガからキバまでのライダーだつたはずだし、それ以降のライダーにも変身できるようになつてるとは。

だが、その懸念をしていると滅が俺に歩み寄ってきた。

「ようやく、邪魔者が消えたか。続けるぞ」

「滅、お前にも一つだけ聞きたいことができた」

「……なんだ？」

「……お前、ホントは俺を立ち直らせる為にこの勝負を仕掛けたんじゃないのか？」

「えっ?」

「なぜ、そう思う」

驚いた声を出すゆんゆんを他所に滅は否定せず、質問を返してくる。

「お前の攻撃は確かに凄まじかった。だけど、なんていうか殺気と言うものを感じなかった気がするんだ。お前たちヒューマギアは感情を持った人工知能。それくらいは出せてもいいはずなのに」

「……………」

「なによりも、迅は万が一の場合は資格者を殺してでもドライバーを回収するのが仕事だつて言つてた。本気でドライバーを回収するつもりなら、なんでゆんゆんを人質にしなかつたんだ?お前なら、それくらいは出来たはずだ」

ベルディアと同レベルの力量を持つコイツが、上級職のアークウィザードとはいえゆんゆんを捕まえることができないわけがない。それに、コイツが使ったプログライズキーのアビリティは『ポイズン』。やろうと思えば、毒で脅迫もできたはずだ。

もしもコイツが俺を倒すことではなく、迅を失って消沈している俺を立ち直らせることを目的にしていたのだとしたら、コイツの今までの言動がすべて納得できる。

「……父上が託したゼロワンドライバーを持つものが腑抜けでは困るのでな。それに、あながち全てが嘘というわけでもない。あのままだべたに這いつくばっていれば、容赦なくそのドライバーを奪った」

やはり、そのために俺をわざと追い詰めていたのか。ようは士さんと同じだったてわけね。

「さあ、ここからは借り受けた力ではない。貴様自身の力を見せてみる」

アタツシユアローを俺に向けながらそういう滅に俺はシャイニングホッパーキーを構えることで答える。

『Shinning Jump!』

『Authorize!』

スターターを押してキーを起動させ、オーソライザーにかざして頭上に現れた鍵穴を錠錠してオンブバッタのライダモデルを召喚する。

『Authorize!』

『The rider kick increases the power by adding to brightness! Shinning Hopper!』

展開されたデータネットでライダモデルを捕獲して、シャイニングアーキテクターの全身にまとわシャイニングホッパーに変身する。

『When I shine, darkness fades.』

『行くぞっ!!』

『来いっ……!!』

シャイニングホッパーの能力を展開し、一気に滅の懐まで飛び込



む。連続で拳を振るうが奴はその攻撃をギリギリで回避しながら、カウンターとばかりにアタツシユアローの刃を振るう。

「動きを読まれている」

「シャイニングホッパーの演算能力の開発には俺も携わっている。確かに、その能力は強力だが俺のラーニングの速度も負けてはいない」なるほど、迅が感情のラーニングに特化したヒューマギアならば、滅は戦闘のラーニングに特化したヒューマギアというわけか。道理でベルディアと同レベルの動きができるわけだ。

「だが、学習がお前たちヒューマギアの専売特許だと思うなよっ!!」

まずは、武器を奪う!

「はあっ!!」

「くっ!」

俺は放たれた矢をシャイニングホッパーの能力で回避しつつ、横からアタツシユアローを蹴り飛ばしそのままボディブローを叩き込む。殴り飛ばされた場所に先回りして、連続攻撃で攻撃の予備動作を起こさせない。

「ハア……ハア……」

——流石にさっきの戦いが響いてきたな。シャイニングホッパーのバックファイアが来るのも時間の問題だ。ヒューマギアのアイツに体力切れなんて起きるわけがないし、長期戦は俺が圧倒的に不利だな……。

そう思い至った俺はドライバーのプログライズキーに触れる。そして、それを見た滅もフォースライザーのアンカーを動かしスコープオンキーを抜いて、落ちていたアタツシユアローを拾って装填する。

『Shining Impact!』

『Progrise key confirmed. Ready to utilize.』

『Scorpions Ability!』

『Sting Kaban Shoot!』

「うおおおおおおお!!」

「ハアツ!!」

アタツシユアローから放たれた無数の矢をシャイニングホッパーの能力を回避しながら滅に向かって走り出す。懐まで飛び込んだ俺はアツパーカットで滅を上空に殴り飛ばす。

「クッ!!」

上空に投げ出されても滅はさらに多くの矢を放ち俺を攪乱する。その間にアタツシユアローにセットしてあったスコープオンキーをフォースライザーに戻しアンカーを連続で二回開閉する。

『Sting Utopia!』

左腕の針のようなユニットが尾のように伸び奴の右脚に巻きついてエネルギーを収束する。

「ハアアアアアア!!」

「ハアッ!!」

シヤ イ スティング

ニイ ユートピア

グインパクト

二つのライダーキックが空中で激突した。

## アラタな絆

「知らない天井だ」

一度言ってみたかったんだよなこれ。

さて、俺は見慣れない部屋のベッドの上で目を覚ました。いや、正確には部屋自体は見慣れないが部屋にあるものは見覚えがある。アレって、ゲームガールだよな？なんで、異世界にゲーム機が……。

「痛っ！」

俺は部屋に転がっていたゲーム機を取りに行こうと体を起こすと肩に鋭い痛みが走った。よく見ると、俺の上半身の服は脱がされ代わりに右肩を中心に包帯が巻かれていた。ついでに頭にも。

「確か、滅とライダーキックでぶつかり合って……」

お互いのエネルギーが反発して地面に吹き飛ばされて引き分けになったところまでは覚えてる。それで、変身を解除して……。

「起きたか、ゼロワン」

自動ドアのような扉が開き、そこからいつか迅が俺にドライバーを渡したときのようなスーツケースを持った滅が部屋に入ってきた。

「えっと、俺はどうなってたんだ？」

「お前は変身を解除したあと俺とデイケイドの攻撃で蓄積されたダメージとシャイニングホッパーのバックファイアで、精神が限界を迎えて気絶した。それから、約36時間寝ていた」

「36時間!?!」

つまり、一日半も寝ていたのか……：そーいや、ベルディアとの戦いのあと三日間目を覚まさなかったってアクアが言ってたな。

「シャイニングホッパーのバックファイアってこんなに続くんだな……。」

「いや、シャイニングホッパーのバックファイアの影響は最長でも約12時間。初期ならまだしも半日もあれば全開する。お前が回復するのに1.5倍もの時間を費やした理由は別にある」

「なんだ、それ？」

俺が滅に尋ね返すと滅の背後からドタドタという足音が近づいて

きた。

「滅さん、置いてかないくださいよ……」

やってきたのはあの場にいたゆんゆんだった。どうやら、滅において行かれたらしく慌てておってきたようだった。

「カズマさん、目が覚めたんです、ね……?」

彼女はベッドの上で寝ていた俺を見るなり、ありえないものを見たような顔で目を見開く。

「どうしたんだよ、ゆんゆん? そんな鳩が豆鉄砲喰らったような顔して?」

「あの……カズマさん、なんですすよね?」

「他の誰に見えんだよ?」

そういつて、俺はベッドから体を起こす。それと同時に違和感を感じた。

なんか、目線が高くなったような……。変身すると、身長がだいぶ高くなるけど今変身はしてないし、目線が高くなる道理がない。

「そこに姿見がある。それを見ればお前の疑問がわかるはずだ」

俺の疑問を察したのか、滅が部屋の壁に埋め込まれてあった大きな鏡を指差してそう言った。俺は言われたとおりに鏡の前に立つ。

そこに映っていたのは、

「……………誰だ、この二枚目は」

「自分で言うのか」

半分ボケ、半分本気で呟くと滅に突っ込まれた。いや、でも割りとボケでもないかもしれない。鏡に映っていたのは身長が175cmは超えた、スラツとした長い足の男。気のせいか、顔立ちも大人っぽくなったような気もする。とても165cmしか身長がなかった俺の姿とは思えなかった。

「いや、お前これ……成長期つてレベルじゃないぞ」

俺は急激に成長した己の肉体に困惑を隠せない。それに対し、滅のやつは冷静に説明を始める。

「それもゼロワンドライバーの影響だ。ドライバーはレベルアップの影響を肉体に大きく反映する能力も搭載されている。迅との特訓、魔

王軍幹部との戦い、俺とデイケイドとの戦い。蓄積された経験値がこのタイムリングで反映されたんだ」

「どれだけ万能なんだよ、ゼロワンドライバー!？」

「何を驚く、肉体が成長するという事は筋力、体力、その他諸々の力が上がる。ゼロワンの基礎能力を上げるには必要な機能だ、この程度で驚くな」

滅の口ぶりからして、どうやらゼロワンドライバーには更に隠された機能が搭載されているらしい。もう驚きすぎて疲れてきた。

「……まずはこれに着替える。話はそれからだ」

「おっと……!!」

滅は持っていたスーツケースを俺に投げ渡す。中を開くと、中には右半分に白いストライプのある黒スーツが入っていた。

「なんだこれ?」

「おまえの服は先程の戦いで着られなくなったからな。ゼアに指示を出して作らせた変身中でも違和感なく動ける特殊繊維で作られた服だ。ゼアの採寸ならば、違和感はないはずだ」

仕事が早いな、コイツ……。迅が万能型とか言ってたけど、そのとおりだな。

「行くぞ、紅魔の娘。俺達は廊下の先にある管制室にいる、着替えたらすぐに来い。迅のことや、今後の動きについて話したいことがある」  
「お、おう……!」

滅はそれだけ俺に言うのと、部屋から出ていった。

「あつ、待つてください滅さんっ!カズマさん私も先に行ってます」  
ゆんゆんも滅のあとを慌ててついていった。まあ、ゆんゆんがいたら落ち着いて着替えられなかったからありがたいけどさ。

そういうや、もしかしてこの部屋ってこの研究所でのアラタさんの自室だった部屋か?

~~~~~

「うっわ、すっげえ!!」

滅に言われたとおり、着替えを終えると部屋を出て廊下の先にあるという管制室にやってきた。そこは俺なんかじゃとても理解でき

ないような無数の機材のある部屋で、特に目を引くのは奥側に箱のような装置だった。

俺も男の子だからなあ……こういう秘密基地感がある場所を見るとテンションが上がる。

「来たか、ゼロワン」

「なあ、これ俺にあってるかな？こんな服きたことないからよくわかんねえんだけど」

取り敢えず話しかけてきた滅に今の俺の格好について尋ねてみる。引きこもるようになってからジャージくらいしか私服を持ってなかったからな……。傍から見たらただの痛いやつに見えないか心配だ。

「知るか、俺はゼアが作った服をお前に渡したただけだ」

「わ、私はよく似合ってると思いますよ……！」

仏頂面の滅とは違い、素直な感想を送ってくれるゆんゆん。よかったあ、これでイタイとか言われたら立ち直れなかったかもしれない。

「気が済んだか？速く話を始めるぞ」

「……お前、始めてあったときから思ってたけど愛想なさすぎだろ？」

迅の奴はもつと明るかったし、なんていうか柔らかかったけどコイツ変身したときと同じくらいガツチガチじゃねえか。

「そんなんだからお前迅に兄ちゃんって呼ばれないんじやねえの？」

なんか、ちよつとからかいたくなって前に迅が家族の話をしていたときコイツだけ他の二人と違って愛称がなかったことを思い出し口にする。

その直後に聞いたゴトツという音に俺は視線を転じる。そこには、さつきまで俺が気に入らないと思っていた相手が四つん這いになって地面に跪いてる姿があった。

「……………」

「……………」

その姿に思わず無言になる俺とゆんゆん。

「えつと、ひよつとして気にしてたり……？」

「……………なんのことだ？」

ゆんゆんの質問にたつぷり時間をかけて立ち上がりどぼける滅、マジでかこいつ？

「いや、悪かったって……俺もちょっと嫌味が言いたくなっちゃってさ、別にお前の傷口をえぐりたかったわけじゃないんだ、な？」

「だから、なんのことだ？説明を始めるぞ」

説明を始めるという名目で無理矢理話を切る滅。

「アイツも人間みたいなところあったんだな……。」

「ですね……。」

その光景に流石の俺達も苦笑いだ。

滅はまず、デカイ箱のような装置の前に立ち説明を始める。

「まずはこれについて話そう。これは『多次元プリンター』。ゼアからの命令を受信し、それを高速で構築することができる。ゼアが一度ラーニングしたものでならプログライズキーやゼロワンドライバー以外再現が可能だ、無論ヒューマギでもな」

「じゃあっ!!」

「ああ、これを使えば迅の体は生み出せる。だが、中身が問題だ」

「どういう意味だ？」

「これだ」

滅は懐から取り出したシャイニングホッパーキーを俺達に見せるように持つ。

「ないと思ったら、お前が持ってたのか」

「少し借りただけだ」

滅はシャイニングホッパーキーを俺に投げ返す。

「それで、こいつが迅の中身とどう関係してんだ？」

「迅のデータは損傷があまりにも酷い。修復にはゼアの頭脳を持ってしても一年以上かかる」

「なんでそんなに!?!」

「迅はそのキーを作るために自らの機体を戦闘データの集積装置の代わりにした。元々ヒューマギアにはプログライズキー九個ものデータを同時処理する能力はない。それを無理矢理行ったんだ、データが破損するに決まっている」

「ッ!!」

滅の説明に納得してしまう。

「でも、ゼアの力があれば時間がかかっても修復はできるんですよ?」

「ゆんゆん……。」

「カズマさんが寝てる間に滅さんに色々教わったんです。紅魔族の出生とかも……。」

「……悪い、ゆんゆんは他の紅魔族とは違う感じがしたから傷つくんじゃないかって思ってた」

「いえ、寧ろスツキリしましたから。それで、滅さんどうなんですか?」

「なんか、雰囲気変わったかゆんゆん? アルカンレティアであったときよりなんか堂々としてるっていうか。」

「確率にして約98.2%、失敗するほうがありえない数値だ。さらに言えば、ゼアは常にラーニングを重ね自己進化を続けている。その速度を考えれば、予定より速く迅が復活する可能性は十分にある」

「ですって、カズマさん」

「そう笑顔で俺に言うゆんゆん。そうだよな、前に進むって覚悟を決めた直後にそんなことで躓いてちゃだめだよな……。」

「迅は帰ってくる!……今はそれだけわかれば十分だよな!」

「はいっ、カズマさんっ!!」

「……あのさゆんゆん。そのさん付けやめてくれない?」

「え?」

俺の言葉にゆんゆんは目を丸くする。

「折角仲間になったんだ、もっとこうしたしげな感じでいいんだ。滅、お前もだ」

「なに?」

「俺の名前はゼロワンじゃない、サトウカズマだ。お前も今となっては俺の仲間なんだからな、ちゃんと名前呼び合いたいだろう?」

「……いいだろう」

滅は仏頂面ながらも了承してくれた。で、ゆんゆんはというと、な



んかもしもじしている。

「ど、どうしたゆんゆん。そんなもしもじして？」

「え、えっと、私男友達って作ったことがないから……その呼び捨てとか緊張しちゃって……だ、だからその……!!」

ゆんゆんはもしもじしていた俯いていた顔を上げて上目遣いで、  
「か、カズマくんとかじゃ駄目ですか？」

頬を染めながら言うゆんゆんの顔に俺は鼻血が出るかと思った。

## ヤツの名はアーク

「さて、魔王軍について俺が知っている情報は全て提供した。」  
「二つ、疲れたあ……。」

迅の説明のあと、約三時間にも渡って魔王軍の戦力や幹部の正体に付いて話された。あまりに長すぎる話に俺もゆんゆんもグロッキーだ。

幹部に関しては数百年の間に代替わりしている可能性もあるらしい、だが、席は九つありその九人が魔王城の結界の維持をしているらしく、彼らを倒さなければ魔王への道は開けないらしい。

ベルディアが倒れたから、残りは八人ってわけだ。

「これで、話は終わりだよな滅？」

「いや、残念ながらもう一つだけお前に話すことがある。」

「ええ、まだあるのかよ？」

「……これから話すのは父上がこの世界に残してしまった負の遺産のことだ」

「アラタさんが残した、負の遺産？」

滅の真剣な目に疲れて床に大の字で寝っ転がっていた体を起き上がらせる。

滅がパソコンのような機器を操作すると、俺達の周りの空間にモニターが投影される。そのモニターに写っていたのは、蜘蛛のようなメカの設計図だった。

人が乗り込めそうな部分が背中にあるし、かなりの大きさのよう思える。

「なんだこれ？」

「コレって起動要塞デストロイヤー？」

ゆんゆんも起き上がり、モニターに写ったそれを見て呟く。

「なんだ、そのデストロイヤーってのは？」

「カズマくん知らないの？えっとね、暴走した古代兵器っていわれているの。コレが通ったあとには草一本残らないって……。」

「なんだ、その見方によっては魔王軍よりヤバそうなのは」

カズマくん呼びから大分砕けた話し方になったゆんゆんの説明に俺は率直な意見で返す。つてか、なんでそんなものの設計図がこんなところに……、

「まさかっ!？」

「そうだ。起動要塞デストロイヤー……コレは元々父上が対魔王軍用に国から依頼を受けて生み出した決戦兵器だ」

「なっ!？」

滅が語る真実に俺もゆんゆんも驚愕の声を上げる。なぜならば、さっきの説明から聞いた話に出てきた破壊兵器を魔王軍を倒すために生涯を費やしてゼロワンドライバークや滅達を生み出したアラタさんが作ったものとは思えなかったからだ。

「なんで、そんなものが……?」

俺の質問に滅は重々しい口調で、語り始める。

「デストロイヤーには、ゼアに並ぶ人工知能『アーク』が制御装置として組み込まれていた。アークは人の感情を読み取りラーニングを重ね。デストロイヤーの開発は順調に進んでいた。だが、人の悪意が奴を恐ろしい怪物に生まれ変わらせてしまった」

「人の、悪意……?」

「さっきも言ったが、デストロイヤーは元々魔王軍との戦い、または牽制のために作られたものだ。だから、父上はその開発を承諾した……しかし、その破壊力を知るなり父上に依頼した国の愚かな王、家臣達はそれを他国への侵略兵器のために使うと言い始めたのだ」

「そんな……酷い……。」

ゆんゆんの言葉に同意する。人を救うために生み出されたものが、兵器として人を殺すために使われようとしたなんて。それでは、あまりにもアラタさんが報われない……。

「無論、父上は反対したがデストロイヤーは既にほぼ完成してしまっていた。そんなときだった、アレが起きたのは……。」

「アレ、つてのは?」

「俺達はそれを『ダイブレイク』と呼んでいる」

「ダイブレイク?」

「人の悪意をラーニングし続けたアークは、人類はこの世界に必要な存在……寧ろ滅亡するべき種だと結論づけ、デストロイヤーの制御を乗っ取りその国を滅ぼした」

俺とゆんゆんは滅の言葉に息を呑む。

「だけど、いくら人の悪意をラーニングし続けたとはいえ人類を滅亡させるなんて結論に至るのか？」

「アークは様々な端末から人間の歴史をもラーニングした、戦争、侵略、殺人、それらをまだ人格が形成される以前に学習すればそのような結論に至るのも頷ける」

刷り込みみたいなもんか……。

「じゃ、じゃあ、まだデストロイヤーの中にはそのアークという人工知能が？」

「いや、アークは父上の手によってデストロイヤーの制御を奪われると警備用マギアの体を奪って逃走した。だが、制御装置であるアークを失った状態で動き出したデストロイヤーは既に止める方法がなかった。父上はアークから再びデストロイヤーの制御が奪われよう外部からの通信を一切シャットダウンした。そして、当時助手だったユア、フタバ、そして俺の弟、雷は父上とともにデストロイヤーに残った。」

残された、俺、迅、そして、亡は父上に事前に指示されていたかつて父上が使っていたそれぞれの研究所でいずれ現れるであろうゼロワンの資格者を待った」

「それが、俺……。」

「そうだ……アークはまず間違いなくこの数百年で独自の進化を遂げている。わかるか、カズマ？アークはお前にとって魔王軍よりも倒さなければいけない存在かもしれないということだ」

滅の言いたいことはすぐに理解できた。

「そのデストロイヤーってのは今どこにある？」

「少し待て、ゼアの自動追尾機能で常に動きを把握している」

滅が機器を弄るとモニターが切り替わり、地図が現れデストロイヤーの位置を表す赤い点が現れる。

ん?おい、ちよつと待て……。

「この地図……アクセルの街の近くじゃないか?」

「えっ!?!」

「お前がいま拠点にしている街だったな……確かに進行方向はその街に向かっているな……到達予測時間は約300時間、約12日後だ」  
「なっ!?!」

滅の言葉に俺もゆんゆんも言葉を失う。

「ど、どうすんだ、何とかしてアレを止めないと街が消えるんだろ!?!速く街に戻って対策を取らないと」

「アレを止める方法など存在しない」

慌てる俺に滅は冷たく言い放つ。

「アレには強力な魔法結界が貼られている。外部からの一切の攻撃は通らない、仮に届いたとしても足を破壊するなどしてアレを無理矢理止めようとすればアークの置き見上げである自爆プログラムが作動する、街一つくらい軽く吹き飛ばす威力だ。そして、それを回避するには頭部にある制御装置を破壊する必要があるが……あの外殻はあらゆる魔法攻撃を封じる魔封石で作られている。爆裂魔法すら意味をなさない」

「そんな……。」

滅の説明にゆんゆんの表情に絶望が浮かぶ。さらに、まだ諦めきれない俺の顔を見て追い打ちをかける。

「ハッキリ言おう、アレは動き出した時点で積んでいる。あの強力な結界を破り、無数に設置された砲台からの攻撃を回避しながら制御装置を物理手段で破壊することなど不可能だ。

お前がやるべきは今すぐに街に戻って住民を避難させること、それだけだ」

「だったら、見捨てろってのか!?!あの街には俺や迅、仲間との大切な思い出があるんだぞッ!?!」

「カズマくん、落ち着いてッ!!」

滅の胸ぐらを掴もうした俺をゆんゆんが滅から引き離す。

「いつときの感情に任せて立ち向かって、いらない犠牲を出すつもり

か？」

「クソッ……!!」

「何かないのかッ!? 結界を破壊して、無数の攻撃を回避して、この巨大な蜘蛛を止める方法はッ!!?」

「結界……結界……結界も魔法の一種だよな? そういや、アクアのスキルには魔法を解除する『ブレイクスペル』って魔法があつたよな……だけど、砲台をどうにかしないと制御装置には近づけない。」

「そうだ、もしかしたらッ、」

「滅ッ、デストロイヤーの設計図を出してくれ!」

「滅は俺の言葉で研究所の機器を操作して、空中のモニターにデストロイヤーの設計図を再び展開する。」

「ここだ! 正面の主砲門。ここに爆裂魔法を撃ち込んだとして、自爆装置は起動するのか?」

「いいや、動力室のある制御区画は動力源のコロナタイトに衝撃を伝えないために制御装置のある頭と同じ素材に衝撃を緩和させるための特殊材質が使われている。爆裂魔法を直接打ち込まれようがマジックキャンセラーが付与された魔封石で爆風であつても届くことはありえない」

「これだ……これならっ!!」

「カズマくん?」

「どういうことだ?」

「興奮した状態で右拳を左手に打ち付ける俺の姿にゆんゆんと滅が尋ねてくる。」

「滅、結界を破ることができて、あの砲門を爆裂魔法で破壊できるとしたら、ゼロワンであるの制御装置を破壊できる確率はどれくらいある?」

「……そんなことが可能だとして、ゼロワンの能力があればサブの砲門からの攻撃を避けながら制御装置にたどり着くことは可能だ。だが、パワーが足りない、シャイニングホッパーのフルパワーを持つてしてもだ」

「……駄目かッ!」

クソ、やはり魔法攻撃が聞かない制御装置を破壊することは不可能なのか……？

そう思い、諦めかけていたとき滅が俺の前に来て懐から何かを差し出しそれを俺に差し出してきた。

「だが、これを使えば話は別だ」

「コレは……？」

差し出されたそれ、マンモスが描かれた灰色のプログライズキーを受け取る。それと同時に空中のモニターが切り替わり、衛星ゼアの設計図と、巨大な人型のロボットのようなもの設計図が表示される。「ブレッキングマンモスプログライズキー……父上が大規模災害を予測して衛星ゼアに組み込んだ、大型の救助システム。それを起動させるものだ。コイツのパワーと装甲なら攻撃から耐えながら制御装置にたどり着くことは可能だ」

「滅、お前……。」

マンモスキーを受け取り、滅の目を見る。奴は右手を差し出し俺の目を真っ直ぐと見る。

「……お前は俺の弟が信じた男だ。ならば、俺もお前を信じてみるのもいいかもしれない。」

吐いた言葉は飲み込ませんで、必ず止めろ」

「……誰に言っただ。大船に乗ったつもりで任せとけ！」

俺は滅の手を握り返し、ゆんゆんと同じように正面、上、下と拳を打ち合わせる友情の証をする。

「だが、本当にそんなことが可能なのか？そこまでの力を持つプリーストとウィザードがああ街にいるのか？」

「無理でもやるさ、俺の仲間を舐めるなよ」

~~~~~

めぐみん side

「現在、この街に起動要塞デストロイヤーが向かっています」

ギルドの受付嬢のお姉さんの言葉にギルドに集められた冒険者達の表情が沈む。

当然です。起動要塞デストロイヤーは太古の破壊兵器。アレが

通った場所は蹂躪されつくされ、草一本残らないと言われている。唯一、頭を破壊すれば止まるといふ伝承が残されているけどデストロイヤーの本体は強力な結界に守られていて触れることすら叶わない。

そんなとき、集められた冒険者が呟く。

「こんなとき、カズマがいてくれたら……。」

その言葉はこの場にいる者たちの心情を代弁したものだ。

二週間前、私達の前から姿を消した私達のもう一人の仲間、ベルディアを倒しアクセルの街を救った英雄。しかし、迅という友人を失い戦うことができなくなっていた彼が突然いなくなりその時は大いに焦った。

だけど、珍しく落ち着いた様子のアクアが、

『信じてあげましょう、男の子にはこういう時期が必要なのよ』

と、とても慈愛のこもった目でそう言っていた。……誰だ、この人はと思ったのは私だけではないと思います。

そして、この空気を打ち破ったのもアクアだった。

アクアは酒場の机に乗り、一同に聞こえるように声を張り上げる。「なあに、辛気臭い顔してんのよ!? 貴方達それでも冒険者なの!? ウチのカズマさんは最弱職でもいつだって堂々と戦ってたわよ!! アイツが命がけで守ったこの街を、今度は私達がアイツが帰ってくるべき街を守る番よ!!」

……ホントにコレは誰なんでしょう。

「そうだよな……アイツには一度救われてるのにコレ以上頼るなんておこがましいよな」

「そうね、寧ろ今度は私達がカズマの帰る場所を守る番よね」

「そうだ!」「そうだよ!」

アクアの言葉に冒険者達は息を吹き返す。

「だが、一体どうする?」

「結界なんか、私が全力でやれば壊せるわよ絶対、多分、きつと……」  
ダクネスの冷静な言葉にアクアはだんだん尻すぼみになる……。

そのときだった、

「おいおい、主役を除け者で作戦会議か?」



そのとても、聞き覚えのある声にギルドにいた冒険者、職員、そして私達パーティも一斉に振り返った。

「ふう、なんとか間に合ったぜ」

「お前がもう少ししライズホツパーをうまく運転できればもっと速くに付いたんだがな」

「無茶言うな、俺は今までバイクなんて乗ったことねえんだ。寧ろ、二人乗りでよくここまで乗りこなせたほうだろ」

そこにいた二人の男性。片方は見知らない金髪の男性だったが、もう一人。かなり見てくれは変わっていたけど、私達が待ち焦がれたこの街の英雄の姿がそこにはあった。

「よっ、待たせたな。お前ら」

帰ってきた、仮面ライダー

「カズマアアアアアアアア!!」

「ぐほっ!!」

ギルドの入り口でちよつとカッコつけて皆に話しかけると、呆けている他の冒険者を残して俺のパーティメンバーアクア、めぐみん、ダクネスの三人がものすごい勢いで俺の腰に向かって飛んできた。

そのあまりの威力に吹き飛ばされアクア達ごとゴロゴロとギルドの外に転がっていく。

そして、それが止まるとめぐみんに腹の上でマウントを取られ胸ぐらを捕まれ揺さぶられる。

「一体、今までどこで何してたんですかッ!!」

「やめろっ!服がシワになるだろうが、この服結構気に入ってたぞ!」

「私達より服の心配ですか!?確かによくお似合いです、今はそれより私達の質問に答えるのが先でしょう!」

「その前に人の腹の上からどけよ、あと褒めてくれてありがとうっ!!」俺達はこの非常時になんの話をしているのか……お互いに久しぶりの再開でだいぶテンションが上がっているらしい。

「カズマくん、滅さん置いてかないでくださいよお……って、めぐみん!?!」

「むっ!?!」

ゆんゆんが息を荒げて俺達に追いついてきた。彼女とは入り口でバイクから降りたときに全力で走ってきたら気づいたら置いてきてしまっていたらしい。滅の言うとおり変身しなくてもかなり身体能力が上がっているらしい。

その彼女だが、めぐみんを見るなり固まっている。

「なに、お前ら知り合い?」

「ええつと、紅魔の里で同級生で一時期一緒に旅をしました。」

「ああ!もしかして、ゆんゆんが言ってた友だちってめぐみーむうー!」

「あぁっ!!カズマくんストップ、ストップです!」

話していた俺の口を無理矢理閉じて、話を遮る。

「いつまでやっている、デストロイヤーは刻一刻と近づいている。早く、対策を練るぞ」

そこへ、滅の冷たいお言葉が飛ぶ。

「……そういえば、お前は誰だ?」

「俺の名は滅、迅の兄だ」

ダクネスが今までのことをずっと傍観していた滅に尋ねると、その自己紹介に皆の顔に驚きの色が浮かぶ。そういや、ダクネスとめぐみんは滅のことを迅から聞いてたな。

「では、カズマは……」

「ああ、紅魔の里にあるかもしれないっていうアラタさんの研究所に行ってきた。ゆんゆんとは途中で偶然あつて案内を頼んだんだよ」

「それだけですか?」

「はあ?」

「彼女とは本当にそれだけですかと聞いているんです」

何故か鬼気迫る顔で俺を見つめるめぐみんに間の抜けた声が漏れしてしまう。だが、下手な回答はできそうにない。何故なら、興奮すると紅い輝きを放つという紅魔続特有の瞳が爛々と光を放っていた。

「あとは、まあ……友達つてか、仲間になった、だよな、ゆんゆん?」

「は、はいっ!!」

「………そうですか」

ゆんゆんの元気のいい返事とは裏腹にめぐみんはとんがり帽を目ぶかにかぶつてギルドの中に戻っていつてしまった。

「どうしたんだ、アイツ?」

「今のはカズマが悪い」

「なんでっ!?!」

何故か、俺は二週間ぶりにあつた愛するべき仲間にごミを見る目を向けられた。

~~~~~

ギルドでの作戦会議を終えると、各々が準備をしている中俺は正門

から少し離れた場所で剣を地面に突き立てて突っ立っているダクネスのもとに来ていた。

「ダクネス、何してんだ？」

「ルーカズマか、やはり少し違和感があるなその姿は」

「まあ、な……。」

まあ、二週間前にいなくなった俺が10cmも伸びればそりや違和感が出るってもんだよな。

「で、お前はこんなところで何してんだよ？そこにいると、俺の巻き添えを喰うぞ。はっ、寧ろそつちが狙いか!？」

「違うわっ!!いや、確かに考えなかったわけではないが……私はそれ以上にこの街を守るといふ使命がある。ギリギリまでここを離れるつもりはない。」

「なんで、そこまで……?？」

俺の質問にダクネスはフツと笑うと懐からなにかの紋章をかたどったようなペンダントを俺の前に出す。

「私の本当の名はダステイネス・フォード・ララティーナとってな。そこそこ力のある貴族の娘だ」

「お嬢様ってことか？」

「?あまり驚かないのだな」

「いや、ぶつちやけ、だから?って感じだな。なんだ?お前は俺にララティーナお嬢様とでも呼んで貰ってヘコヘコして欲しかったのか?」  
「その名で呼ぶなっ!!ルーしかし、そこまで動じないとそれなりの覚悟を持って打ち明けた私がバカのようにではないか」

今更、何言つてんだコイツ。お前は立派な脳筋だろうが、危ない方向も持ち合わせた。

「何処かで罵倒された気がする」

「ブレねえなあ……まつ、お前がどこの大貴族様だろうと然して関係ないさ、お前は俺の仲間。それだけわかってりゃ、十分だよ」

そもそも、俺のパーティにはリアル女神も混じってるし、めぐみんは紅魔族で爆裂狂、迅だつてヒューマギア。今更キャラの一つや二つ増えても動じる俺じゃないさ。

「まつ、そういうわけだからこれからもよろしくな」

「ああ、こちらこそ」

俺は右手を差し出し、握手を求めると握り返し、拳を打ち合わせて友情の証を  
取り、ダクネスが手を握ると握り返し、拳を打ち合わせて友情の証を  
する。

「これは……?」

「俺の先輩が使ってた友情の証だ。俺にとっては仲間の証、かな?」  
「なるほど」

「まつ、そんなわけだからよろしくな。ララティーナ」

「その名で呼ぶなっ!!」

~~~~~

「……………」

「おい、めぐみん。いい加減、機嫌直してくれよ」

次に訪れたのはめぐみんの元だったのだが、なんかツンケンしてて  
俺と目を合わせようとしない。

「まあ、だ、へそ曲げてんのか?めぐみん、そんなに俺の身長が伸びた  
ことが不服か?いくらひがんだところでお前の身長は伸びないぞ」

「違いますよつ、そんなことで不機嫌になりませんよ!!普段どんな眼  
で見てるんですかカズマはッ!」

「危険なロリっ娘」

「上等です、爆裂魔法を放つ標的を今ここで変更しましょうか?」

「冗談だよ、冗談。——ゆんゆんとなんかあったのか?」

「——まあ、それも多少あります。だけど、そのことに関してはそこ  
までではありません。あの娘は変な男に騙されやすい体質なのでカ  
ズマのような友人ができたのは喜ぶべきです。」

「どういう経緯があつて、『カズマくん』などというしたしげな呼び方  
になったのかはあとでたつぷり追求するとして」

「今、ものすごい寒気がしたんだが……一体どんな追求するつもり  
だ、コイツ……!!」

「——でも、少し悔しいんです」

「悔しい?」

「私達がパーティーを組んだのは、迅よりも早くても、紡いだ絆は迅のほうはずっと強くて……それに、カズマが落ち込んでるときに立ち直らせられたのも私達じゃなくて、クリスやウイズ、それにゆんゆんじゃないですか……私達はカズマに何もしてあげられてない」

なるほどな、確かに……同じ状態になれば俺もそんなふうにしたかもしれない。だけど、めぐみの言ってるそれは大きな間違いだ。

俺は、めぐみのとんがり帽子の上から頭に手を乗せて、出来るだけ優しい手付きで頭を撫でる。

その行動にめぐみんは戸惑う、

「あの、なんですか……子供扱いならやめてください」

「めぐみん……俺はな、お前達がいたから折れずに要られたんだ」

「え？」

「お前達に胸を張って会いに行きたい……その思いが俺を支えてくれたんだ。だから、お前達は俺にとって十分すぎるくらい大事な存在なんだよ」

滅と土さんとの戦いで俺が立ち上がったのはアクセルで待つてくれているこいつ等の為でもあった。いつもなら、照れくさくて言えないけど、こういうときくらい言わなきゃ駄目だよな。

俺は手をめぐみんの頭から両肩に置き直し、片膝を付いて視線をめぐみんいに合わせる。

「……めぐみん、俺を信じて待つてくれてありがとな」

「~~~~ツ!!カズマツ、貴方一体どこでそんなテクニク身につけてきたんですかつ!?!」

「なんのことだよ?」

顔を真っ赤にしてわけのわからないことを言っている彼女の言葉をスルーして右手を差し出す。

それを握手だと受け取ったのか、そっぽを向きながら手を差し出してくる。俺はその手を握り、もはや慣れた手つきで握り返して拳を数回打ち合わせた。

~~~~~

「よっ、アクア」

俺は最後にアクアのところに訪れる。この作戦の最大のキーはアクアが結界を破壊できるかどうかによるからな。アクアは俺の顔を見るなり唇を尖らせて、

「ったく、今まで何してたのよヒキニート。女神であるこの私をほったらかして……ちよつと、心配したじゃない」

この人は一体誰だろう？まるで乙女のように顔をそむける姿にとっても俺が知っている駄女神とは思えなかった。それだけ、心配かけてちまったってことかな……。

「で、紅魔の里の研究所では何か見つかったの？」

「ああ、時間はかかるが迅の修復が可能だとわかったよ」

「ウソツ、ホントに!?良かったじゃないっ!!」

「ま、いいニュースだけじゃないんだけどな……。」

「どういうことよ？」

一応、アクアはこの世界の女神だし話しておいたほうがいいよな……。アークは人類の滅亡を狙ってるんだから。

取り敢えず、できるだけかいつまんでアークの正体について話した。

「人類滅亡を狙う人工知能ねえ……たしかにほつといったら魔王軍に並ぶ脅威になるでしょうね」

「だよなあ。んで、最悪の場合が魔王軍とアークが繋がってたらしい」

「ありえない話じゃないわよねえ……どっちも人類が邪魔なのは間違いないでしょうし」

滅もその可能性を危惧していた。もしその仮設が正しければ、ほぼ間違いなく幹部クラス。確実に俺と戦う日が来る。

「で、どうなの？戦えるようにはなったの？」

「ああ、滅と先輩に喝を入れられてな」

俺の先輩というワードにアクアが目を見開き、

「先輩って、アンタまさか本物にあったの!？」

「ああ、しかも二人」

絃汰さんと士さんにあつた証拠である鎧武とデイケイドのプログ

ライズキーを持ちながら返す。

「げっ、よりにもよって世界の破壊者じゃない!!アンタ、何か言われなかったか?」

『頼むから俺にこの世界を破壊させないでくれよ』って言われたよ、訳わからん」

あの人の言い方だと俺の行動次第であの人はこの世界を破壊すると言ってるように聞こえた。アクアも顎に手を当てて少し考えるような素振りをしたがすぐに考えるのをやめた。まあ、コイツの知力じゃわかるわけ無いか。

「……まあいいわ、今はデストロイヤーを倒して街を守るわよ。折角願の屋敷を手に入れたのに潰されたら溜まったもんじゃないもの!!」

「屋敷?」

「あっ、コレ黙ってなきやいけないんだっ……なんでもないわ、なんでも!と言うかあとでわかるから」

「あっ、そう……。」

後でわかるって言ってるし。取り敢えず、今は言及しないでおい

た。

「まっ、でもこれはやつとかなきやな」  
俺は他の二人と同じようにアクアに右手を差し出す。流石に、仮面ライダーを知っているアクアはその意図を悟ったらしい。

「フォーゼのやつよね、これ?全く、女神の手を握るなんて一生できるかどうかかわからないのよ?そのことわかってる?」

「ああ、でも少なくとも俺が魔王を倒すまでは握れるところにあるだろ?」

「ホント、あのヒキニートが立派になっちゃって……。」

アクアは呆れたような笑みを浮かべて俺の手を握り、友情の証をした。

~~~~~

「来たか……。」

ついにデストロイヤーが街の正面まで姿を表した。



「アクアツ、準備はできてるよなあ!!」

「誰に言つてのよ、カズマツ!!もう準備万端よ!!」

自信満々に言うアクアの体に羽衣が現れ杖の先にある蓮華のような花が咲き誇ると、その背後に六つの魔法陣が展開される。

『セイクリッドオオオオオオオ・ブレイクスペル』ツ!!」

魔法陣から放たれた閃光がデストロイヤーの結界にぶち当たると、しかし、その光と結界は拮抗していて壊れる様子がない。

「アクア!! 踏ん張れツ!!」

「うう……うおおおおおお!!」

アクアの光が一層力を増した輝きを放ちデストロイヤーの結界にヒビが入る。その亀裂は徐々に大きくなり、そしてついに、パキンツというガラスが割れるような音で完全に砕け散った。

「めぐみんツ、頼むぞ!」

「はいっ!!」

めぐみんは俺の指示を受けて爆裂魔法の詠唱を始める。

「黒より黒く、闇より暗き漆黒に我が真紅の混淆を望みたもう、覚醒のとき来たれり無謬の境界に落ちし理、無行の歪みとなりて現出せよ!!」

詠唱が進むに連れ、彼女の周りに何重にも重なった魔法陣が現れる。そして、ついにその杖が振り下ろされる。

『『エクスプロージョン』ツツ!!』

めぐみんが放った爆炎がデストロイヤーの主砲門を粉々に破壊した。コレでようやくアレに接近ができる。

「よしっ、二人共!!ここからは俺に任せろ」

「任せたわ（ました）よ、カズマツ!!」

「支援は私達でやります!」

「頑張つて、カズマくんツ!」

「行けっ、カズマ……!」

魔法職たちを纏めているウイズ、ゆんゆん、変身した滅の激励を背中に受けながら、俺は滅が作ってくれたプログライズキーを簡単に取り外し出来るバングル、その鎖の先につけてあるマンモスキーを外

し、右手で構えてスターターを押す。

『Press!』

『Authorize!』

オーソライザーにマンモスキーを翳すと、空中に巨大なマンモスのようなメカが現れる。衛星ゼアに搭載された巨大ユニットが『衛星フォーム』から転送用の『ジェットフォーム』になって転送されたのだ。

「二で、ゲケエエエエエ!!」

デストロイヤー程ではないが、その巨大なメカに冒険者（特に男性冒険者）が声を上げる。

「変身!」

『Progrize!』

キーモードにしたマンモスキーをドライバーに押し込むと、ユニットから照射された光でライジングホッパーに変身すると、そのままユニットの内部に転送される。

『Giant Waking! Breaking Manmoth!  
Larger then life to crush like  
a machine.』

俺がコックピットに転送されるとユニットが『ジェットフォーム』から、人形型の仮面ライダーゼロワンブレイキングマンモスへと変形する。

「二うおおおおおおお!!!」

マンモスのような巨大な爪を持つ足に、マンモスの顔をモチーフとした胸装甲、そのあまりの迫力に男性冒険者達（一部の女性冒険者）から凄まじい歓声上がる。

『必ずこの街を守る! 仲間の夢のために前に進むと、迅に誓ってきたからな!』

ここからが、俺の見せ場だ!

ライメイ轟く

『よしっ……いくぞおおおおおおお!!』

ブレイキングマンモスに搭乗した俺は、ズシンズシンという派手な足音とともにデストロイヤーまで駆け出す。凄い、まるで、ブレイキングマンモスが自らの体のように自由自在に動かせる。

デストロイヤーが近づいてくる俺を確認したのか、めぐみんの爆裂魔法で吹き飛んだ以外の砲門が一斉に俺に照準を合わせ凄まじい数の魔力弾やレーザーが俺に向かって放たれる。

『ハアッ!!』

俺はコックピットからブレイキングマンモスを操作し、両手に装備されたブレイキングマンモスのシールドユニット、マンモスキーを模した『マンモスプレッサー』でガードしながら突っ走る。だが、コイツの本当の使い方は脚に装備し、ブレイキングマンモスの超重量を最大限に活かすプレスによる必殺技だ。

この砲撃とレーザーの雨をかくぐりながら必殺技を放つのは厳しい。

だが、それは俺一人の場合だ。

その俺の考えに答えるように、俺の背後から無数の紫色の矢が放たれ弾丸やレーザーを相殺する。

『……カズマ、聞こえるか?』

「滅か?」

コックピットの空中に画面が浮かびそこに変身した滅が映し出される。その背後で彼が纏めていた魔法職組が無数の魔法を放つ姿が見えた。

『デストロイヤーからの攻撃は俺達で可能な限り相殺する。お前は一刻も速く頭を潰せ……!!』

「了解っ!!」

滅の指示を受け、俺はドライバーに装填されていたマンモスキーを押し込む。

『Breacking Impact!』

腕のマンモスプレッサーがデストロイヤーの上空に射出される。俺はブレッキングマンモス更に上空へ跳躍し、巨大化したマンモスプレッサーを踏みつけ、まるで隕石のような速度でデストロイヤーの頭部めがけて落下していく。

『うおおおおおおおおおお!!!』

その重量の乗ったプレスはデストロイヤーの頭をもぎ取り、制御装置ごと大地を大きく砕いた。

ブ  
レ  
イ  
キ  
ン  
グ  
イ  
ン  
パ  
ク  
ト

制御装置を破壊され凄まじい爆炎とともにデストロイヤーは機能を停止した。

「ふう……。」

大仕事が終わわり、一息ついて落ち着いていると再び滅からの通信が入る。

『デストロイヤーの沈黙を確認した。研究所での作戦の通りこれから内部に侵入する』

「了解」

俺はかねてからの作戦の通りドライバーからマンモスキーを抜き、ライジングホッパーとなってデストロイヤーの制御区画に飛び移りながら、研究所で滅と打ち合わせた作戦を思い出す。

~~~~~

『制御装置の破壊は説明したとおり至ってシンプルなものだ。だが、止めて終わりというわけにも行かない。父上の技術が二度と悪用できないようデストロイヤーは跡形も残らないように廃棄する』

『あんなデカイもんを、どうやってだよ?』

『元々、デストロイヤーは魔王軍を倒した場合新たな戦いの引き金にならないようそれぞれの脚にロケットが内蔵されており、最終的には宇宙に飛ばす設計になっていた。アークのせいで使用不能になってしまったがな。お前のライズフォンにそのプログラムを復活させるプログラムをインストールさせた』

『ここってファンタジーの世界だよね？アラタさんだけ現代的にさせてんだよ!?……まあいいや、つまり、内部に侵入してそのプログラムをインストールさせるってことか？』

『ああ、だが、内部にはアーク対策として全自動で動くトリロバイトマギア共が無数にいる。下手な犠牲を出さないために俺とお前の二人だけで乗り込むぞ』

『了解、迅のもう一人の兄貴も連れ出さないと。それに……その、アラタさんや助手の二人も』

『……ああ』

~~~~~

スタツとデストロイヤーに着地し、思考をデストロイヤーの内部に移す。

「おお、いるいる……いやあ、手厚い歓迎だなあ」

侵入者でる俺をいち早く検知し、無数のトリロバイトマギアが現れる。

『『侵入者、排除!!』』

「上等だ、やれるもんならやってみろ!!」

俺はアタツシユカリバーを構えながらマギア達に向かって駆け出す。ここはあらゆる通信が効かないからな、ライダモデルの呼び出しも当然できない。ライジングホッパードでやりあうしかないが滅に鍛えられてライジングホッパードでも十分戦える。お陰で帰ってくるのギリギリになったけど。

マギア達は向かってくる俺に無数の拳銃を向け銃口をこちらに向ける。俺はその弾丸の雨をアタツシユモードにしたカリバーで防御しながらかまわず突っ切る。

『Kababab Strash!』

マギア達の懐に入りこむと再びカリバーを展開し、あたりのマギア達を一気に破壊する。そこへ、

『Kaban Shoot!』

「滅かつ!」

空中から無数の紫の矢が放たれマギアを一掃する。そこにアイツ専用のマシン、ライズステインガーに乗って滅が現れる。まさか、デストロイヤーの脚をバイクで駆け上がったのか、こいつ……?」

「にしてもっ、キリがないなっ!」

「ああ……だが、このマギア達はハッキングを受けないように完全に自動制御だ。倒す以外に道を開く方法がない」

「つうか、お前の弟はどうしたんだよ?ここにいるんだよな!」

口を動かしながらマギア達を倒す俺達。だが、一向に敵が減らない。ここ、どんだけマギアがいんだよ。

そう思っていた矢先だった、

『Zetumetu Dystopia!』

どこからか放たれた赤い稲妻がマギア達に降り注ぎ、感電したマギア達が一斉に爆散する。

「今のは……。」

雷が放たれた方向に視線を向けると、そこにいたのは、

「赤い仮面ライダー?」

そこにいたのは、腰に迅や滅と同じフォースライザーを腰に装着した。赤いライダースーツに黒い装甲を纏ったライダーだった。

「やつと来やがったのか……何年待たせるつもりだったんだ、まったく」

赤いライダーは不怪訝な声を漏らしながらフォースライザーのアンカーを戻し、キーを抜いて変身を解除する。変身を解除するとそこにいたのはオレンジ色の作業服のような服を着た茶髪のイケメンだった。

「息災で何よりだ、雷」

「この状況でよくそんなのんきなことが言えんなあ、滅ツ!!雷落とされてえのか!」

まるで、ヤクザのように、話しかけてきた滅にガンを飛ばす男。今

の口癖って、確か——迅が言ってた。じゃあ、コイツが、「アンタが雷か？」

「アア？そういうお前はゼロワンの資格者か、迅はどうした？ドライバーを渡したアイツがなんでいない？」

「迅は……。」

雷の質問に俺は目を背けてしまう。そうだな、滅は事前から知ってたが雷はずっとここにいたんだから迅の事を知るわけがない。

「どうした？さっさと答えろ」

「迅は魔王軍の幹部からコイツを守って破損した。今は俺の研究所でリペアの最中だ」

言い出せない俺に変わって滅が雷の質問に答えた。

俺は雷の顔を直視できず、雷の次の言葉を待つことしかできなかつた。殴られる覚悟くらいはしておいたほうがいいと考えていると、雷に襟首を捕まれグイツと顔を近づけてきた。

「おい、その幹部ってやつは倒したんだらうな？」

「え？」

予想外な質問に俺は呆けた声で返してしまった。

「倒したのか、倒してねえのかハッキリ答えろツ！雷落とすぞツ！！」

「はっ、はいっ！！迅に代わって倒させていただきましたツ！！」

「……………そうか」

「なんだ、殴られるとでも思ったか？アイツの犠牲をお前が無駄にしてたらそうしてたが、きっちりケジメをつけたならそれでいい」

俺が雷の気迫に気圧されて答えると雷は服を離してデストロイヤーの内部へと歩を進める。そして、少し離れると首だけ振り向いて、一言呟くように尋ねてきた。

「——俺の弟は強かったろ？」

「ツ！ああ」

そういつて堂々とした態度で歩いていく背中俺の目からはとてもかっこよく見えた。

「付いてこい、お前らがここに來たってことは発射プログラムを起動させるためだろ。——その前にお前らには行かなきゃならないと

「ころがある」

「何処へつれて行くつもりだ？」

「お前にとつても馴染み深い奴らが眠ってる場所だよ」

「ツ！まさかつ……!？」

滅が珍しく驚愕を表情に出した。滅にとつても馴染みの深い奴らが眠ってるって……一体。



## ゼロワンのルーツ

雷の案内で俺達はデストロイヤー内部の通路を歩いていった。

「なんか、雷にあつてからマガリア達が襲つてこなくなつたな」

「当たり前だ。俺まで排除の対象になったら何百年もここに要られるわけねえだろ。俺は排除の対象にならないように作られてる。その俺と一緒にいる以上、問題はないとマガリア達は認識したんだよ」

雷は俺達を先導しながら、簡単に説明する。だが、やがて通路の奥、巨大な扉のある部屋にたどり着いた。

「ここだ。ここに、アイツらは眠つてる。制御装置もこの先だ」

「一体誰が……ここにはもう生きてる人間なんて」

「ああ、本来ならありえねえ。こんなところで数百年も待つてりやどのみち骨しか残らない、たとえ生きてるとしてもこんな場所にいたら精神が先にお陀仏だ。だから、眠つてるのさ、親父にとって命よりも大事な二人がな」

そう言つて、雷はその重い扉を開く。

そこは、今までの古ぼけた廊下とは違い清潔感のある白で統一されたホコリ一つないような部屋だった。

「随分きれいな部屋だな……」

「当たり前だ。この部屋は数百年誰も入つてないからな。そら、そこにいるぜ」

雷が顎で示した先には人一人入れるくらいの大サイズのカプセルのような装置が二つ置いてあつた。なんか、あんな感じの装置を映画で見たことがある。まさか、アレって……。

「コールドスリープシステム、完成していたのか……」

「コールドスリープって……!」

滅の呟きに俺は過敏に反応する。コールドスリープってアレだろ？ 体を冷凍保存して生きてたままものすごい時間を眠つたままでいられるって奴だろう。

「……親父は自分が死んだあとゼロワンを支えられる存在を未来に残そうとこのシステムを研究していたのさ。俺達ヒューマガリアには

できない事をしてもらうためにな。コレを使えば、自分だけでも生き残ることはできただろうに」

「じゃあ、あの中には……」

「ああ。親父にとつて娘同然だった二人だ」

雷が壁に取り付けられたパソコンのような装置を操作すると、冷気とともにカプセルの蓋が開く。

「……ようやくわかった。なんで、このデストロイヤーの内部にはとんでもない数のトリロバイトマガアがいたのか。全部自立型ってことはその調節は一つ一つをアラタさんが整備したってことだ。全てはもしものとき、この二人を守るためだったわけか。」

カプセルの中身を見ると、そこには二人の少女がいた。一人はパーマヘアの鋭い目元の少女、そしてもう一人は長い髪のクールそうな見た目の少女。

雷はパーマヘアの少女のカプセルの傍らに座り、雷が肩に手を回し起き上がらせる。

「うっ、うう……。」

その時、少女が目を覚ましたのか瞳を薄く開ける。

「あに……き……？……それに、滅か……。」

「立てるか、フタバ？」

「……いつまでもガキ扱いすんじゃないやねえ。相変わらず過保護だなアンタは」

滅の質問に男勝りの口調で答え、雷の肩から抜けようとしたフタバと呼ばれた少女だったが、すぐに足から力が抜けたように崩れ落ちそうになるがそれをギリギリのところまで滅が受け止める。フタバはそのまま気を失ったのか、動かなくなる。

「数百年眠っていたんだ、肉体がかなり衰弱してる。しばらく、リハビリが必要だな」

そうやって、滅はフタバを背中におぶる。

「重く……なったな……。」

そうやって背中におぶった彼の顔はとても、優しげだった。二度と会えるはずのなかった家族なのだから当然だ。そして、その傍らに俺

の親友、迅の姿が見えた気がした。

「……………迅、お前がここにいたらきつとそんな顔をするんだろうな。」「ゼロワン、こいつら二人のことは俺と滅に任せろ。お前は制御室に迎え。そんでお前に夢を託した人間にあって来い」

「……ああ、わかってる」

もう一つのカプセルで眠っていたユアという髪の長い方の少女をおぶりながら雷が俺に指示を出す。

この先に、あの人がいるのか……………。

俺は、部屋の奥にある最後の部屋に手をかけ、それを押し開く。

中は滅の研究所によく似た場所で様々な機器が存在した。そして、その中で最も目を引く存在大きな石製の椅子に座った白衣を着た白骨死体。

「はじめまして、アラタさん。ゼロワンの変身者サトウカズマというものです」

変身を解除し、頭を下げる。雷のお陰でもう戦う必要はなくなったからな。

頭を上げると、その手に大事そうに持っているものが目に止まる。

「これは……………日記か？」

どうやら、それはアラタさんがこのデストロイヤーの制作を頼まれたノイズという国で働いていた時期の頃からの日記のようだ。

「……………ごめんなさい」

アラタさんに謝罪しつつ、中身を読む。

二人の助手、四人の子供達とともにいずれ訪れる明るい未来についての希望が綴られていた。だが、後半辺りからデストロイヤーを兵器として使おうとする国王や国の人間への苦悩が読み解けた。そして、デイブレイクの日からアークとデストロイヤーを生み出してしまった己の罪への懺悔で日記の最後のページが締めくくられていた。

そして、なにより俺が驚かされたのは……………デストロイヤーの暴走のきっかけをアークにラーニングさせた国王たちへの恨みの言葉が一切なかったことだった。

「アラタさん……………貴方は彼らを憎まなかったんですか？悔しくなかつ

たんですか？自分が生み出したアークを、怪物にした人間たちが死んでいい気味だと、少しも思わなかったんですか？」

俺は帰ってくるはずのない質問を物言わぬ屍に問いかける。

その時だった、日記の中か一つの茶封筒が溢れる。

「これは……日本語だよな……。」

この腐敗率の薄さから見てこの場で書いた謂わばアラタさんの遺言書。そして、茶封筒に綴られた文字は、

『我が夢を継いだ者へ』……。

これって、ゼロワンの資格者の意味だよな。まさか、この場に俺が来ること計算ずくだったということなのか……。

「敵わないなあ……。」

封筒の封を切り、中に入れられた手紙を読み始める。

『我が夢を継ぐものへ、まずは私の罪を清算してくれたことを感謝する。そして、夢という重責を背負わせてしまったことを深く謝罪する。さらに、また新たな重荷を背負わせることを重ねて詫びる。』

単刀直入にいうと、私の助手ユアとフタバのことを頼みたい。

彼女たちは私にとって滅や迅と同じように本当の娘のような存在だった。そして、私がゼロワンを生み出す切っ掛けでもあった。あの子達が生まれたのは、私が自らの力に限界を感じていたときだった。

我が友キールとその妻、アンナの娘。始めてあの娘達を抱き上げた日のことを今でも昨日のことのように思い出す。

あの娘達を抱き上げたとき、私は思った。栄誉や名声などどうでもいい。この娘達の、ひいては全ての人の未来のために希望を残したい。そこからは速かった、残りの人生を全て未来のために捧げようと。私はゼロワンを残した。』

その願いのためにこの人は……。

『私はあの子達の親代わりとして何もしてやれなかった。あの娘達の世話はみな迅や雷に任せっきりだった。』

あの娘達が目覚めたとき、そこはもはや別世界と言っても変わりない、そんな世界にあの娘達を残してしまうのも申し訳なく思っている。

だから、君に頼む。どうか、あの娘達を幸せにしてあげてほしい。一方的ですまないがどうか、頼む。』

はあ、こんなことを頼まれたら断れるわけがないじゃないか……。

「出来る限り、頑張らせてもらいます」

俺はこの人からも多くのものを貰った、ゼロワン、プログライブキー、迅という親友に滅という仲間。せめて、それくらいのお返しはさせもらいます。

俺はアラタさんの遺骨を彼が着ている服で包んで持ち運びやすくする。せめて立派な墓を立ててあげたいからな。

そして、制御装置の背後にあるオーソライザーにライズフォンを翳すとビーっビーっという凄まじい警告音が響く。

『発射シークエンスに移行！発射シークエンスに移行！発射まであと十分、搭乗者は速やかに退避してください』

「じゅ、十分ッ!？」

ちよつと短すぎませんかね、アラタさん!？」

~~~~~

「な、なんとか、間に合った……」

「非常口があつて助かったな」

「全くだ」

俺達は雷の案内でデストロイヤーに用意されていた非常口から脱出し、発射の風圧に巻き込まれないよう遠くから発射の準備を始めたデストロイヤーを見ていた。足が変形し、中からロケットが現れ空へ飛ぶ準備を始めていた。

「ここってホントにファンタジーの世界だよな？」

そんな疑問をどうしても抱いてしまう俺は悪くないと思う。

そして、ついにデストロイヤーが空に飛び立った。

「……あばよ、親父」

そうだった雷の横顔はどこか安心したようだった。

彼にとって長い間背負って来た重荷を降ろせた瞬間だった。

## イツトキの休息

「な、なあ、そろそろ勘弁してくれないか？」

「駄目ですよ、二週間も私達を心配させといてこの程度で許されると思ったら大間違いです。」

「めぐみんの言うとおりね、今日のアンタは荷物持ち&財布係よ」

「今日って、お前らここ3日近く毎日のように俺を連れ出してるじゃねえかッ！」

俺は現在、アクセルの街で無数の荷物が入った袋を持たされアクア達の後ろを歩かされていた。いや、正確に言えば今アクアに言ったように既に三日近く毎日のようにこんなことをさせられている。

「カズマくん、大丈夫ですか？」

「ありがとう、ゆんゆん。君だけだよ俺に優しいのは」

晴れてウチのパーティに正式に加入した俺の仲間ゆんゆんの言葉に涙が出そうになる。確かに勝手に街を出て行って心配させたのは悪いと思うけど、大きな試練を乗り越えた俺にもう少し優しくしてくれてもいいんじゃないか？

「ゆんゆんッ、ウチのカズマを甘やかさないでもらいますようか」

「ウチのって、今となっては私もカズマくんのパーティメンバーなんだからそれくらいいいじゃない！」

なんて言ってる間に二人が口論を始める。なんかこの二人、色々あったらしくことあるごとにこんな感じだ。

——まあ、悪いことだけじゃなけどさ。

俺は俺達より少し離れたところを歩く四人組に目を向ける。

「フタバ、ユア、ほらさっきの屋台で買った串肉食つとけ。お前ら栄養が足りてないだろ」

「ああ、少しでも早く回復するためにも適度な運動と栄養は必要だ」

「だから、いつまでもガキ扱いすんなったろ!!」

「フタバ、街なかで叫ぶな恥ずかしい」

どこかぎこちなく見えるが、傍から見たら微笑ましい一家団欒だ

な。

あの日、デストロイヤーを破壊してその最後を見送ったあの日から既に一週間がたとうとしていた。

あの戦いの後始末のあと、俺はギルドの皆に今回の一件について説明した。デストロイヤーが生まれたきっかけ、そしてその中で数百年眠り続けた二人の少女についても。デストロイヤーは存在自体が災害とも言われる破壊兵器、そんなものが破壊されたとなれば国中のニュースになる。その中で眠っていたという二人を攻める声も上がるかもしれない……そこで俺は今回の一件はアクアが結界を破壊、めぐみんの爆裂魔法で跡形もなく消し去ったという顛末でギルドは上層部に報告することとなった。

本来、報告の虚偽は厳罰ものだ。だが、アラタさんの遺言書や日記の内容を聞いたギルド職員、冒険者は号泣、彼女たちを街の住人として暖かく迎えることが決定した。

本来なら少し難しいがデストロイヤーの討伐の報酬を当分分配と、貴族のダクネスにほうぼうに手を回してもらい隠蔽はうまく行きそうだ。ここに彼女だけがないのはそういう理由である。最初は悪いと思っただが、

『今回の件、いや、ベルディアとの戦いでも私は何もできなかったからな。コレくらいはさせてほしい』

そう言って実家のダステイネス家に帰っていった。因みにそれを知るのは俺と滅と兄貴だけだ。他のメンバーには内緒にしてくれと言われたからな。しかし、アイツは常にああいう態度でいられないものかね……。

多分、一週間くらい帰ってこれないらしいけど……そのときはまあ、アイツの望むようにしてやるか。

「カズマ、カズマ！」

「カズマだよ」

「今度は服を買いに行きましょう。フタバ達の私服も買わなければいけませんからね」

「ハア、へいへい……。」

めぐみんの言葉からわかると思うが二人は今、俺達の屋敷で暮らしている。そう、屋敷でだ。

なんでも共同墓地の近くにある屋敷でウイズの知り合いの不動産屋が悪霊が住み着いているせいで誰も住んでくれないので除霊をしれくれるならただで住んでいいと言ってくれたらしい。アクアは回復魔法と対アンデットに置いては最強だからな。

「……………」

ふと振り返るとパーマの方の少女、フタバと目が合うがすぐにそらされてしまう。もう数日一緒に住んでるがずっとあんな感じだ。俺、なんか嫌われることしただろうか？

もう一人、姉の方のユアは割りときさくに話しかけてくれるんだがな。

「しっかし、まさかあの二人も仮面ライダーとはねえ……………」

俺はデストロイヤーの最後を見届けた日、滅と兄貴と話し合ったことを思い出す。

~~~~~

フタバとユアを空いている部屋のベッドに寝かせて、雷達が話があるというから俺は割り振られた自分の部屋で話を聞聞くことになった。

「なんだこれ？」

俺は雷が部屋の机に置いた、二つのアタッシュケースの中身を見ながらそういう。滅は中身を知っているらしく、さして驚いた様子はない。

そこにはそれぞれ同じ形状の青い拳銃が収納されていた。

「こいつは『ショットライザー』。親父があの人用に作ったドライバーだ」

「ハアツ!? つてことはあの二人……………」

「ああ、無事にデストロイヤーが起動していたらライダーとして戦うことになっていた。本人たちの強い要望でな」

俺以外にもいたんだ…………人間の仮面ライダーが。

「アレ? でもキーはどうした?」



「お前が迅から貰ったキーがそれだ」

「はい？」

「ウルフキーとコングキーはフタバが、チーターキーとホーネットキーはユアが亡から受け取るはずだった。」

「だが、デイブレイクが起きちまって渡す前に離れ離れになっちまっただけだ」

ああ、なるほど……。

「まあ、どっちもゼアの許可がなきゃキーを開けないがな。お前はドライバーをつけてるから開けてるだけだしな」

「そうだったのか。そういや、お前らの妹の場所は検討つかないのか？」

「さあなあ、親父は研究成果が漏れないよう結構拠点を変えてたし。そのうちの全てをピックアップして探したら十年はかかるぞ」

「マジでか……。」

「どのみち、今のアイツラの体調じゃゼアは変身許可は出さないだろう。コレは俺達が預かっておく。キーはお前から渡してやれ。これから長い付き合いになるんだからな。」

「りよ〜かい」

~~~~~

結局、返すタイミングが見つからなくてキーはまだ俺の手の中だけだ。そろそろ返さないとな。だけど、ユアはともかく、フタバに対してはどうやって返すかあ……。

そんなことを考えながら俺はめぐみんに連れられて服屋に連行された。つうか、ここ女物の服屋じゃねえか、あつ！兄貴と滅だけ、逃げてやがる！まって、俺もそっち側に……！

そんな俺の考えは虚しく、俺は女子の服が似合ってるかどうか……彼女なしだった男にとってある意味拷問に近い仕打ちを受けたわけだ……。

だが、その時の俺は気づいていなかった。あの姉妹は思っていた以上に曲者だったということに。

## 意外なアイツの正体

「ウイズく、邪魔するよ〜!」

「あつ、カズマさん!いらっしやいませ」

俺達は服屋の次に、ウイズの魔道具店を訪れていた。その要件は、  
「ウイズ、この店ってマナタイトってあるか?」

「できれば、そこそこ上質なものと助かる」

俺の隣に来た滅が俺の言葉を補足する。なんでも、俺達の屋敷の地下にラボを作らいたいらしくその電源をマナタイトを代わりとしたらしい。電力って、魔力で代替できたんだ。ゆくゆくは紅魔の里の研究所をまるまる引越しさせたいらしい。

「はい、これなどどうでしょう?」

店の奥からもってきた鉱石、めぐみんの杖の先にもつけられている魔力を蓄積した鉱石『マナタイト』。滅はそれを吟味するように見ると、

「なるほど、ちょうどいいな。コレを五つ程頼めるか」

「はい、毎度ありがとうございますっ!」

布に丁寧に梱包し、滅に渡す。彼女に言われた代金を俺が支払う。結構高いな……。

他のメンバーは店の中を物色している。おい、アクア。ポーションに触れてやるな、聖水になるだろうが。

「ウイズ、この間は相談に乗ってくれてありがとうな」

「いえ、元気になってくれてよかったです。」

そう言うてにこやかに笑ってくれるウイズ。ああ、女神はここにいたのか……。彼女はゆんゆんと並ぶ俺のここの癒やしかもしれない。

「……前から聞こうと思っていたんだが、なぜ人間の街にリッチーが暮らしている?」

「え?」

「は?」

滅がふと漏らした声に俺、ウイズ、ゆんゆん、フタバ、ユアが抜けた声を漏らす。

「お前、なんで知ってんだよ？」

「俺達の性能を甘く見るな、人間とアンデットの区別くらいつく、それこそアンデットの王と言われるリッチーならばな。デストロイヤーの一件で率先して、力を貸してくれたことから人間に危害を加えるようには感じられなかったのでさほど気にしていなかったが」

「ああっ！そうよ、聞いてよカズマさん！」

そこへ、アクアのやつがなにを思い出したのか声を上げて話に入ってくる。そして、その口からとんでもない言葉を吐き出す。

「そのリッチー魔王軍の幹部なんですって！」

「「ツ!!」「」」

そのアクアの言葉に滅と兄貴がフォースライザーを懐から取り出す。その様子に慌てて二人とウイズの前に立つ。

「待ってくれ、二人共」

「どけっ、カズマ！」

「そいつが魔王軍の幹部なら、話は別だ。今ここで倒す」

凄まじい殺気を放つ、二人。だが、俺は彼女が悪人だとは思えない。

「だから、待ってっ！ウイズ、どういふことだ説明してくれ！」

「は、はいい……。」

二人の殺気に当てられ腰を抜かしているウイズに説明を要求する。

取り敢えず、不躰だとは思ったが誤解を産まないようにリッチーになった経緯から話してもらった。

ウイズの話を要約すると、彼女は俺達と戦ったデュラハン、ベルディアによって自分と仲間たちに『死の宣告』を喰らってしまった。他のメンバーは残された時間を悔いなく生きようとしたらしいがウイズだけは諦めきれずある悪魔と契約してリッチーになるための禁術をつかいリッチーへ、無事ベルディアを戦闘不能にして呪いを解除できたがリッチーとなってしまう手前冒険者をやるわけには行かず、初めて仲間と出会ったこの街で魔道具店を営むことになったらしい。

幹部になったのは魔王軍とことを構えるつもりはなくあくまでお互い不干渉、中立を保つためのスタンスらしい。

「……というわけだな、ウイズ」

「はい、その通りです」

俺が彼女の話をもとめ、皆に向き直り、

「聞いてくれたとおりウイズは幹部って言っても、言っちゃえば境界の維持だけのなんちやって幹部だ。討伐する必要はない」

「筋は通っているな」

「確かに人間を襲ってないなら、ことを構える必要はないか」

「確かに寧ろそんなことをすれば私達のほうが悪者だな」

「ウイズさんはリッチーなのに良い方ですねっ!!」

俺の言葉にさつきフォー斯拉イザーを構えていた滅、雷は納得しくれたらしい。ユアやゆんゆんもその話に感銘を受けたらしい。だが、ダンつと言う壁を叩く音で俺達の視線は壁を叩いた人物、フタバに視線が行く。

「お前ら本気で言ってるのかっ!!?コイツは魔王軍の幹部、しかもリッチーだぞ!人間を殺してなからうが、どのみち、人類の敵に変わりはねえだろうが!!」

「なんてこと言うんだお前っ!?!」

俺は激情をほとばしらせるフタバに怒鳴り返す。いくら、迅の妹でも言っつていいことと悪いことがある……!

「人間を襲ってないって話にしたつてこの先、どうなるかは保証なんてねえ!さらにいやあ、コイツがいる限り魔王のいる城にすらはいれねえ、だったらここつぶ潰すのが自然だろうが」

「あの……アクア様の力があれば幹部を全員倒さなくても二、三人まで減らせば十分破壊できると思います」

「魔王軍幹部の言葉を誰が信じるツ……!?!」

「……いや、デストロイヤーの境界を破壊したことを鑑みればあながち嘘でもないのだろう」

ウイズの言葉を頭ごなしに否定しようとしたフタバだったが、滅がそれを冷静な声音で否定する。俺も流石に我慢の限界が来て、怒鳴りつける。

「いい加減にしろっ!確かにウイズはリッチーだし、魔王軍の幹部だ、

「ただ、お前はそれ以外のこの人を何も知らないだろうが!!」

「ちよ、カズマも落ち着きなさいよ……!」

「そうですよ!」

段々ヒートアップし始める俺をアクアとめぐみんは宥めようとするが、フタバは尚も俺に噛み付いてくる。

「わかってんのか!? コイツがもしこの街に牙を向いたら……!」

「そのときはっ!……俺が責任を持って対処する」

俺は一度この人に助けられた。だから、この人が人間に危害を加える存在なんて考えたくない。

「それがどんだけ重いものかわかって言ってるのか!」

「わかってるっ!!」

俺達の言い争いはドンドンヒートアップしていく。俺とて、立ち直るきっかけをくれた恩人の一人である人物をここまで言われて引き下がるほど人間性を捨てちゃいない。

「その辺にしておけ」

「ここでこんなことしてたら店に迷惑だろうが」

「滅……。」

「兄貴……ッ!」

しかし、俺達の間割って入った。冷静な二人、滅と兄貴によって口論は強制的に止めさせられた。

「どちらの言い分も筋は通っている。だが、今は彼女を信じてみるのも一計だ。彼女はデストロイヤーを止めるとき率先して魔法職を纏めていたからな」

「ああ、それにだ。ホントにこの街をどうにかするつもりなら、自分から魔王軍幹部ですなんて言わねえだろ」

「フタバ、私も彼女を信じてもいいと思う。」

「姉貴もかよ……わかったよ」

フタバは兄二人と姉であるユアに云われ、引き下がる。だが、その目は全く納得してないらしくその証拠に一人店から出ようとしたとき鋭い目でウイズを見て、

「もしオレの前で妙なことをして……オレはお前を容赦なくぶつ

潰す！オレはお前を絶対に認めねえ!!」

そう言つて、不機嫌さを欠片も隠そうとせずバタンツという凄まじい音を鳴らして扉を占めながら、店を出ていった。

「……ウイズさん、私の妹が大変失礼なことを言ってしまった。アイツに変わつて謝罪する。」

「いえ……アレが普通の反応だと思えますから……」

フタバの代わりに頭を下げるユアにウイズはそう言うがいつも少し白い顔が更に青白くなったその顔色から割りと心に来てるものがあるのは俺の目から見ても明らかだった。流石のアクアもそこに追撃するほど無慈悲じゃないらしく、すごく気まずそうな顔をしている。

「俺からも謝罪する、先程の無礼な態度も合わせてな。そして出来ればアイツを許してやつてほしい。アイツのあの態度も無理はないのでな」

「どういう意味だよ、滅?」

ユアと同じようにウイズに頭を下げる滅の言葉を尋ね返すと、その答えは兄貴から帰ってきた。

「アイツの時間は数百年前からゲストロイヤーの中で止まったままなんだよ。あの頃は今よりずっと魔王軍の進撃は激しかったからな。俺達やユアもアイツラに滅ぼされた国や村をいくつも見てきた」

「……そのフタバの目から見たら形だけとは言え魔王軍の幹部であるウイズも同じ怒りの矛先の対象に当たるってわけか。」

「ウイズ、視点の違いってやつだ。アンタは心はまだ人間だと思つてる。俺の目から見たアンタは人類の敵なんかじゃ決してない。」

「……ありがとうございます、カズマさん。……わかりました、先程のフタバさんの言葉は気にしなさいことにします」

「ああ、それでいい」

そうして、俺達はウイズの店をあとにした。

「……迅、お前の妹とわかり合うのは中々に大変そうだよ。」

オレにナカマは必要ねえ!!

「ふあゝ、朝か……。」

俺はまだ少しなれない豪華なベットから身をおろし、窓を開けて体を伸ばす。昨日の買い物でようやくアクア達も許してくれ、今日は自由行動ができる。兼ねてよりやろうと思っていた生活に役立つスキルを教えてもらいに行こうと思っっている。

そして、ふと机の上に視線を向けると、いつもそこにおいてあるものがなくなっていることに気づく。

「アレ?ないっ!ないっ!?!ゼロワンドライバーがないっ!?!」

俺は慌てて机の引き出しを開けるが、そこにはプログライズキーがあるだけで肝心のドライバーがどこにもない。と言うかよく見るとキーもいくつなくなってる。おかしい、俺は確かに昨日ここにおいて寝たはず。俺は部屋を見回すがドライバーがどこにも見つからない。しかし、見慣れないものが部屋の扉に貼り付けてあった。

『果たし状?』

俺はきれいに折りたたまれてしまっている紙を取り出して内容を読む。つうか、達筆だな。

「ええつと、『アクセル郊外の平原にて待つ。必ず一人で来られたし』。名前はなし、か」

状態から見てドライバーを盗んだのはコイツと見ていいよな。

「つたく、ようやくアクア達から開放されたつてのにツ!!」

俺は文句を言いながら急いで着替えて、まだ朝も早いので皆を起こさないように指定の場所に走り出した。

~~~~~

「やつと、来たか」

その人物はゼロワンドライバーを右手に持ちながら走ってきた俺に気づき向き直る。

「やつと来たか、じゃねえよ……!!こりやなんの悪戯だ、フタバツ!!」

そう、そこにいたのはウチで暮らしている二人の姉妹の妹、パーマヘアの少女フタバだった。彼女は俺と違い、黒一式のスーツを着込

んでそこに立っていた。

「お前も、俺をゼロワンとして認めてない口か？」

滅に関しては演技だったが、コイツラは俺の戦いについて何も見てはいない。認められてなくとも仕方ないとは思っていたが、

「安心しろよ、ドライバーは返してやる」

俺の予想は外れ、フタバはそう言っただけで俺のドライバーを投げ返してくる。返してくれるのは良かったがだったらなんでコイツ、俺をこんなところに。

「ハッキリ言っただけ、俺はお前がゼロワンだろうが関係ねえ。俺が興味があんのはテメエの力だけだ」

「は？」

「オレ達姉妹はゼロワンのサポートのために生き残った。先生の死を踏み越えてな、だがオレはアークも魔王も倒せる存在なら別にゼロワンじゃなくてもいい」

そう言っただけでフタバは俺に指先を向ける。

「だから、オレと戦えゼロワン」

「何言っただけだ、お前……？」

「テメエの意見は求めてねえッ！」

「お前っ、それっ!!」

俺がわけがわからないという表情でフタバに問い返すと、懐から銃の付いたドライバー、ショットライザーを取り出した。アレは確か、兄貴が預かってるはずじゃ。

「だけど、ドライバーがあってもキーがなきゃ」

「キーならあるぜ」

そう言っただけで部屋で見つからなかったウルフとコングのキーを取り出す。

「あつ、ないと思っただけ……!!」

「コイツは俺のために用意されたプログライブスキーだ。オレが使う。」

「だけど、今のお前じゃアークは変身許可出さねえだろ……」

「関係あるか、オレがルールだ!!」

『Shot rizer!』



ドライバーを越しに装着し、ウルフキーをキーモードにするために両手で開こうとするが。

「ふんっ、ぬうううううう!!」

「開くわけねえだろ……。」

女子がしてはいけない顔でキーをこじ開けようとする、フタバに呆れたように突っ込む俺。

キーの開閉はゼロワンドライバーのベルトオーナーである俺とヒューマギアの四人しか開けないようになっている。フタバとユアはゼアの許可なしにはそれを開くことはできないと兄貴に教わった。

「なんでそこまでして、戦おうとする。俺達は仲間だろう?」

「仲間だどっ?笑わせんな、俺達はアークや魔王を倒すためだけの存在だ!そんなものは必要ねえんだよ!そのためにも力のないやつの下につくつもりはねえっ!お前がオレの上に立つのにふさわしくないのなら、オレは一人でも魔王軍もアークをぶっ潰す!」

「お前、そこまで……。」

フタバの感情に反応したように、ウルフキーからビキツという音が響く。

「まさかっ!?!」

「それが……それだけがオレの、全てだアアアアア!!」

まさしく狼のような叫び声とともにキーが開いた。

「嘘だろお……」

コイツ、プログライズキーを腕力だけでこじ開けやがった……!正直、女子の行為としてはドン引きなんだが。

『Bullet!』

「フンッ!」

『Authorize! Kamen Rider……! Kamen

Rider……!』

キーのスターターを押し、ドライバーから本体のショットライザーを外してウルフキー装填し、待機音を鳴らすショットライザーの銃口をゆっくりと上から正面の俺に向けてくる。

「変身っ!!」

『Shoot rize!』

ショットライザーの銃口から弾丸が放たれ、俺に向かって飛んでくる。

「うおおおおおおおつ、危ねえええええ!?!」

俺は限界まで体をのけぞらせギリギリ回避するが、その弾丸は不思議な軌道を描いてフタバの元まで戻っていく。

「ハアッ!」

それを拳を構えていた彼女が殴って破壊すると彼女の周りにいくつものユニットが現れ、それがライダーの装甲となって彼女の体を覆っていく。

『Shooting Wolf! The elevation in  
creases as the bullet is fire  
d.』

そして、最後に頭部を狼をモチーフとしたマスクが覆うと、その姿は青と白の狼のライダーの姿へと変身させた。

「仮面ライダーバルカン……変身完了」

「バルカン……?」

確か、バルカン砲とかいうのに使われる名前だよな。それとも、ローマ神話の方のヴァルカンの意味か?

「どうした、とつとと変身しろ」

「何言ってるんだ、お前! まだ、体だって回復してねえんだろうが!?!」

「こねえなら……こつちから行くぞッ!」

そう言っつてバルカンは俺の方に走ってきて殴りかかってくる。

「危なっ!」

「どうした? 変身しなきゃ、死ぬぞ」

まったく、なんで迅といい滅といいバトルマニアしかいないんだよ仮面ライダーってのは!?!

「こんのっ、じゃじゃ馬がっ!!」

「ぐっ」

俺はバルカンの身体を蹴り飛ばし、ドライバーを腰に装着する。

『Zeroone Driver!』

バングルの先につけられたライジングホッパーキーを外して、ス  
ターターを押して起動させる。

『Jump!』

「変身!」

『Rising Hopper!』

『Bladerize!』

ライジングホッパーに変身すると、アタツシユカリバーを展開し構  
えを取る。

「ようやく、やる気になりやがったか」

「こうなったら、やってやるよ。こっちはお前のことをアラタさんに  
頼まれてんだ、あの人が変わって不良娘を躱けるのも仕事のうちだか  
らな」

「誰が、不良娘だテメエ!」

「お前のことだよ、馬鹿野郎!!」

今ここに、世界一不毛な仮面ライダー同士の戦いの火蓋が切って落  
とされた。

オレもお前を認めない

『Flaming Tiger!』

「はっ!」

俺は遠距離攻撃が得意なフレイミングタイガーに変身し、遠距離から炎を放つ。

「ふっ!」

バルカンはそれを回避しながら、ショットライザーで弾丸を放つ。あれがショットライザー、武器として使えるドライバーってわけか。

「はああああ……ハアっ!!」

両手で作った巨大な炎をバルカンめがけて放つ。

「しやらくせえ!」

「なっ!?!」

流石に回避すると思っていたが、バルカンはその炎に突っ込みそのまま俺の懐に入る。

「迅や滅が認めた力つてのはこの程度か?」

「ぐあっ!」

ゼロ距離で弾丸を喰らい後ろに吹っ飛ぶ。

「やっぱりテメエは上に立つ器じゃねえ……! お前の下にいたんじやアークも魔王も倒すことなんざできやしねえ!」

バルカンが失望したように、腹を立てたように俺に言い放つ。

「オレはこの命をかけてでも、アークと魔王を倒す!!」

「ッ!」

『Bullet!』

バルカンはショットライザーの上部のボタンを拳で押す。

「はあああああ!!」

そして、照準を俺に合わせて引き金を引いた。

『Shooting Blast!』

狼の弾丸はタイガーの炎を避けて俺の両手両足を拘束する。そこへ、バルカンはエネルギーを充填したショットライザーを俺に向ける。

バレット シューティング

トスラブ

放たれた特大の狼が俺に喰らいついた。

「ぐあああああ!!!」

吹き飛ばされ、そのまま地面を転がる。

大ダメージを喰らいフレイミングタイガーが解除され、ライジングホッパーの姿に戻ってしまう。

「……お前と戦って一っだけわかったことがある」

立ち上がりながらバルカンを見据えて口を開く。

「あん？」

「お前は……アラタさんの夢を何一つ理解してないってことがな」

「テツメエ……!!」

俺の言葉に切れたバルカンが拳を振り上げ迫ってくる。だが、その拳は片手で受け止められた。

「なっ!?!」

バルカンは俺が片手でその拳を受け止めたことに驚きの声を漏らす。

「軽いな、お前の拳はよッ!」

「グハッ!!」

強烈なボディブローがバルカンに向かって放たれた。

「さて、お説教の時間だ……悪いが俺は究極の男女平等主義者。ここからは女だろうが容赦はしねえ、たとえ親友の妹だろうとな」

そういうわけだから、迅。悪いけど、お前の力使わせてもらうぜ。

『Winger』

オーソライザーにファルコンキーを読み込ませると、空からファルコンのライドモデルが現れる。

「迅のキーかっ!?!」

そのままファルコンキーをライズスロットに押しこむ。

『Fly to the sky! Flying Falcon! Spread your wings and prepare for a force.』

ライダーモデルがピンクの装甲へと変わりフライングファルコンに変身する。

その能力で飛翔し、一気にバルカンに接近してアタツシユカリバーで斬撃を与える。

「ぐっ！」

さらに、俺は両足でバルカンを掴みそのまま上空へと投げ飛ばす。空中で身動きの取れないバルカンのアタツシユカリバーで連続で切りつけ止めとばかりに踵落としで地面に叩き落とす。

「なんだ……この力はッ？」

「お前もライダーシステムについて研究してた身なら知ってるだろ。ライダーの力はベルトオーナーと密接に繋がってる、お前がどれだけ戦闘訓練してたか知らねえけど俺はアイツと、迅とずっと一緒に戦ってきた」

デストロイヤーを倒した今の俺の力は、滅が言うには迅や滅すら上回っているらしい。無論、シャイニングホッパーを使わなければ滅レベルにはまだ勝てないがこのことを知った滅に言われたことがある。『お前のドライバーの適性はハッキリ言って異常だ。まるで、元々お前に合わせてドライバーを作ったような、そんな錯覚すら浮かぶレベルだ』

肉体が急激な成長を遂げたのもそれが理由の一つらしい。

空中を飛行する俺にショットライザーから放たれる凄まじい数の弾丸が迫る。フライングファルコンの高速飛行がなければ確実にやられているだろう。

『Winger!』

『Changerize!』

俺は一度着地し、ドライバーからファルコンキーを抜き取ってカリバーのライズスロットにキーをセットして、アタツシユモードにする。

『Bullet!』

それを見てバルカンも再び必殺技を放とうとする。

『Shooting Blast!』

先に放たれたのはバルカンの技、だが、俺は再び展開したアタツシユカリバーを振り下ろしてトリガーを引く。

『Fullcharge!』

『Flying Kaban Dynamic!』

アタツシユカリバーから放たれた隼のライダーモデルが狼の形をした弾丸を蹴散らしそのままバルカンに向かって突っ込み爆発した。

フ  
ラ  
イ  
ン

グカバンダイナミック

「ぐっ……ああ……」

爆発が晴れると同時にバルカンの変身が解除され、そのまま地面に倒れた。勝敗の決着がついたことを確認し、俺も変身を解除した。

「……フタバ、言っておくぜ。お前が俺を認めていないように、俺も今のお前のやり方を認めない」

「ファルコンキーを右手で弄びながら、鋭い視線でフタバにそう告げた。」

「俺は夢を守るために仮面ライダーになった。だから、お前は死なせない。絶対にだ」

「なんのことを言ってるんだ?」

「まだ、わからないか……だけど、いつかは気づく、いや、気づかなきゃならない」

「……アヲタさんの夢はこいつと、ユアの二人が幸せに生きていられる世界を作ること。なのに、その夢のために彼女が命を落とすなんてあっちゃならない。」

そして、いつの日か彼女自身の夢を見つけられたら、俺は……それすらも守りたい。傲慢だと言いたければ言わせる。だけど、それが

俺がこのドライバーを持つことの意味だ。コイツ風に言えば、それが俺の全てだ。

そのためにも、

「少し頭冷やせ、バーカ」

それだけ告げて、地面に倒れたままのフタバを残して俺は家に向けて歩き始めた。

「くっそ……アイツ容赦なく攻撃してきやがって」

フタバから見えなくなったあたりで俺は張った気をとき、アイツの攻撃をモロに食らった胸を抑える。

アイツのシューティングブラストがかなり効いたらしく、全身が痛み所々おぼつかない足取りで歩く。俺じゃなかったら重症レベルだぞ。

街の門を抜けようとするで見慣れた二つの影が立っているのが見えた。

「来てたのか、滅、兄貴」

「当たり前だ」

だよな。俺はゼアから召喚されるライダーモデルで変身してんだから。ゼアと直接コンタクトが取れるこの二人にバレないほうがいい。

ってことは、だ。

「アイツにショットライザーを渡したのお前らか？」

「人聞き悪いこと言うんじゃない、俺達はアイツの部屋の前にショットライザーを置いただけだ」

「同じじゃん……。」

「そう言うな、雷も迅が認めた男の力を見たかっただけだ」

「で、兄貴の目から見て俺はどうだった？」

「……ああ、迅が認めるわけだと思ったよ」

そういつた兄貴はポケットに手を突っ込み、そこから見たことのない形の青いプログライズキーを俺に差し出す。

「なんだこのキー？」

そのキーは左側にグリップのようなものがついているウルフの



キーだった。そこには『ASSAULT WOLF』と記されていた。

「ソイツは親父がゼロワンに渡すように言ってたキーだ」

「ってことは、コイツはアラタさんの作った新しいキーってことか？」

「いや、それはロー」

俺は兄貴が口にした次の言葉に耳を疑った。

「ローアークが生み出したプログライズキーだ」

## イツトキの別れ

——アクセル共同墓地。

いくつもある墓の中で少しだけ立派な墓。刻まれているのは『ヒデ  
ン・アラタ』の名前が彫られている。

俺、アクア、めぐみん、ゆんゆん、フタバ、ユア、滅、兄貴の八人  
は共同墓地に作られたアラタさんの墓の前で手を合わせる。俺と姉  
妹と兄貴、滅は手に平を合わせ冥福を祈っているが。アクア達は両手  
の指を組んで祈るように手を合わせている。

やっぱりこつちと地球とは違うところが多いんだな。アラタさ  
ん組はやっぱ、日本式なんだな。

場面は変わって、アクセルの門。

「それじゃあ、俺達は行くぜ」

「ああ、迅のこと頼むぜ」

「任せておけ」

今日は滅と兄貴が紅魔の里へと出発する日だ。迅の復活のために  
もラボをこちらに移すためにもやるのが色々あるからな。兄貴も  
武器の作成とか向こうのほう都合がいいということについていく  
ことになった。

「フタバ、ユア。こいつのサポートしつかりやれよ」

「はい」

「……………」

兄貴の言葉にユアは素直に答えるが、フタバはそっぽを向いて答え  
ようとしない。その様子に兄貴は額に青筋が浮かぶ。——ヒュー  
マジアって青筋浮かぶんだ……………」

「フタバア！返事はどうしたあ!?!」

「……………はい」

兄貴の怒鳴り声にビクツと震えると、フタバはしぶしぶながら答え  
た。すごい迫力だな。というか、俺やアクアまでビビった。という  
か、ゆんゆんなんて半泣きになってるし。

フタバのヤツ、あの戦いから更に余所余所しくなったような気がす

る。余計なことしちまったかなあ……。

そして兄貴は今度はアクアたちに視線を向ける。流石にさっきのあれのあとなので萎縮する三人。

「お前らも頼むぞ、ゼロワンドライバーのメモリーを見たところこいつはいざとなったらぜってえ無茶をする。お前らがしつかりサポートしねえとマジで早死するぜ」

「は、はいッ!!」

さっきの今だから三人は直立になって返事をする。あのアクアマでこうなるとはな……。

「よし、良い返事だ!ちゃんと仕事してたら、暇な時間にお前ら用のライズフォン作つといてやるよ」

そう言つて、兄貴は満足げな様子で自分の耳のモジュールに触れる。すると、空から俺や滅のバイクと違い四輪のライドチェイサーが落ちてくる。俺たちのバイクと大きく違うのはなんかガトリングみたいな武器が搭載されているところか。

俺のライドホッパーや滅のライドスティングァー、そして、このライドチェイサーはゼアに搭載されているものを俺のドライバァーやモジュールでオーソライズすると、空から転送される。ブレイキングマシンモスと同じシステムってことだ。あれと違って飛行できないから落ちてくるつてわけね。

滅も自分の愛車であるライズスティングァーを呼び出すとそれに跨る。

「なにかあれば逐一連絡しろ、こちらからも何かあれば報告する」

「了解だ」

「——フタバ、ユア、体壊すなよ」

そう言つと、滅はバイクを発進させていった。兄貴もそれに続くように走り去つていった。

「行つたか……。」

「……………」

「あつ、ちよ、フタバッ!」

二人の姿が見えなくなるとフタバは一人でスタスタと街の方に

戻っていいこうとする。アクアが慌てて呼び止めようとするが無視してあるきさつて行ってしまふ。

「フタバツ！すまない、カズマさん。先に屋敷に戻る」

「……ああ、頼むわ」

その後を姉であるユアが慌てて追いかけていった。

「これは、まだまだ時間が掛かりそうね」

「だな」

アクアの呟きに俺は苦笑いを浮かべながら同意する。

「カズマ、今日はこのあとどうするんですか？」

「もう昼過ぎだしなあ、クエスト受けるにも中途半端だし。俺はバイクをもう少しうまく乗れるように練習するつもりだ」

「バイク……カズマ、カズマツ！」

「わかったわかった、ついでに爆裂散歩に連れてってやるから。ゆんゆんとアクアはどうする」

「うーん、私は帰ってお昼寝でもしようかしら」

「お前もうちよい規則正しい生活送らないと太るぞ」

「……女神は太らないのよ」

本当かあ〜？

「で、ゆんゆんはどうするよ？」

「わ、私はその……ユアさんが気になるので私も屋敷に戻ります」

「——お前らいつの間にか仲良くなったんだ？」

「フタバさんとはあまりお話できてませんが、ユアさんとはたまにお話するんですよ」

「へえ、どんな話をするんだ？」

「そ、それはちよつと……私の口からは」

ゆんゆんはそう言つて口ぐもる。

「カズマ、ちよつとデリカシーが足りませんよ」

「女同士の会話の内容を効くのはマナー違反でしょう、更にモテなくなるわよ」

「おい、俺がまるで最初からモテてないみたいない方やめろ、やめてください」

アクアとめぐみんにジト目で見られる。だが確かに今回は二人の言うとおりだ。親しき仲にも礼儀ありつてやつだよな。

それにしても、ユアかあ。

俺はポケットからラッシンググチーターとライトニングホーネットを取り出す。未だに渡せていない二つのプログライズキー。もし、あいつもフタバと同じことを考えていると思うと、渡しづらいなんだよなあ。

ゆんゆんに渡してもらおうって手もあるだろうけど兄貴達に自分で渡せって言われてるしなあ。

つつても、二人の体調が戻りつつある今。コレを渡さないわけにはいかないし。

今夜辺り話をしてみるか……しかし、なんて話したもんか。

俺はユアと話すきっかけを考えるのに丸半日を費やした。おかげで集中力が増したのか、バイクのテクがうまくなったような気がした。

## 夜のカイワ

「それでカズマさん、話とはなんだろうか？」

俺は結局ストレートに話があるからリビングに来てくれというところで夜にユアを呼び出した、アクアたちにも頼んで部屋は二人つきりだ。俺はテーブルに腰掛けたユアの正面に座る。

「いや、お前とはこうやって面と向かって話した機会がなかったからな。色々話を聞きたいんだ。」

俺はそのタイミングでポケットからラッシンググチャーターとライトニングホーネットのプログライズキーを机の上に置き、ユアの方に差し出す。

「これから一緒に戦っていくわけだしな」

「なるほど。滅と雷から話は聞いているのか」

「まあ、そういうことだな」

更に俺は今朝、爆裂散歩の帰りに少し酔ったほうが話しやすいと思いついて買った酒瓶を机の上に置く。あまり強くないが味は確かな物を選んだ、酔って話ができなくなったんじゃ意味がないからな。

「酒はいける口か？」

「少しなら」

この国では飲酒に制限はない。もちろん、あまりにも若すぎると成長が阻害される恐れがあるので勧められないが、ユアは十六、俺と同じ年らしいから問題ないだろう。

準備しておいた氷の入ったグラスに酒を注ぎ、お互いにグラスを持つ。

「そんじゃ、乾杯」

「乾杯」

お互いにグラスをかち合わせると互いに口に含む。うん、うまい。

「それで、私から何が聞きたい？」

「……そうだなあ、お前この時代でやりたいことってあるか？」

「目標、夢というわけか？」

「そんなところだ」

やっぱ、俺が聞ける話題といえはこんな話題しかなかった。けど、やっぱりそういうものから人の本質ってやつは見えてくると俺は考えている。

「で？なんかあるのか？ないなら気になることとか」

「勿論、ある」

ほう、あるのか。

「聞いてもいいか？」

「そうだな、私の夢は——人とテクノロジーが共存する世界だ」

人とテクノロジーが共存する世界？

「ちよつと壮大過ぎてよくわかんないな」

「まあ、そうだろう。簡単に言うと、人がテクノロジーを支え、テクノロジーが人を支える世界。言うなれば先生や滅たち、そして、貴方や迅のような関係が理想だ」

「へえ……」

「といつてもまだ、具体的なプランがあるわけじゃない。さらにいえばテクノロジーは人間の影響を多く受けるから、扱いが難しい。人間が扱いを間違えばテイブレイクの焼き直しだ。」

「いうなれば……そう、私の最初の目標は人とテクノロジーの関係を調停する立場になりたいと思っている」

「夢物語のように聞こえるし、笑ってくれてもいいぞ……って、何故泣いてるんだ？」

「いや、スマン……」

「あまりに立派な夢に関心を通り越して感動してしまった。俺と同じ年なのに大したものだ。」

「今度はこちらから聞いてもいいだろうか？」

「んっ、なんだ？」

俺は鼻をすすりながらユアの質問を聞き返す。

「貴方から見た迅のことを。滅や雷に何があったかは聞いたが、やはりこういうことは直接聞きたい」

そっか、まあ当然といえば当然だな。

「わかった、じゃあまずは俺とあいつの出会いから」

……そうして話すこと三十分。

「じんにいゝゝゝ、なんでしんじやったんだよゝゝゝ」

俺が迅の話をしていると急にユアは頬を染めた状態で机に突っ伏していた。完全に酔いが回っている。この酒、そんなに強くはないはずのものなんだが……。

「おつ、おい……大丈夫か？」

「らいじようぶじゃないよゝゝゝ……じんにいはしんじやうし、ほろびといかずちにはどつかいっちゃうし、なきねえはどこいるのかわかんないし、ふたばちゃんはツンケンしてるし……ああいうのゝなんていうんだっけ？そそ、『はんこうき』？ふたばちゃん『はんこうき』だつて！あははははは!!」

絡み酒から、泣き上戸の笑い上戸か、呂律も回ってねえ……こいつ酒弱すぎるだろ……！さつきまでのできる女感からのギャップがスゲエな……ダクネスのときも思ったけど。

「あゝもう、暑い……」

「ちよ、おまつ！」

酔いが行くところまで行ってしまったのか上の服のボタンを外し始めるユア……何という棚ぼた……じゃねえ！こんなところ誰かに見られたら色んな意味で終わる！俺は正面からユアの服のボタンを直そうとする。

「ほらっ！ちゃんと着ろ！」

「えゝ、やだあゝ。あつゝゝ」

「駄々っ子か、お前は！」

ああ、もう、こんなところ誰かに見られたらどうどうすんだ……。

だが、悪いことは続くもので、

「ねえゝ、さつきからうるさくて眠れないんですけどゝ」

「なんの騒ぎですか？話し合いならもつと静かに……。」

最悪なタイミングでアクア、めぐみん、ゆんゆん、さらに最悪なことにフタバまで寢室からできてきた。そして、その光景（傍から見たら俺がユアを襲うシーン）を見た四人の反応はそれぞれ目に見えるものだった。



「か、カズマくんのケダモノ！」

「見損ないましたよ、カズマ！」

「サイツテーね、私達しばらく街の宿で暮らすから」

「ちよ、まっ！」

目尻に涙を浮かべ、顔を真赤にして飛び出す年下二人。そして、ア  
クアはゴミを見るような目で俺を一瞥すると冷たい言葉をかけて、俺  
が弁明するよりも早く二人のあとを追いかけていく。

追いかけてようしたがそうはさせないとばかりにシヨットライザー  
を構える女狼が一匹、俺の前に立ちふさがる。

「てんめえ……人に夢だのなんだの言っておいて、姉貴に何してんだ  
コラアアアアア!!!」

「だから人の話を聞けつてえええええええ!!」

俺の悲鳴にも似た絶叫が夜のアクセルの街に響いた。

——その後、酔いを覚ましたユアに俺に無実を証明してもらい、  
平謝りするゆんゆんたちに、ちよっとした仕返しとして「あゝいいよ、  
いいよ。どうせお前たちの中の俺は泥酔した女の子を無理矢理脱が  
すようなケダモノとして映ってんだろうし。反応としては間違つて  
ないよ」といって、少し冷たく当たるとゆんゆんは完全に涙目、めぐ  
みんやアクアも珍しく弱気。フタバに聞してはもともとあんまり喋  
らないから変わらなかつたが、当の本人であるユアは俺の顔を見るた  
びに赤くなる始末であった。

## セイバー放送開始記念（ちよつと遅いけど）コラボ回

「ウイズ、こんちは〜！」

「あら、カズマさん！それに、皆さん、お久しぶりですね！」

久々にアクセルの街に集まった俺達はウイズ魔導具店に立ち寄っていた。

アークとの戦いが終わり、使命が終わった俺達はそれぞれやるべきことを見つけ今はそれぞれの場所で頑張っている。そんな俺達が久しぶり集まり、久々に街を見て回りたいということをやっぱりここは外せないということとで寄ることになった。しかし、俺達より先に先客がいたらしく、見慣れた銀髪が見えた。

「か、カズマくん……!?!」

「おっ、クリスじゃん。お前も来てたんだな」

「う、うん……。」

何故か俺の顔を見てもじもじとするクリス……しきりに指に髪を絡めてくるくると弄っている。あれ？

「髪伸ばしたのか？」

「う、うん……。」

「へえ、結構変わるもんだな……うん、ちゃんと女子に見えるぞ」

「そ、そうかなあ……って、それって前まで女子に見えなかったってこと!?!」

「今更かよ」

「むー！」

頬を膨らませて俺を見上げるクリス。何この可愛い生き物？

「……………」

「いでででで!!無言で頬を引っ張るなよ、めぐみん！」

やはり、他の女子と話しているのは気に食わないのかめぐみんが俺の頬を引っ張る。身長差があるから結構痛いんだぞ。

俺達はそれぞれ思い思いの場所に座ったり、立ったりする。親方が改装したおかげでずいぶん広くなったよな。

「今日はバニルがないんだな」

「はい。最近の技術改革で随分といい商品を入荷できると言って張り切ってでていきました。だから、皆さんのご活躍は私の店にまで届いてますよ」

「そうだよなあ、ユアは王城で技術顧問、兄貴と亡はその下でヒューマギアの派遣紹介」

「フタバさんと滅くんは検察官、多少強引な捜査も国王から許可されてるって聞いたよ」

「ああ、あの一件で国王も貴族の腐敗具合に危機感を感じたのが効いたみたいだ」

あの一件、魔王城でアークを倒したあとに起きた国中を巻き込んだ大事件。それを語るのはまた後日に。ともかくその一件でかねてより考えられていた腐敗した貴族の払拭が行われることとなった。横領などを始めとした様々な犯罪行為をした貴族は爵位剥奪などといった罰を与えられることになったのだ。

その捜査をする人物として選ばれたのがフタバと滅だったわけだ。というか、この二人検察官というより尋問官のほうが向いてる気がするけどな。

「おかげで私達正統派の貴族の仕事が増えて困っている、全く嬉しい悲鳴だ。私もそろそろ誰かと身を固めて少しくらい楽をしたいものだ」

「わ、私もそろそろ紅魔の里の長となるものとして隣に立つ人を選ばないと、なんて〜……。」

ダクネスとゆんゆんが意味ありげな目を俺に向ける。いや、まあね……俺だって直接告白されれば嫌でも気持ちに気づくよ、だけどさあ！なんて答えろってんだよ……。

そんな事を考えていると、めぐみんが俺の腕に抱きついてきた。

「ああっ、めぐみん！」

「あざといんですよ二人共！いちいち回りくどい言い方をして、生憎と私はガンガン行きますので、そのつもりで！」

言い終わると同時に更に強く俺の腕を抱くめぐみん。あれ？気のせいかな若干前よりデカイ気が……。

いか〜ん！方が一にもそんなことを口走ったら、男が一人しかいない屋敷での立場が危うくなる！

「と、ところで、迅はシエロとどうなってんだよ？」

「え？ここで僕に話をふるの!？」

俺は迅を生贄にすることなどなんとか逃れる。

「そういえば二人はいつ結婚するのよ？私が結婚式で誓いの言葉をかけてあげるから、日取りが決まったら教えてね」

「いやいや！僕たちは確かに付き合ってるけど……シエロはまだアイドルとして活動中だし、せめて結婚は引退してからってことに……」  
そう言っ珍しく顔を赤くして困ったように頭をかく迅。思ってたより順調に進んでた二人の關係に皆驚く。

魔王を倒した報酬として晴れて人間になった迅。アクセルハーツのマネージャーとして彼女たちのスケジュールを管理しているらしい。恋人のシエロとも仲は良縁らしい。向こうの世界ほどスキャンダルに厳しくないこの世界では二人の交際は認知され、寧ろファンの増加に一役買ってるとか。

まあ、ダニエルみたいな奴は発狂するだろうが、まああれはファンというより……ストーカーだったしな。

「ああ、そうそう、カズマ。リアが久しぶりに会いたって言ったよ」

「リアが、俺に？なんで？」

「新曲ができたから聞いてほしいってき、なんでもラブソングらしいよ」

『なっ!』

「カズマ、貴方リアにまで！」

「説明してもらおうか、カズマ!？」

「カズマくんいくらなんでも気が多すぎるよ！」

「あ、あたしもちよつとそういうのはいけなと思うなく……。」

「全く、貴方という人は……。」

「おい滅、こいつしよつぴくぞ。思わせぶりな態度で女をたぶらかした罪だ」

めぐみんとダクネス、ゆんゆん、そして何故かクリスが俺に詰め寄りユアは額に手を当て呆れている、そして、一番危ないフタバがショットライザーの銃口を俺に向けている。いや、あぶねえって！「はあく、皆この元ヒキニートの何がいいのかしら……まあ、悪くないのは認めるけど」

向こうでウイズが出した茶を飲んでいるアクアがなんか言ってるが今はそれどころではない、何か、なにか話題を変えなければ！

そんな俺の願いが届いたのかの気になるものが視線の先にあった。「なあ、ウイズ。このちっこい本なんだ？」

俺が棚から手にとったのは文字通りちっこい本。手のひらに収まる程度のサイズのそれは真っ白で紙というより鉄かなんかのでできたようにしつかりとした重さがあった。

「ああ、その本はバニルさんがどこからか拾ってきたものらしいんです」

「バニルが？なんの魔導具なんだ？」

「それが……バニルさんの力を持ってしてもわからないらしくて、ただ、皆さんと近い力を感じると」

「俺達とって……。」

要するに仮面ライダーの力か？

まさか、あの事件でどっかのライダーが忘れてったものじゃないだろうな？

あの事件とは、タイムジャッカーなるものがこの世界を中心に世界を融合させライダーを滅ぼそうと言う計画を企て、その計画を察知した仮面ライダーディケイド門矢士さんと仮面ライダージオウ常磐ソウゴさんや様々なライダーの方たちと協力してこの世界を救った事件のことだ。いやあ、いきなりゼロライナーが現れたときは驚いた。この話もまた後日。

でも本に関わりのあるライダー……可能性としては仮面ライダーWのフリーップさんか？だけど、どうみても地球の本棚の本じゃないよな。

俺は試しに本を開いてみると、俺の視界は真っ白い光に覆われた。

「い！——ズマ！」

——声が聞こえる。

「い！——おい！——おい！——しっかりしろ、カズマ！雷落とすぞ！」

「わあー！」

聞き慣れたフレーズに体を起こすと兄貴が一瞬驚いた表情をしていたが、すぐに安心したように微笑む。

「やつと起きやがったか」

「兄貴……？俺は一体」

「さあな、お前があの本を開いた瞬間気づいたらここにいた。」

「……？？」

俺が視界を転じるとそこは俺がよく見慣れた現代社会の建物が並ぶ場所だった。

「おいおい、まさかここ日本かよ？」

「二ホン？……ここが親父の故郷の世界なのか？」

「ああ、あの建物は間違いなく日本の建物だからな」

どうなってるんだ？まさかまたディケイド絡みじゃないだろうな？

俺はたまに面倒事に巻き込んでくるピンク野郎のことを思い出す。

こんなことをするやつなんてあの人しか考えつかないんだけど……。

だが、それを口にする前に兄貴の切羽詰まった声が聞こえてきた。

「！おい、カズマ！」

「なんだよ、兄……なんだありやあ……!？」

俺が兄貴が見ている方向に視線を向けると建物がまるで燃えた紙のようにボロボロと崩れ始める。

「あれもこつちじゃ普通、なわけねえよな」

「ああ、あんなのは初めて見る……」

「はっはっはっ！もうすぐ本が完成するぞ！」

笑い声が下方向を見てみると胸に本をつけた頭に手がついている岩のような異形が立っていた。そして、やつの手には半分黒く染まりかけた白い本がある。あれって、俺がさっき開いた本に似てる。

「む？なんだまだ人間がいたのか」

怪物は俺達を視界に入れると見下したような態度でこちらを向く。

「おいっ、この街の異変はてめえの仕業か？」

「だったらなんだ？」

「止めるに決まってるだろうが！」

俺と兄貴が怪物に駆け出し、怪物に殴りかかろうとするが、

「ふん、人間ごときに何ができる！」

やつの頭についた二つの腕が俺達に向かって襲いかかってくる。

「くっ！」

「あぶねえ！」

俺達は地面を転がって回避する。

「つく、何だよあいつは？」

「さあな、だが……見たところ放っておける存在じゃなさそうだぜ」

『Forcerizer:!!』

「みたいだな」

『Zeroone Driver!』

兄貴がフォースライザーを装着すると、俺もゼロワンドライバーを取り出し装着し、それぞれプログライズキーとゼツメライズキーを構える。

「兄貴とタッグなんて久しぶりじゃね？」

『Jump!』

「確かにアルカンレティアぶりか。いっちょ派手にやってやるかあ！」

『Do—Do!』

互いに久しぶりの共闘で高揚しているのか、ニヒルな笑みを浮かべて互いのキーを起動する。

「おうっ！」「変身！」

『Progrize! Rising Hopper!』

『Forcerize! Break Down!』

「なんだとっ!？」

「うおおおおおおお!!」

俺達に変身をしたのに驚いている怪物を無視し、俺達は同時に駆け

出し怪物に殴りかかる。奴はそれをギリギリで回避して後ろに飛ぶ。  
「貴様ら、剣士の仲間か!？」

「剣士? いや、確かに仲間に剣士はいるけど……」  
「迅とか、ダクネスとか、いや、あいつの剣は当たらねえけど……」  
「おのれ、まもなく本が完成するといふところ……!! ここまで来て  
邪魔はさせん!」

そう叫ぶと怪物は再び頭の手を俺達に飛ばしてきた。俺達は互いにその攻撃を避ける。俺は壁を足場に走り、怪物の頭を蹴り飛ばす。  
「ぐおおー!」

「カズマ、どいてろ!」

振り返ると兄貴がアタツシユシヨットガンを構えており、俺が避けるより早く、引き金を引く。

「うおおおおおおお!! あつぶねえよ、兄貴!」

「おつ、おの……」うっせえ「ぐえ!」

俺は発砲された弾丸をすれすれのところ回避し、立ち上がろうとした怪物の顔面に裏拳を食らわせた。

「兄貴、一気に決めるぞ!」

『Everybody Jump!』

『Metalrize! Metal Clust Hopper!』

メタルクラスタホッパーに変身し、プログライズホッパーブレードをオーソライザーにかざす。

『Finalrize!』

「おうよ!」

『Zetumetu Dystopia!』

「喰らいやがれ!」

兄貴もフォースライザーのアンカーを開閉し、両手から雷を放ち岩の怪物の動きを止める。

「はああああああ!!」

『Final Stlash!』

「ぐわああああああ!!」

そこへ、プログライズホッパーブレードから放たれた飛電メタルの



斬撃が怪物に命中し、岩の怪物は爆散した。

怪物が消えると壊れかけていた建物たちが治っていく。

「なんだったんだ、あれ？」

「倫太郎、確かこっちだったよな！」

「待ってください、飛羽真君！様子がおかしい！」

「ん？」

変身を解こうとした俺達の耳に慌ただしい声が聞こえる。そちらを見てみると、二人の青年が立っていた。そして二人共腰に剣がさしてあるドライバーをつけていた。

コレが俺、仮面ライダーゼロワン佐藤和真とこの世界の仮面ライダー。仮面ライダーセイバー、神代飛羽真との出会いだった。

【ネタバレ注意】この素晴らしいライダーに祝福を！  
REALTIME Sideアルカンレティア&ア  
クセル

——アルカンレティア。

「きやあああああ!!」

「逃げろおおおお!!」

水と温泉の都、アルカンレティアは現在混乱を極めていた。

「一人残らず処理しろ!!」

「了解!!」

そこには灰緑色のボディにむき出しのパイプを全身に纏った武装兵『仮面ライダーアバドン』達がアルカンレティアの住民を襲っている光景が広がっていた。

——現在、アルカンレティア、否、世界中でアバドン達が出現し人々を襲っているのだ。彼らはユアや迅が持っているショットライザーやスラッシュライザーとよく似た兵器、ショットアバドライザー、スラッシュアバドライザーを用い人々を襲っている。

「喰らえっ!」

アバドンの一人が一つのキューブを道端に放ると、中から赤黒い煙が吹き出す。

「ぐっ!うう……。」

それを吸った人間がバタバタと倒れていく。こんな光景が世界中で起こっていた。しかし、この街には偶然にもそんな光景を見せられて黙っていないご神仏がいた。

「ちよっと、うちの信者たちになにしてんのよ!」

そこへ現れたのは黒いマスクを装着したアクアだった。彼女は自分の信者たちを襲ったアバドン達を睨みつける。

「アクシズ教徒たちは樂園に選ばれなかった、よっとここに選定を下す!」

「樂園? あんたら何いってんの!?!」

アバドンたちはアクアの質問に答えずショットアバドライダーを向ける、だが、それよりも早くアバドン達の身体に火花が散りその場に崩れる。

「ライダーじゃねえやつがでしゃばんな!」

「フタバ!」

アクアが振り返ると、そこにはショットライザーをアバドンに向けているフタバが立っていた。彼女も口元をガスマスクで防護している。

「あんた、なんでここに……?」

「話はあとにしろ。テメエは引っ込んで、自分の信者の避難でもしとけ!」

『BULLET!』『AUTHORIZE!』

親指でシューティングウルフキーをこじ開けると、ショットライザーのライズスロットに乱暴に差し込み銃口をアバドン達に向けてトリガーを引く。

「変身!」

『SYOTRIZE!』『SHOOTINGWOLF!』

放たれた光弾は不思議な機動を描いてアバドン達にダメージを与えて、フタバのもとへと戻ってくる。

「ふんっ!」

帰ってきた弾丸を拳で殴り飛ばすと彼女の身体を右腕から装甲が覆いはじめ仮面ライダーバルカンへと変身を完了する。

バルカンは次々とアバドンたちを狙い撃つ、しかし、次から次へとアバドンたちは集まってくる。

『』『』『うおおおおお!!』『』『』『』

「こいつら、どっから湧いてきやがる……!」

『RANNPETIZIBULLET!』

~~~~~

——一方その頃。

「アイリス様!こちらに!」

王都からレポートしてきたアイリス、クレア、レインの三人がア

クセルの外れを歩いていった。クレアはアバドンたちが現れないか警戒しながらアイリスの手を引いて進んでいく。

しかし、アイリスの表情は暗い。

「お父様たちは大丈夫でしょうか……。」

レインとクレアは国王からアイリスを逃がすようにと命を受けアクセルの街に避難してきた。この街には仮面ライダーであるダクネスやカズマがいる。ここほど安全な街は他にはないだろう。しかし、父を置いてきたしまった娘の心境は複雑だった。

「大丈夫です、王都にはユア殿や亡殿もいます！仮面ライダーが二人もいらつしやるんです、それに各地でもみなさんが戦っています。すぐに混乱は収まるはずですよ」

「皆さんが……。」

レインの励ましの言葉にアイリスの目にわずかながらの希望が映る。自分に夢とは何かを教えてくれた兄と慕う彼も、自分が姉のように慕う双子の姉妹も、自分にいろんなことを教えてくれた人間ではない友人も戦っている。

ならば、自分も王女としてなんとしても生き抜かなくてはならない、その王族の責務をはたさなければならぬ。そう思っていたり顔を上げる。

しかし、

「おいおい、ホントにお姫様がいますぜ」

「あの男からの情報はたしかだったようだな」

その道を塞ぐように曲がり角からアバドン達が現れる。その数、二十人は超えている。

「なぜここが……！」

「知る必要はない、ここで死ぬお前たちにはな」

アバドンは銃口をアイリスに向ける。それを守るようにクレアが前に出るが、アバドンは容赦なくその引き金を引いた。バンという発砲音にクレアは瞳を閉じる。

「……………」

しかし、一向にやってこない痛みを目を開く。そこにいたのは

……。

「ララテイナーナ！」

「ダステイネス卿！」

そこにいたのは弾丸を弾き飛ばしたサウザンドジャツカーを構えるダクネスの姿だった。

「シンフォニア卿、アイリス様を！」

「了解しました！」

『ZETUMETU EVOLUTION!』

アイリスたちを守るようにして前に立ち、サウザンドライバーを着しアウエイキングアルシノゼツメライズスキーをゼツメライズスロットにセットして、アメイジングコーカサスキーを構えスターターを押す。

『BREAKHORN!』

「変身！」

『PERFECTRIZE!』『When the five horns cross, the golden soldier THOUSER is born.』

コーカサスキーをライズスロットに『ゲートリベレーター』が展開されコーカサスライダモデルとアルシノロストモデルがアバドンたちを薙ぎ払い、ダクネスの背後で合体し、ダクネスを仮面ライダーサウザーへと変身させた。

サウザーは弾丸の雨をサウザンドジャツカーで防ぎながら向かってくるスラッシュアバドライザーを持つアバドン達をなぎ倒していく。

「貴様らは一体何者だ!?何が目的でこんなことを！」

「邪魔するな!我々は選ばれたのだ!!」

「この世界を捨て、楽園ガーデンアへと旅立つ。そのために、貴様らを消す！」

「話しても無駄か……!ならば薙ぎ払うのみだ！」

話の通じないアバドンにコレ以上話すのは無駄だと察したダクネスは早々に殲滅に思考を切り替える。

「うじやうじやとうつとおしい！」

『JACKRIIZE!』

「はあっ!!」

『JACKINGBREAK!』

イナゴのように群がるアバドンに皮肉を飛ばしながらグリッPEndを引つ張り、『シャイニングアサルトホッパー』の能力から『シャインクリスタル』を召喚する。展開されたクリスタルは弾丸を防ぎながらアバドンたちをレーザーで攻撃し一掃した。

攻撃を受けたアバドンたちは力なく地面に倒れ伏すのを確認し、ダクネスはドライバーからキーを引き抜き、変身を解除してアイリス達に駆け寄る。

「アイリス様、ご無事でしたか!?!」

「ええ……ありがとう、ララティーナ」

「ここは危険です、ギルドに向かいます。あそこには私以外にも戦えるものが集まっています」

「わかりました、護衛をお願いしますね」

「もちろん」

ダクネスを先頭に一同はギルドへ向かって歩を進める。その途中、クレアがダクネスに尋ねる。

「ダステイネス卿、奴らは一体何者なのだ？あの装備、あれはまるでユア殿や迅殿達が使っていたものと同じ……。」

「私にもわからない……。今は迅や雷達が調べているはずだ」

「あの……ララティーナ……。」

「なんででしょう、アイリス様?」

「お兄様……カズマ様は今、どちらに?」

「……………」

アイリスの質問に足を止めて沈黙するダクネス。

この自体に誰よりも早く動いてるはずの人物の不在、そのことを不思議に思わない人間はいなかった。そして、ダクネスの答えは予想に反して絶望的なものだった。

「カズマは……今、行方がわかっていないのです」